

笠利町文化財調査報告第28集

マツノト遺跡

MATUNOTO SITE



2006年3月

笠利町教育委員会

序文

本書『マツノト遺跡報告書』は文化庁、鹿児島県教育庁の遺物整理補助事業を受けて笠利町教育委員会が平成15年から17年に整理調査を行い、その成果をまとめたものです。

マツノト遺跡は平成3年（1991年）にリゾート開発に伴い一部民間費用負担により発掘調査が行われました。発掘調査の結果、奄美諸島においてはじめて目にするような遺物の出土が相次ぎました。出土遺物は遣唐使時代から律令社会、鎌倉幕府まで日本国形成と交易、交流を示す貴重な資料として注目されてきました。

これらの資料を中心に國學院大學鈴木靖民教授をはじめ多くの学者や専門家によるシンポジウム「よみがえる古代の奄美」が平成7年1月に笠利町赤木名小学校体育館にて地元をはじめ全国から大勢の古代史ファンが集い盛会に開催されました。このことは笠利の遺跡から全国に発信できる貴重な資料として奄美諸島が注目されました。その資料は注目されながらもバブルの崩壊とともにリゾート計画の企業も完全に撤廃したため、資料を整理し報告書としてまとめる費用を捻出することができなくなりました。職員の地道な作業でも膨大な出土資料のためしばらく収蔵庫の中で休眠状態になりました。このような事例が全国でも多いことから文化庁と県の補助事業が適用されることになり、日の目を見ることが出来ました。

資料整理は3年間という時間を費やし、多くの研究者や行政、関係者の手を煩わせながら進められてきました。特に熊本大学考古学研究室の先生方や学生にはあらゆる面でお世話になりました。

笠利町教育委員会としては最後の仕事になり、3月20日からは合併により奄美市としてスタートいたします。新市においてもこうしたシマに残る文化財を大切に調査し活用する事業は継続されます。本報告書が研究者はもちろん地元においても歴史教育に役立てられる貴重な資料であり、地域の宝の活用として多くの方々に活用されれば幸甚に思います。

最後に報告書作成に携わった多くの関係各位に謝意を表します。そして文化財愛護に対する新奄美市の皆様方のご協力とご指導をお願い申し上げます。

2006（平成18）年3月7日

笠利町教育委員会
教育長 山野利光

目 次

第Ⅰ章 調査にいたる経過

第1節 調査にいたる経過	1
第2節 調査の組織と調査概要	2

第Ⅱ章 平成3年度発掘調査の成果

第1節 奄美大島マツノト遺跡の位置	4
第2節 自然的環境	6
第3節 マツノト遺跡の概要	14
1. 調査の方法	
2. 層序	
3. 遺物の出土状況	
第4節 出土遺物	17
1. 土器	17
(1) 1類土器	17
(2) 2類土器	24
(3) 3類土器	61
(4) 4類土器	64
(5) 5類土器	64
2. 土製品	66
3. 骨製品	66
4. 石器	66

第Ⅲ章 出土遺物の分析

68

第1節 土器	68
1. 1類土器の分類	68
2. 胎土による形式分類	68
3. 土器の型式分類	68
4. 底部の分類	69
5. 底部の層位的検証	70
6. I類土器型式分類の検証	70
7. 口縁部の型式分類	70
8. マツノト遺跡の兼久式土器型式分類結果	73
9. 分類における時間差	75
第2節 貝製品	109
貝製品まとめ	142
第3節 サンゴ製品	163

第4節 マツノト遺跡出土のヤコウガイについて	168
1. 調査の方法	168
2. 調査結果	168
3. 出土点数ならびに殻の大きさ別によるヤコウガイ利用の実態	170
4. 殻の割り取りについて	172
5. 小結	177
第5節 マツノト遺跡の金属製品	179
(1) 青銅製刀装具	179
(2) 鉄鎌	179
(3) 刀子	179
(4) 釣針	179
(5) 棒状鉄器	179
(6) 板状鉄製品	179
(7) 輸羽口	179
(8) 鉄滓	180
(9) 小結	180
第6節 マツノト遺跡1991年調査で採集された脊椎動物遺体群	183
1. 資料と分析方法	183
2. 分析結果	183
3. 考察	186
第Ⅳ章 平成16年度層位確認調査の成果	200
第1節 調査の概要	200
第2節 調査の目的と方法	200
第3節 層序	201
第4節 遺物出土状況	204
第5節 出土遺物	204
第6節 小結	204
第Ⅴ章 総 括	
1. 総括	207
おわりに	209

表 目次

第1表 笠利町遺跡分布表	8
第2表 奄美考古歴史年表	9
第3表 出土区・器種別部位別分類個数データ (1)	18
〃 (2)	19
第4表 調査区別遺物出土数表	20
第5表1 形式層別分類表	21
第5表2 形式胎土分類	22
第6表 マツノト遺跡出土土器文様分類基準	23
第6表A マツノト遺跡型式分類抽出基本表	24
第7表 1類土器出土区別型式分類表	25
第8表 F無文、2、3類土器出土区型式分類表	26
第9表 土器文様型式分類基準層位表	27
第10表 底部出土区別型式分類	28
第11表 底部胎土分類 (安良川遺跡)	29
第12表 底部層位別表	30
第13表 底部層位別棒グラフ	30
第14表 3類土器観察表	65
第15表 マツノト遺跡出土土器層位別分析表	74
第16表 兼久式土器文様型式分類、出土層位表	76
第17-1表 オオツタノハ・オオベッコウガサ製品観察一覧	109
第17-2表 〃	110
第18-1表 ヤコウガイ貝匙観察一覧	111
第18-2表 〃	112
第19表 ヤコウガイ切り取り残存部観察一覧	112
第20表 ヤコウガイリング状製品観察一覧	113
第21-1表 ヤコウガイ有孔製品観察一覧	114
第21-2表 〃	115
第21-3表 〃	116
第21-4表 〃	117
第21-5表 〃	118
第22表 ホラガイ製品観察一覧	119
第23表 大形イモガイ製品観察一覧	121
第24表 小形イモガイ (aタイプ) 観察一覧	123
第25-a表 小形イモガイ (bタイプ) 観察一覧	124
第25-b表 〃	125
第25-c表 〃	126
第25-d表 〃	127
第25-e表 〃	128

第25-f表	〃	129
第26表 ノシガイ製品観察一覧		130
第27-a表 卷き貝製品観察一覧		130
第27-b表	〃	131
第28-a表 タカラガイ製品観察一覧		131
第28-b表	〃	132
第29-a表 二枚貝有孔製品観察一覧		134
第29-b表	〃	135
第29-c表	〃	136
第29-d表	〃	137
第29-e表	〃	138
第29-f表	〃	139
第29-g表	〃	140
第29-h表	〃	141
第30表 ムラサキチョウガイ有孔製品		142
第31表 サンゴ製品観察一覧		165
第32表 ヤコウガイ殻欠損部位別集計表		169
第33表 ヤコウガイ殻被熱部位別集計表		170
第34表 大きさ別出土点数		171
第35表 ヤコウガイの大きさ別出土数②		172
第36表 割り取りと利用に関する分類		173
第37表 欠損部位別出土点数①		174
第38表 欠損部位別出土点数②		174
第39表 欠損部位・大きさ別集計表		175
第40表 マツノト遺跡1991年調査の4区から採集された骨類資料の概要		187
第41表 マツノト遺跡1991年調査で採集された脊椎動物遺体の種名一覧		188
第42-1表 マツノト遺跡1991年調査4区から採集された魚類・ヘビ類遺体の同定結果		191
第42-2表	〃	192
第42-3表	〃	193
第42-4表	〃	194
第42-5表	〃	195
第42-6表	〃	196
第43表 マツノト遺跡1991年調査4区から採集されたウミガメ・イルカ／クジラ類遺体の同定結果		197
第44表 マツノト遺跡1991年調査4区から採集されたイノシシ遺体の同定結果		197
第45表 マツノト遺跡1991年調査4区出土のイノシシ顎骨・臼歯の記載		198
第46表 マツノト遺跡1991年調査で採集された両生類・鳥類・哺乳類（イノシシ以外）の同定結果		198
第47表 マツノト遺跡1991年調査4区から採集された脊椎動物遺体の組成		199

図目次

第1図	奄美諸島位置図	5
第2図	笠利町遺跡分布図	7
第3図	マツノト遺跡周辺地形図	12
第4図	マツノト遺跡地形図	13
第5図	マツノト遺跡グリット・遺物出土状況図	14
第6図	1区～4区、17区～20区遺物出土状況	15
第7図	5区～8区、21区～24区遺物出土状況	15
第8図	9区～13区、25区～26区遺物出土状況	16
第9図	13区～16区、半島区、31区～32区遺物出土状況	16
第10図	1区、1、2区出土土器実測図	31
第11図	2区、3区出土土器実測図	32
第12図	3区、4区出土土器実測図	33
第13図	4区、5区出土土器実測図	34
第14図	6区、7区出土土器実測図	35
第15図	7区、8区出土土器実測図	36
第16図	9区、10区出土土器実測図	37
第17図	10区～12区出土土器実測図	38
第18図	12区～15区出土土器実測図	39
第19図	15・16区、16区、17区、18区出土土器実測図	40
第20図	19区、20・21区、22・23区、22区、24区、25区、26区、31区、32区、A区出土土器実測図	41
第21図	B区、C区、D区、E区、F区、G区出土土器実測図	42
第22図	H区、I区、J区、半島出土土器実測図	43
第23図	グリット不明区出土土器実測図	44
第24図	グリット不明区出土土器実測図	45
第25図	土器実測図	46
第26図	1区、1・2区、2区出土底部実測図	47
第27図	2区、3区出土底部実測図	48
第28図	3区出土底部実測図	49
第29図	4区出土底部実測図	50
第30図	5区、6区出土底部実測図	51
第31図	6区、7区出土底部実測図	52
第32図	7区、8区出土底部実測図	53
第33図	9区、10区、11区、12区出土底部実測図	54
第34図	12区、13区、14区、15区出土底部実測図	55
第35図	15・16区、17区、18区出土底部実測図	56
第36図	20・21区、24区、25区、26区、31区、32区、A区出土底部実測図	57
第37図	A区、B区、C区出土底部実測図	58
第38図	D区、E区、F区、H区、J区、I区、半島区、表採出土底部実測図	59

第39図 表採、出土区不明底部実測図	60
第40図 3類土器（1）	62
第41図 3類土器（2）	63
第42図 4類土器	64
第43図 5類土器	64
第44図 土製品	66
第45図 骨製品	66
第46図 石器	67
第47図 突帯文別出土	70
第48図 突帯文別出土パーセント	70
第49図 突帯刻目有無分類	71
第50図 突帯刻目有無分類パーセント	71
第51図 突帯+沈線の有無	72
第52図 突帯+沈線の有無パーセント	72
第53図 刻目有+沈線の有無	72
第54図 Ac横刻目+沈線の有無	72
第55図 Ac横刻目+沈線の有無パーセント	73
第56図 底部分類タイプ	74
第57図 口縁部1, 2, 3層位別分類表	75
第58図 底部1, 2, 3層位別	79
第59図 マツノト遺跡出土兼久式土器層位による型式組列	77~78
第60図 マツノト遺跡土器分析	79
第61図 1類土器 Aエa 1~9、11 Aエb10	80
第62図 1類土器 Aエc12~13、16~21 Aオc14・15	81
第63図 1類土器 Aエd	82
第64図 1類土器 Aオd	83
第65図 1類Bエd 35 Bオd 36~39	83
第66図 1類土器 Bエa 40、41、2類土器 連点及び土器	84
第67図 1類土器 Bエd 44、45、47 スセン當タイプ土器	84
第68図 1類土器 Bエa 48、49 スセン當タイプ土器	85
第69図 1類土器壺形土器	86
第70図 2類土器 直線貼付文土器①	87
②	87
第71図 2類土器 曲線貼付文土器①②	88
第72図 2類土器 沈線文土器	89
第73図 オオツタノハ・オオベッコウガサ・ホシダカラ・フジツボ	144
第74図 ヤコウガイ切り取り残存部・ホラガイ製品	145
第75図 ヤコウガイ・巻き貝製品（貝匙）	146
第76図 ヤコウガイ貝匙	147

第77図	ヤコウガイ製品	148
第79図	巻き貝製品	149
第80図	二枚貝製品	150
第81図	サンゴ製品	166
第82図	ヤコウガイ各部名称ならびに計測位置	168
第83図	ヤコウガイの大きさ別出土分布①	171
第84図	ヤコウガイの大きさ別出土分布②	172
第85図	欠損部位別出土割合	174
第86図	欠損部位別被熱痕有無の割合	174
第87図	大きさ別出土点数の推移	175
第88図－1～3	I類の大きさ、III類の大きさ、IV類の大きさ別出土点数の推移	176
第89図	釣針	180
第90図	金属製品	181
第91図	マツノト遺跡1991年調査4区から採集された脊椎動物遺体の組成	189
第92図	魚類遺体の組成	190
第93図	マツノト遺跡の位置	201
第94図	マツノト遺跡調査区設定図	201
第95図	マツノト遺跡2004断面図及び出土土器実測図	202
第96図	Mトレーニング断面図および出土遺物分布図	203
第97図	主な出土遺物実測図	205

図版目次

図版 1	1類土器	90
2	タ	91
3	タ	92
4	タ	93
5	タ	94
6	1類土器 壺形土器	95
7	1類土器 タ	96
8	1類土器	97
9	1、2類土器	98
10	2類土器 沈線文	99
11	2類土器	100
12	2類土器 弧状突带壺形土器	101
13	2類土器（表採）弥生系土器	102
14	2類土器底部と口縁部復元土器	103
15	4類土器	104
16	3類土器	105
17	タ	106

18	4類土器	107
19	マツノト遺跡出土土器	108
20	貝製品	151
21	々	152
22	々	153
24	貝製品（ヤコウガイ有孔）	154
25	貝製品	155
26	々	156
27	々	157
28	々（イモガイ他）	158
29	々（二枚貝）	159
30	々（々）	160
31	々	161
32	ヤコウガイ匙製作工程	162
33	サンゴ製品	167
34	金属製品	182
35～41	1991年調査出土遺物、スナップ	211～217

報告書抄録

書名	マツノト遺跡		
副書名	笠利町文化財報告第28集		
編著者名	樋泉岳二（動物遺体）、島袋春美（貝製品）、村上恭通（鉄器）、西野望（ヤコウガイ）新里亮人（3、4、5類土器） 中村友昭（2類土器）、中山清美（1類土器、報告書全般） 福永修一（土器遺物写真）西園勝彦（土器遺物写真）		
編集機関	笠利町教育委員会		
発行年月日	2006年（平成18年）3月31日		
所収遺跡名	マツノト遺跡		
コード	市町村	遺跡番号	
遺跡所在地	大島郡笠利町土盛字マツノト		
調査期間	報告書作成		
年月日	平成15年4月23日から平成18年3月31日		
調査面積	(報告書作成)		
種別	生活址		
主な時代	6c～10c		
主な遺構・遺物	兼久式土器、ヤコウガイ大量出土等 ヤコウガイ貝製品・貝札・ガラス管玉・鉄製品、土製品 円盤型有孔貝製品、釣り針、磨り石、たたき石、 ムラサキオカヤドカリ化石		

第Ⅰ章 調査にいたる経過

第1節 調査にいたる経過

奄美大島北部に位置する笠利町の東海岸は奄美大島の中でも有数の景勝地として知られている。その一方考古学的には砂丘上に立地する遺跡が密集し、奄美大島を代表する国指定史跡宇宿貝塚をはじめ、長浜金久遺跡群、用見崎遺跡などが立地し、有数の埋蔵文化財包蔵地としても知られている。その中でも特に発達した砂丘、発達したリーフと美しい海岸景勝地に位置するマツノト遺跡は1990年のバブル全盛期のリゾート計画に取り込まれてしまい開発の渦中にあった。変貌する砂丘は自然現象によるものではなく、これまで悠久の時間をかけて蓄積し、形成されてきた貴重な砂丘が人為的に消滅され始めた。

ちょうどその年の夏、真向かいに立地する喜子川遺跡の発掘調査が笠利町教育委員会と青山学院大学との合同調査が行われていた。発掘現場には文化財行政に携わる担当者、大学関係者、研究者が連日のように見学に訪れていた。現場で弁当を終えた数人で抉られた砂丘断面を見学に行った。深く抉られた白い砂丘の断面には褐色のクロスナ層が鮮明な層をなし、その断面に近づきクロスナ層を見上げるとヤコウガイ、シャコガイ、サラサバティラなどの大型貝が詰まっているのが確認された。それらの遺物は断面から崩れ落ち約3m下にいる発見者の足元にも大量に散乱していた。足元に散乱している遺物は器形の良くわかる土器の口縁部、底部、貝製品などがあり、土器には炭も付着しており、生々しくもあり、痛々しくもあった。以上がマツノト遺跡発見のときの状況である。その後、遺跡は地主と業者と教育委員会の再三の話し合いにより、最終的に地主の了解を得ることができ原因者負担で1991年8月から10月まで笠利町教育委員会によって緊急発掘調査が行われた。しかし、遺物包含層をなすクロスナ層が2層あり、遺物の量も密集していることから調査期間の延長の話し合いが行われた。その結果、笠利町が調査費の一部負担を行うことで同意を得ることができた。

採砂作業は発掘調査が終了した区から採砂が行われている状態で後ろからパワーショベルの脅威を感じながらの調査となつた。調査終了後約1,500m³は保存する約束で残されたが砂丘断面は深く掘り下げられた状態のまま放置された。砂取り後の埋め戻し作業は業者が行う作業であるがかなりの土を運ばなければならず砂丘断面は自然崩壊を始めた。クロスナ層からは遺物が台風、雨のたびに散乱し、その度に表採する有様であった。埋め戻し作業が再三の要請でやっと終了したが、業者によるリゾート計画は難航している様子である。大量に検出された遺物は水洗いと注記作業が行われ、整理作業にもかなりの時間が必要とされた。これらの整理作業と報告書作成費用に伴う話し合いの場に業者は応じることなくやがて事務所が閉鎖され、開発事業も撤退した。交渉相手や遺跡の所有者も次々と変わり、そのまま放置された。

貴重な遺物は保管されたまま職員が時間を見つけての整理作業を行うが思うに進まない。

1994年に國學院大學教授鈴木靖民氏から発掘調査の成果を住民に知らせるためのシンポジウム計画が進められた。そのための資料作成が行われ、一般住民を対象としたシンポ(注1)は1995年1月に行われ好評を得た。そして教育委員会は出土遺物の一部を紹介する数ページのパンフレットを作成し調査概報として関係機関に配布し、住民や研究者に貴重な遺跡であることを十分に知らしめることができた。しかし、本報告書を作成する予算を町単独事業として取り組むことは財政負担が大きく予算を確保することができなかった。

このような特別な事情による報告書未刊の資料は国、県の補助事業が適用されるということで本遺跡もその対象となり、平成15年度から平成17年度まで3年間の補助事業を導入し、念願の報告書刊行に着手することができた。

整理作業中は多くの先生方や研究者、行政の指導とアドバイスを受けながら進められてきた。その間にもマ

ツノト遺跡の時代がにわかに注目されるようになりマツノト遺跡資料も度々参考資料等に名前が引用されるようになる。このような資料掲載の申請書は1件だけ出版社から写真資料、図面の掲載等の刊行物掲載許可が教育委員会に申請が行われている。他は報告書未刊のまま「資料の一人歩き」を始めてしまった。このような結果を招いたことはこれまで報告書を刊行することのできなかったことに起因しており、関係者などに多大なご迷惑をかけたことを反省しお詫びいたします。これからはこの報告書に収められた多くの情報を各自が遠慮することなく自由にそして積極的に引き出し、活発な研究と活用が行われてほしいと思います。

第2節 調査の組織と調査概要

〔報告書作成〕平成15年度

事業主体	笠利町教育委員会		
調査主体	笠利町教育委員会		
調査責任者	笠利町教育委員会		
調査事務担当者	笠利町教育委員会	生涯学習課長	川畠克久
調査担当者	笠利町歴史民俗資料館	館長	中山清美
調査指導	熊本大学	名誉教授	白木原和美
		教授	木下尚子
	沖縄県北谷町	文化財係長	中村愿

〔報告書作成〕平成16年度

事業主体	笠利町教育委員会		
調査主体	笠利町教育委員会		
調査責任者	笠利町教育委員会	教育長	中村武秀
			(平成16年10月1日まで)
調査責任者	笠利町教育委員会	教育長	山野利光
			(平成16年10月1日より)
調査事務担当者	笠利町教育委員会	生涯学習課長	川畠克久
調査担当者	笠利町歴史民俗資料館	館長	中山清美
調査指導	青山学院大学	教授	田村晃一

〔報告書作成〕平成17年度

事業主体	笠利町教育委員会		
調査主体	笠利町教育委員会		
調査責任者	笠利町教育委員会	教育長	山野利光
調査事務担当者	笠利町教育委員会	生涯学習課長	川畠克久
調査担当者	笠利町歴史民俗資料館	館長	中山清美
調査指導	青山学院大学	教授	田村晃一

2004年の調査は熊本大学考古学研究室と共同で行った。フィールドマスターは当時熊本大学修士課程1年の中村友昭が行った。調査は1991年に行った層位の記録が不十分であり、また出土遺物の層位的検証からもぜひ必要とされた。2004年の調査報告は本書第IV章において行っている。

1991年の調査は残された砂丘断面に沿いに5 m × 5 m のグリット2列を設定し、発掘調査を実施した。北西部の砂丘約1,500m²部分は企業側が保存の意思を伝え現存のまま残すことになり、現在に至っている。遺跡は断面観察から2枚のクロスナ層が確認されており、上層に確認されているクロスナ層は砂丘全面に広がっている。白砂層を挟んで下層にあるクロスナ層は前述したように砂丘形成の重なりで下降し、薄くなり消える部分などがあり安定していない状態であった。

出土遺物は大量のヤコウガイ溜まり（約100個）が数箇所あり、兼久式土器を中心に土師器、鉄製品、銅製品、貝製品、土製品等奄美諸島で始めて確認される貴重な資料が出土した。

兼久式土器を出土する遺跡は砂丘上に多く立地し、ヤコウガイ、サラサバティイラ、シャコガイなどの大形貝の出土が目立っている。貝製品は広田上層系の貝符や夜光貝製容器の製作工程を示す資料も発見されている。マツノト遺跡、用見崎遺跡、安良川遺跡、フワガネク遺跡からはおびただしいヤコウガイの数が出土しているが夜光貝製容器は意外と少ない（名瀬市フワガネク遺跡からも大量の夜光貝と貝製容器、貝製容器の製作過程を示す資料が出土している）^{注2}。しかもその大半は豪快な夜光貝のつぼ焼きを行ったような加熱した殻の破損状態であると1992年のマツノト遺跡調査概要報告には記述されている^{注3}。夜光貝は全てが加工される交易品ではなく、食用にされていることも当然考えられる。この件に関しては本報告書でも西野望がマツノト遺跡出土のヤコウガイデーター分析結果から興味ある報告を第III章第3節「マツノト遺跡出土のヤコウガイ」において行っている。これらの遺物にともない鉄製品、銅製品、土師器などの移入土器（外来）などの資料の共存関係も注目される。

下層からはやスセン當タイプ、弥生系統土器も出土しており、兼久式土器の前段階の資料としても注目される。ただし、1991年調査の下層（第2文化層）と今回熊本大学が行った2004年層位確認調査の下層とは砂丘形成の時期差があると考えられる。このことについては本報告書第IV章「平成16年度の発掘調査の成果」において中村友昭が報告している。

1991年の調査における第1文化層（上層）は同じ時期であるが第2文化層（下層）は砂丘形成に時間差があることに注意しなければならない。

第Ⅱ章 平成3年度発掘調査の成果

第1節 奄美大島マツノト遺跡の位置

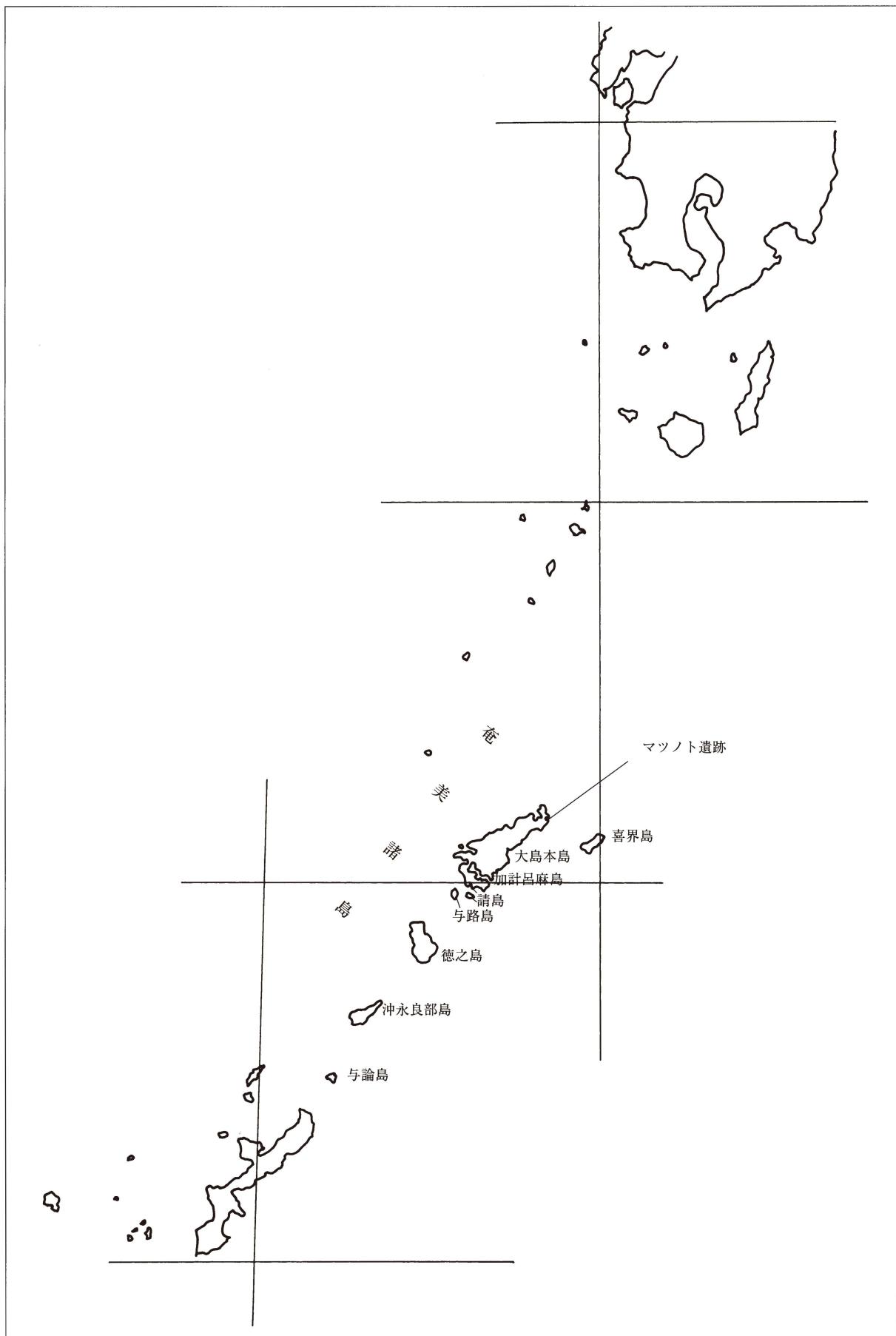
鹿児島から台湾に至る約1300kmに及ぶ海域は北からトカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島、先島諸島と呼称されている。この海域には有人島、無人島の188島から成り、そのうち有人島が68島である。北は種子島、屋久島、九州島へと連なり、九州島の西北には奄美・沖縄諸島の先史時代ともつながりの深い韓半島がある。西には東中国海を隔てた中国沿岸部へとつながる。南には沖縄、八重山、台湾島、バシー海峡を越えフィリピンルソン島へと続いている。これらの島々は南太平洋から北へ発流する黒潮の流により様々な文物と恵を与えている。その黒潮は海上の道として九州島への北上、沖縄諸島、台湾島、フィィリピンルソン島への南下も可能にしている。現在でも奄美の海岸線を歩くと色々な漂着物を目にすることができる。特にペットボトルはフィリピン、台湾、韓国のハングル文字などが確認され、黒潮の主流とその反流によって奄美にたどり着く、こうした漂着物からも海流が南下、北上を可能にしていることを証明している。また地元の漁師たちは古くからこの海流を季節ごとに読み分けて漁を行い、生活の糧として黒潮の恩恵を今でも受けている。

奄美諸島においてこうした地理的条件のもと縄文時代から九州島等と文化の交流があったことを示す遺跡が多く発見されていることは前述したとおりである。南西諸島各地で調査された遺跡からは種子島、屋久島、九州島の特徴、奄美、沖縄諸島の特徴、八重山以南の特徴などがあきらかにされ、国分直一によって奄美の北を北部文化圏、奄美、沖縄を中部文化圏、宮古、八重山以南を南部文化圏と大きく3つの文化圏に区分された^{注4}。

奄美諸島は海に囲まれ融絶した島でなく、東アジア海域に広がり、北部文化圏、南部文化圏や周辺島嶼地域とのつながりを持ちながら交流を行い、遣唐使時代にその航路として北部九州との関係も指摘されている。大宰府から奄美諸島を見る視点は決して偏狭の地としての捉え方ではなく、南への理想郷の入り口、またハブ諸島として重宝がられていたと思われる。古墳時代並行期から古代、中世、特に律令時代は官と民の活動も盛んであり、奄美の地理的条件は沖縄諸島と違う独自の文化を成立させてきた要因を見ることができる。



マツノト遺跡のリーフ



第1図 奄美諸島位置図

第2節 自然的環境（砂丘の形成と遺跡の立地）

砂丘遺跡の形成時期については縄文海進の始まる前で縄文前期に急速な寒冷があり、一時的な海退または海面の停滞がこの時期におきている（第1表奄美考古歴史年表）^{注5}。このことについて遺跡から見ると縄文前期の曾畠式土器は砂丘直上から形成されていることが龍郷町半川遺跡などで明らかにされている^{注6}。九州においても屋久島一湊松山遺跡、熊本県大矢遺跡などが知られているおり、甲元真之は世界的規模の寒冷乾燥化が紀元前一千年紀始めごろに中国北方地域で広範囲にわたり進行し、青銅器を所持する遊牧民に変化が生じているという。その結果、日本においても泥炭層の形成は湿潤な状況下にあって急速に寒冷化が進むときに生じることが地質学的にも明らかにされていることに着目している。そして、さらに日本とイギリスでは湿潤化が進み、中国大陸では乾燥化が生じていることを考古資料にもあらわしていることを指摘している^{注7}。

奄美諸島における砂丘遺跡についても自然条件の変化による層序関係と考古資料の対比による比較作業での成果が現われることを示している^{注8}。奄美諸島における砂丘遺跡は113遺跡を数え、全体の52%を占めていることが遺跡分布図を作成して明らかにした^{注9}。自然環境が紀元前一千年紀にアジア大陸での寒冷化、イギリス、日本での湿潤化現象が生じる実例は奄美・沖縄諸島においても初期の砂丘形成が行われている時期と一致する（第1表奄美考古歴史年表）。考古資料と自然現象による時期区分がどのように一致するのか、その検証が今後注目される。そのことはこれまで報告された奄美諸島の比較的古い時期の砂丘遺跡に宇宿高又遺跡、宇宿小学校構内遺跡、下山田遺跡、喜子川遺跡、半川遺跡、喜界町総合グラウンド遺跡、神野貝塚などがあり、砂丘形成と遺跡の関係などが検証される遺跡がある。検証するにはそれらの遺跡の基本層序柱状図を作成し、各遺跡の比較を行う作業から始め、世界規模の寒冷化現象と東シナ海海域島嶼に位置する奄美・沖縄諸島の砂丘形成が結びつくことになる。奄美諸島においても縄文前期砂丘遺跡はこうした自然現象も含めて世界的規模の視点からの考察も可能であることを示している^{注10}。

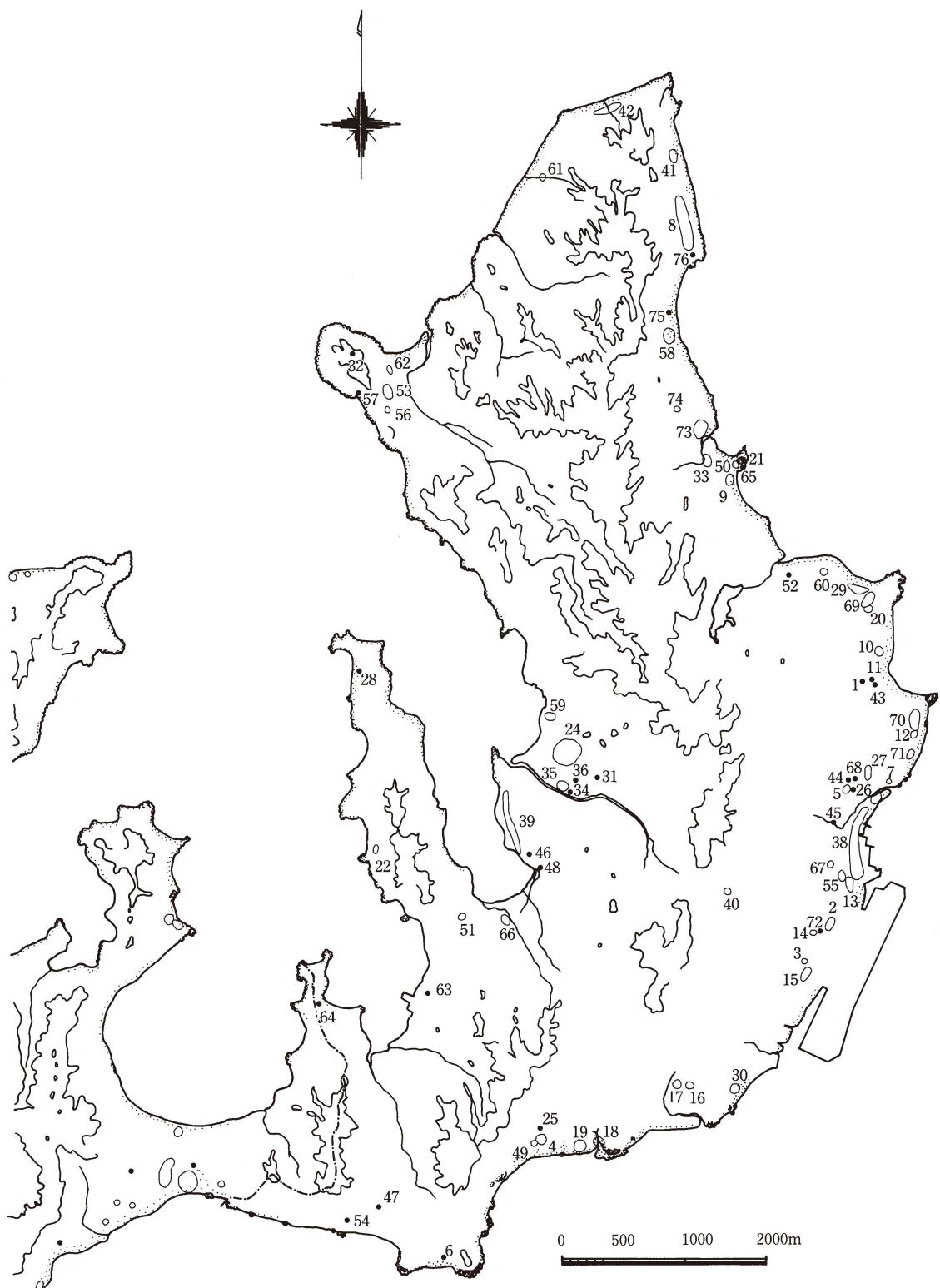
もうひとつ砂丘と対比されるのが砂丘前面に広がる発達したリーフである。リーフは砂丘に生活の場を求めてきた縄文人たちにとって海産物の採集に欠かせないテリトリーである。砂丘遺跡からはリーフ内で取れる多くの魚貝類遺体が検出され、リーフが縄文人にとって必要不可欠であったことを示している^{注11}。

珊瑚礁に囲まれた奄美の島々は釣りや潮干狩りなどの漁労活動が盛んで海産物が豊富に入手できる。ただし、毎日いつでもどこでも海に行けば取れるというものではない。発達した砂丘、発達したリーフ内に生息する魚介類や海産物を求めてやってきた先史人たちは潮の月例や干満を見分ける能力を養い魚貝類を取っている。奄美の砂丘に形成される砂丘遺跡はこうした魚貝類をもとめて生活をしてきた多くの先史人たちの足跡が遺跡に残されている。

砂丘は喜子川遺跡のマージ層上に初期の砂丘が形成され、その後にアカホヤ火山灰層の堆積があり、砂丘の時期を考察することが出来た。その後2期、3期と砂丘の形成が行われ、その上に遺跡が立地している。

遺跡から出土する貝類・獸魚骨遺体の調査結果でも明らかにされてきているように食用に豊富な貝種が沢山出土することではない。食用にされる魚貝類はリーフ内に季節によって採れる時期があり、海に行けばいつでもどこでも取れるということではないということを裏付ける結果と一致する^{注12}。現在でも潮干狩りに行くときは何を探るのか目的をはっきり定めており、その目的の獲物がリーフに寄り、育つ季節と時間帯、場所を各々が知っている。いまでもアンマ（ばあちゃん）たちは旧暦による満潮と干潮を読み、リーフ内にある自分だけが知る「イノー」をもち収穫に出かけている。まるで季節に出来る野菜を収穫するかのようにイノーにでかけているアンマ達に頭が下がる思いである。これも先史人たちから今日まで培われてきた奄美諸島のイノー文化もあると考える。

マツノト遺跡はこのような好環境の残る大島本島北部の笠利町東海岸沿いに位置する。砂丘は東側に湾入し



第2図 笠利町遺跡分布図

第1表 笠利町遺跡分布表

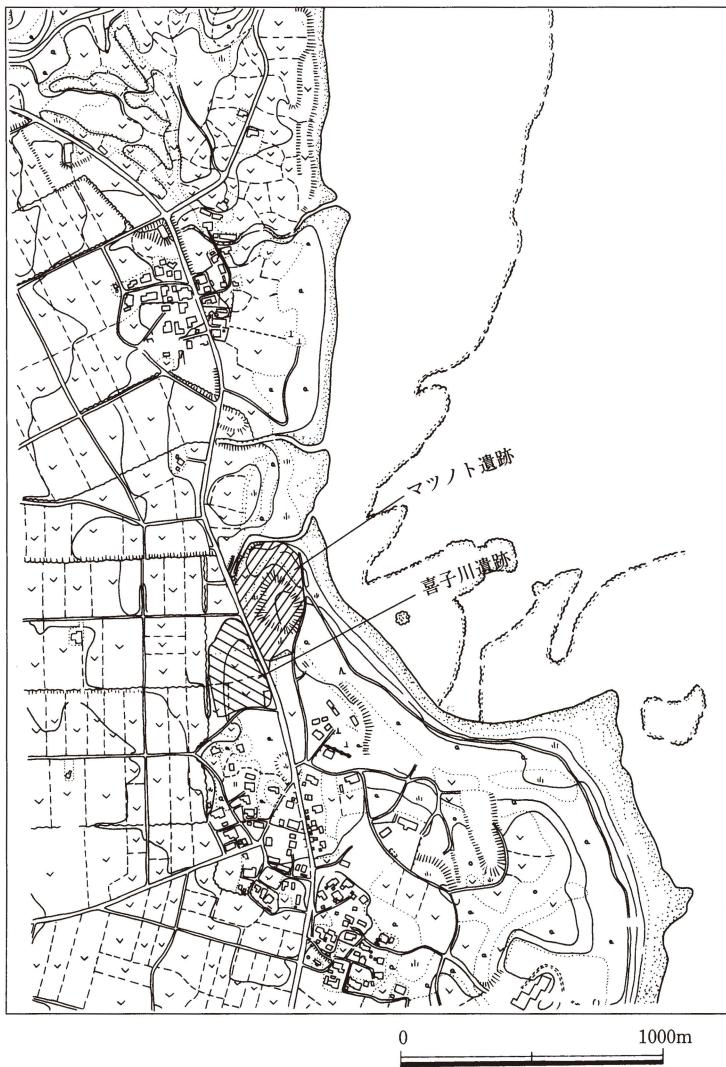
番号	遺跡名	所在地	時代
0	和野トフル墓	和野長浜金久	近世
1	喜子川遺跡	マツノト	旧石器・縄文
2	下山田遺跡	万屋下山田	縄文, 中世
3	ケジ遺跡	万屋ケジ	縄文
4	土浜第2遺跡	土浜	縄文
5	宇宿小学校構内遺跡	宇宿166-口	縄文
6	明神崎遺跡	用安字入瀬	弥生
7	宇宿港遺跡	宇宿港	弥生
8	用長浜遺跡	用長浜	古墳
9	辺留窪遺跡	辺留窪	古墳, 中世
10	崎原遺跡	須野字崎原	古墳
11	マツノト遺跡	喜子川	6から12世紀
12	土盛遺跡	土盛	古墳
13	万屋遺跡	万屋	古墳
14	泉川遺跡	万屋字泉川	古墳から平安
15	長浜金久Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ	和野字長浜金久	縄文から平安
16	節田ヨフ井遺跡	節田ヨフ井	中世
17	節田大漆遺跡	節田大漆	中世
18	節田立神遺跡	節田	古墳
19	土浜遺跡	土浜	縄文
20	あやまる第1遺跡	須野字崎原	
21	辺留城	辺留城	中世
22	鯨浜遺跡	鯨浜	中世
23	前金久遺跡	宇宿字前金久	近世
24	赤木名城	里溜池の又ほか	中世
25	イシャンヤ洞窟遺跡	土浜イシャンヤ	縄文, 弥生
26	宇宿高又遺跡	宇宿高又	縄文
27	宇宿貝塚	宇宿大竈	縄文, 弥生, 中世
28	サウチ遺跡	喜瀬字サウチ	縄文, 弥生
29	あやまる第2貝塚	須野字大道	縄文, 弥生
30	ナビロ川遺跡	和野字ナビロ川	古墳
31	赤木名観音寺跡	里川道326ほか	近世
32	蒲生崎	屋仁アヤンギ1550	
33	大島奉行所跡	大笠利字富城88	近世
34	大島代官屋敷	里11	近世
35	大島代官屋敷	里12	近世
36	大島代官屋敷	里910	近世
37	アマンデー	竹弥703	
38	戦浜	宇宿字前金久265	近世
39	津代古戦場	大字手花部津代	近世
40	ハーデー	万屋川原勝	
41	用見崎遺跡	用見崎	古墳
42	ヤドリ浜遺跡	佐仁	古墳
43	土盛第2遺跡	土盛	古墳
44	宇宿箱型石棺墓	宇宿	近世
45	城間トフル墓	城間	近世
46	アナバリストフル	手花部穴帳346	近世
47	蘭家の庭園	用安字当原1529	
48	手花部墓石	手花部	
49	土浜ヤーヤ遺跡	土浜イシャンヤ	旧石器・縄文
50	富城	大笠利字富城	中世
51	大和城	手花部字大和城原	中世
52	崎城	須野字崎城	中世
53	按司城	屋仁字崎山	中世
54	用安湊城	用安字港城	中世
55	万屋集落	万屋	古墳
56	アニ城	屋仁蒲生	中世
57	ヤンアジガナシ墓地	屋仁蒲生	
58	用安良川遺跡	用安良川	古墳
59	船倉	船倉	
60	コビロ遺跡	辺留字コビロ	古墳
61	佐仁遺跡	佐仁	古墳
62	屋仁遺跡	屋仁	古墳
63	喜瀬石棺墓	喜瀬	
64	一屯ノ口墓	一屯	近世
65	辺留城箱型石棺墓	笠利字富城	近世
66	手花部城	手花部	中世
67	万屋城	万屋字城	中世
68	宇宿小学校第2遺跡	宇宿166-口	縄文
69	アヤマル城	須野字あやまる	中世
70	大瀬第1遺跡	宇宿字大瀬	古墳
71	大瀬第2遺跡	宇宿字大瀬	古墳
72	下山田トフル	万屋字下山田	近世
73	笠利ウーバルグスク	大字城927-1	中世
74	笠利トフル	大笠利	近世
75	用墓地箱型石棺墓	用	近世
76	用風葬墓跡	用	近世
77	佐仁城	佐仁	中世

表 第 2 表 美 奄 古 歷 史 年 表

サブボル		新水期	沖縄貝塚時代	紀元300年	弥生時代	古墳時代	600年	飛鳥奈良時代	平安時代	1000年(10世紀)	サブアトランティック	(B-Tm)白頭山苦小牧	長浜金久第1遺跡12区13層 カムイヤキ第I支群1号窯 炙き口	1050±45Y、A、D	930±20B、P、Y	伊仙町でカムイヤキが作られる。
サブボル		寒冷期	埋積浅谷の形成	弥生小海退	クロスナ層の形成	長浜金久第V遺跡 長浜水ナチ遺跡第7層 喜念貝塚	用見輪遺跡XⅢ層 宇宿港遺跡	手広遺跡第1層 長浜金久遺跡 マツノト遺跡	砂堤列の発達(II)	沖積陸成層	砂堤列の発達(III)	用見輪遺跡VI層 アワカネク遺跡	1390±60Y、B、P	1770±70B P	1590±60Y、B、P	大和では大型古墳の時代になる。
サブボル		3000年前	砂堤列の発達(I')	砂堤列の発達	手広遺跡第7層 具志川島遺跡群(沖縄) 神野貝塚(知名町)3 宇宿貝塚(貯藏穴)6層 ケジ遺跡 嘉徳遺跡 大田布貝塚 面纏貝塚 サモト遺跡第2層 長浜金久第III遺跡 宇宿小学校構内遺跡(第2分 化層) 住吉貝塚 ウフタ遺跡 手広遺跡第3層	3990±85Y、B、P 貝 3600±90Y、B、P 3550±75Y、B、P 3520±50B、P、Y	3280±90Y、B、P 3160±65Y、B、P 3100±20B、P、Y	3280±90Y、B、P 3160±65Y、B、P 3100±20B、P、Y	上城遺跡、シヌグ堂遺跡では2860±3120Y、B、Pのデーターが得られている。	砂丘に遺跡が多く形成されるのが目立つ。	面纏前庭式土器等が出土。	轟式、曾煙式土器が九州の西海岸を得て種子島、屋久島、奄美、沖縄へと南下する。下山田遺跡からも表採されている。	シャコガイ製貝製品、チャートチップ出土	現在サトウキビ畑になっている。	入れ子になつて出土しほぼ完全形に近い状態だった。当時繩文時代中期の資料としては注目された。	
サブボル		化層	宇宙高又遺跡	手広遺跡第7層 具志川島遺跡群(沖縄) 神野貝塚(知名町)3 宇宿貝塚(貯藏穴)6層 ケジ遺跡 嘉徳遺跡 大田布貝塚 面纏貝塚 サモト遺跡第2層 長浜金久第III遺跡 宇宿小学校構内遺跡(第2分 化層) 住吉貝塚 ウフタ遺跡 手広遺跡第3層	3990±85Y、B、P 貝 3600±90Y、B、P 3550±75Y、B、P 3520±50B、P、Y	大踏文化の影響も現れ始める。サウチ遺跡からはトウテツ紋貝符などが発見される。大型貝の出土が目立ち始める。	形式不明な土器が出土している包含層。	大和では大型古墳の時代になる。	大踏文化の影響も現れ始める。サウチ遺跡からはトウテツ紋貝符などが発見される。大型貝の出土が目立ち始める。	伊仙町でカムイヤキが作られる。	鎌倉幕府成立(1192) 奄美にも接司などの支配者がグスクを築き始めめる。 倉木崎海底遺跡の発見で奄美の航路大きく注目される。					

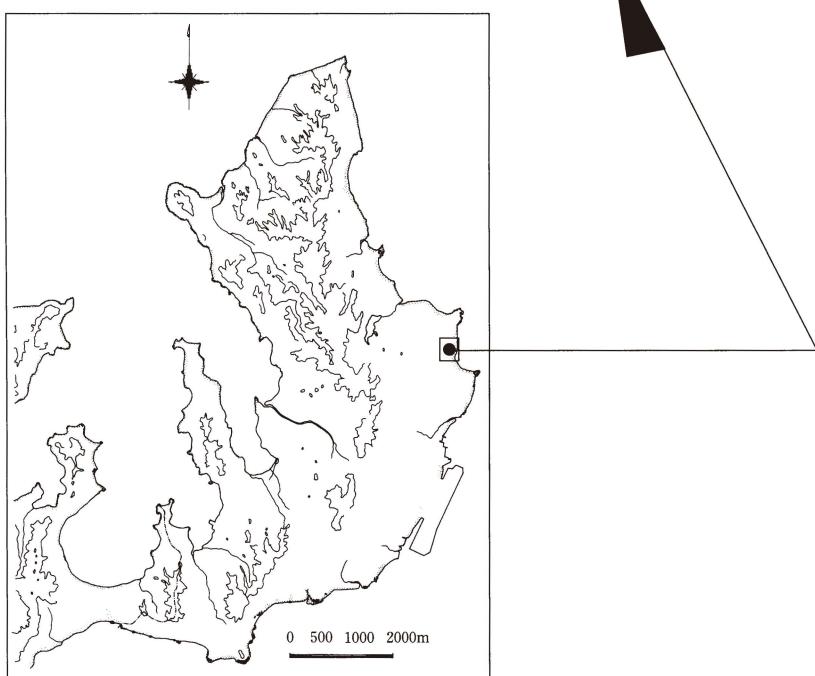
南北朝 時代	1400年 (14世紀)	万屋グスク ニヤトグスク ウーバルグスク 赤木名グスク (上層)	1429年琉球王国が成立。
室町 時代	1600年 (16世紀)	津代古戦場跡	1603年江戸幕府成立 1609年薩摩侵攻 高台にサンゴの積石墓があり、薩摩侵攻で戦死した方々の墓地とされる。
安土桃 山時代	1800年 (18世紀)	小糸期	1772年熱病や飢饉で大勢の死者をだす。 1868年明治維新 1879年琉球王国崩壊
江 戸 時 代			

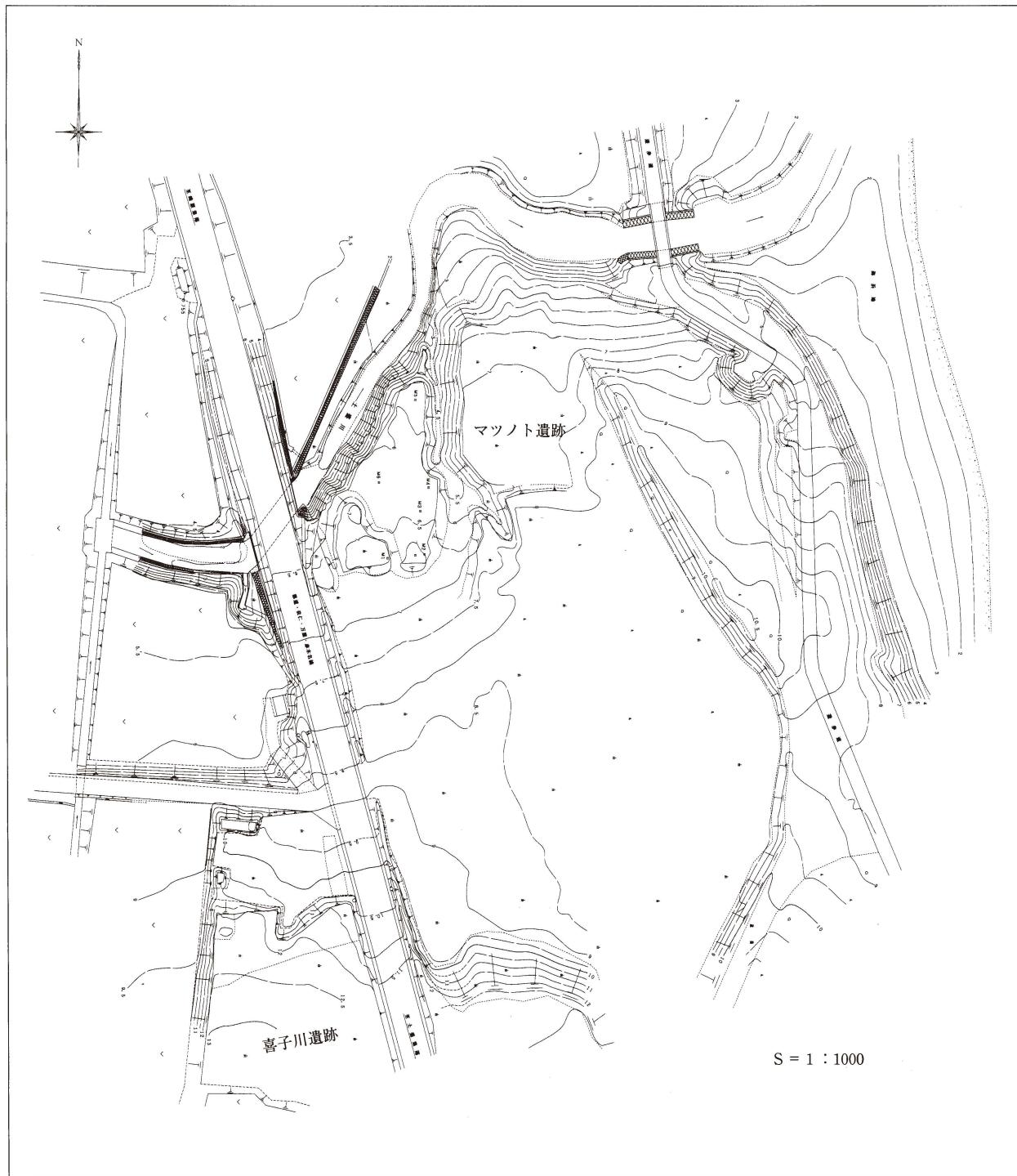
注、カーボン測定数値は調査報告書によるものから作成いたしました。(甲元真之「砂丘の形成と考古学資料」、梅津正倫「日本における第4紀末期の環境変化と沖縄低地」に奄美関係を加えて作成)



第3図 マツノト遺跡周辺地形図

た地形に長さ約300m、幅約200m、標高約12mの砂丘を形成している（第3図マツノト遺跡周辺地形図）。西側に隣接する砂丘はマージ層の上に砂丘が形成されており、6300年前のアカホヤ火山灰層を挟み爪形文土器が検出された喜子川遺跡がある^{注13}。これらの砂丘は縄文時代前期から形成されており、マツノト、喜子川遺跡においては弥生時代、古墳時代、古代にかけた3時代の遺物が出土している。ただし、マツノト遺跡においてはっきりしたクロスナ層は1枚だが間層を挟んだ薄いクロスナ層2枚も確認されている。クロスナ層は遺跡の砂丘全体に3枚入っているのではなく、砂丘の形成により3時代の砂丘の重なり等の位置が違うため生活の場所も違っていると思われる。前述したように奄美諸島は砂丘遺跡が50%を越えており、こうした遺跡の自然的環境や自然的条件も考古資料の中に取り入れた視点が特に必要とされる。砂丘形成と遺跡の立地は今後の研究課題のひとつである。





第4図 マツノト遺跡地形図

第3節 マツノト遺跡の概要

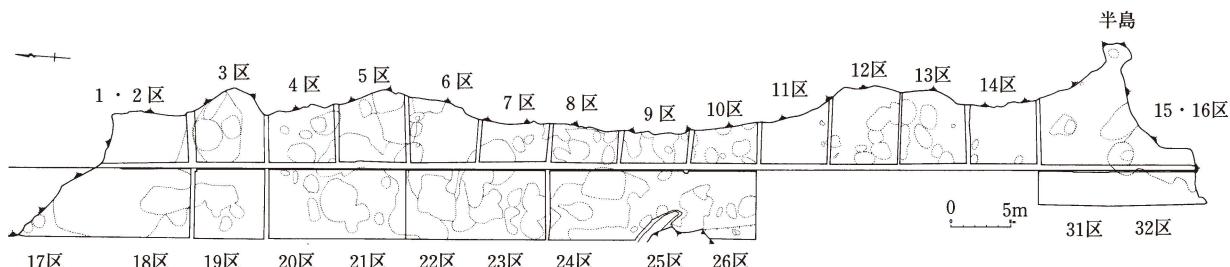
1. 調査の方法

発掘調査は5 m × 5 mのグリットを設定し、平板で遺物ポイントの記録を行う方法で行った。グリット設定はすでに破壊されていた砂丘東側断面にあわせて設定を行った（第5図調査区域全図）。砂丘はすでに砂取り工事が始って発見されたため遺跡全体の範囲の確認は出来なかった。今回調査が行われたのは各区の出土状況から遺物が一番集中している部分と思われる。遺跡は工事中発見であり、また工事を止めた緊急調査のため荒い調査にならざるを得なかった。しかし、最低限の全点を平板にポイントを落とし、限られた期間で出来る限りの記録を行った。

第4図の遺跡地形図に各グリットの調査区域が示されているがこの状況から遺跡は遺物が集中している箇所があるが、砂丘東側まで薄いクロスナ層は延びていたものと思われる。北西側コーナーは業者が保存し、遺跡公園として活用するとのことで調査を行っていない。

調査は第1文化層、白砂層、第二文化層からそれぞれ遺物の検出があり、第1文化層からは兼久式土器を主体に搬入土器や土製品、貝製品、鉄製品などが多数出土した。自然遺物として第1文化層下層から白砂層にかけてヤコウガイの大量出土が目立った。第2文化層からは兼久式土器に先行すると思われる沈線文土器などが出土している。

遺跡全体では第1文化層がクロスナ層をなしており遺物の出土量も多い。その他に表採資料で弥生系の土器も表採されている。奄美諸島ではめずらしい遺物の出土が多く、搬入品の中には大和から持ち込まれたと思われる土師器や須恵器などが含まれており、交差年代の鍵を示す資料もある。こうしたすべての資料は兼久式土器研究にかかせない資料になる。



第5図 マツノト遺跡グリット・遺物出土状況図

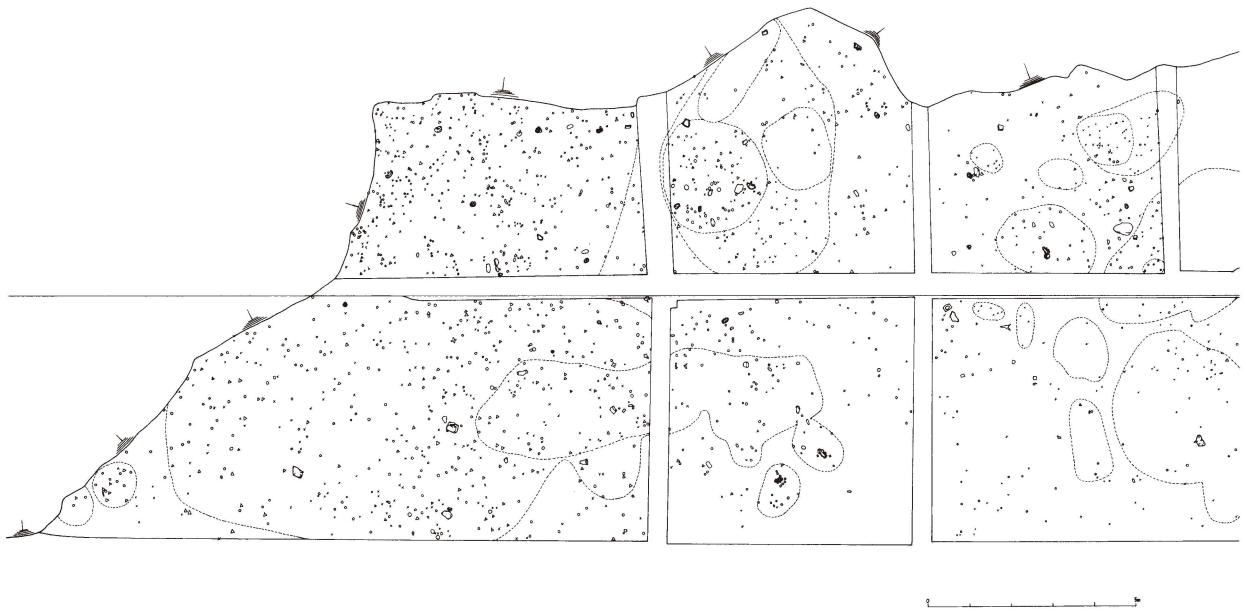
2. 層序

マツノト遺跡における層位は1991年の調査で遺物包含層が2枚確認されている。遺物包含層はクロスナ層をなし、土器や貝などの遺物がたくさん詰まった状態で砂丘一面に広がっている。上層のクロスナ層を第1文化層としてとらえ調査を進めた。

遺物包含層は第1文化層のクロスナ層を主体とするが南側砂丘においては第1文化層の上にも白砂層を挟んだ薄いクロスナ層が確認され、北側に緩やかに傾斜し、第1文化層のクロスナ層と一緒になる。調査区域外であったため遺物や図面の記録はないが図版（p68上左側に二層をなしている）に確認することが出来る。このことは第1文化層における移入土器や出土遺物から時間差も考えられ兼久式土器の一番下る時期と思われる。

第1文化層をなすクロスナ層の下層は白砂層の間層を挟んで、その下に薄いクロスナ層を形成している。白砂層からは遺物の出土もあり、白砂層出土として遺物を取り上げている。

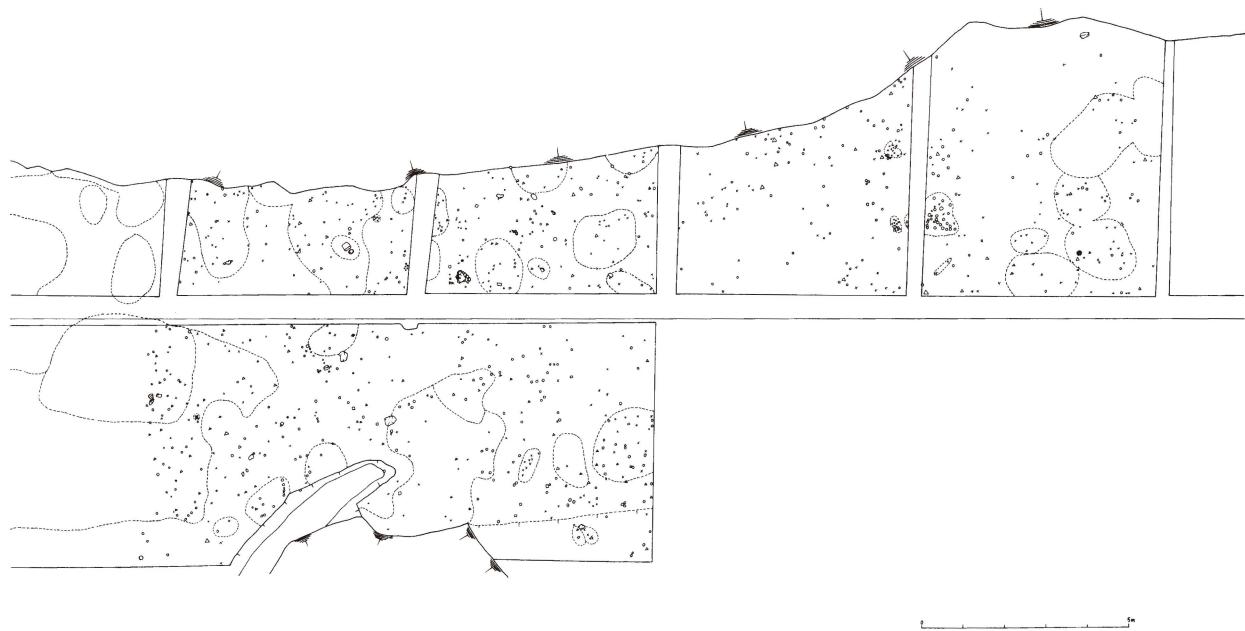
第2文化層は白砂層の下層に薄いクロスナ層をなしている。砂丘全体に広がらず、部分的に広がっている様子である。ここからも少量ではあるが遺物の出土があるため第2文化層として遺物の取り上げを行った。



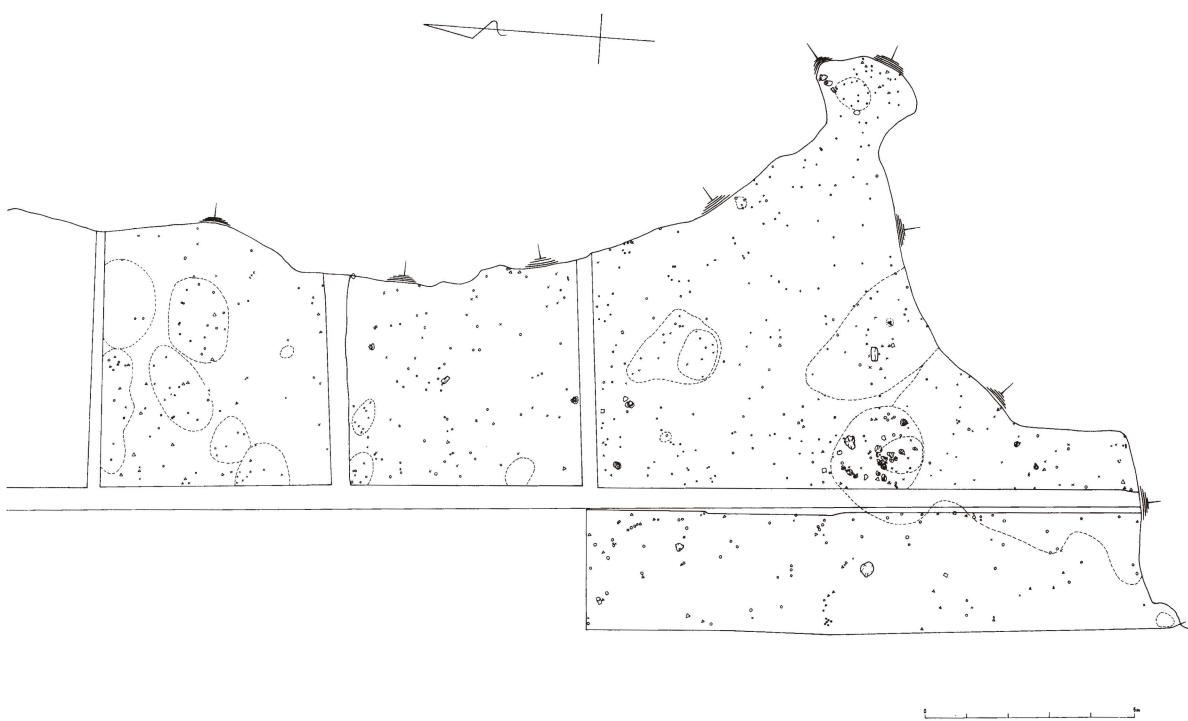
第6図 1区～4区、17区～20区遺物出土状況



第7図 5区～8区、21区～24区遺物出土状況



第8図 9区～13区、25区～26区遺物出土状況



第9図 13区～16区、半島区、31区～32区遺物出土状況

3. 遺物の出土状況

マツノト遺跡における遺物の出土状況は第6図～9図出土遺物状況として示した。

出土遺物の所見については考古資料と自然遺物資料を下記のように大別分類をおこない第4節で行っている。

考古資料 1、土器、2、土製品、3、骨製品、4、石器

考古資料1、土器資料はその特徴から兼久式土器を主体としており、兼久式土器の型式分類基礎資料として分類基準を示し、層序別分類データーを表す。3、貝製品は豊富な資料のデーター処理化を行い報告する。4、夜光貝は100個余りがまとまって出土する「貝だまり」などの夜光貝大量出土について夜光貝利用の計測と分析結果を報告する。7、鉄製資料は出土区のデーターと鉄分析から得られた報告を行う。

第4節 出土遺物

1. 土器

マツノト遺跡からは第1文化層上、第1文化層、白砂層上、白砂層、白砂層下、第2文化層と層位別に出土している。

マツノト遺跡から出土した土器を1類から5類に大別する。

1類土器は河口貞徳（河口1958）の示す兼久式土器の定義を満たした土器を取り上げる。

2類土器は1類に入らない在地土器を取り上げる。

3類土器は島外から持ち込まれた搬入土器、およびそれら影響を受けたと見られる在地土器を取り上げる。

4類土器は上記の分類に当てはまらない特殊な土器とする。

5類土器は、島外から持ち込まれた須恵器とする。

1類土器を中山清美、2類土器を中村友昭、3類から5類土器を新里亮人が報告をおこなう。

(1) 1類土器

・1類土器の型式分類 (type)

マツノト遺跡出土土器の型式分類基準は1類土器についての土器文様型式分類を第6表のように大枠で6枠を用意して行った（第6表 マツノト遺跡出土土器文様型式分類基準表）。

マツノト遺跡の土器型式分類を行うにあたり第6表Aの示す特徴が最終的にもっとも表していると判断し、文様の中から選定した。分類は以下のような記号を用いる。

A類～横貼付突帯文を有する

Aエa～横突帯に刻目あり、沈線を上に施す

Aエb～横突帯に刻目あり、沈線を下に施す

Aエc～横突帯に刻目あり、沈線を上下に施す

Aエd～横突帯に刻目あり、沈線なし

Aオa～横突帯に刻目なし、沈線を上に施す

Aオb～横突帯に刻目なし、沈線を下に施す

Aオc～横突帯に刻目なし、沈線を上下に施す

Aオd～横突帯に刻目なし、沈線なし

B類～縦横斜貼付突帯文を有する

Bエa～縦横斜突帯に刻目あり、沈線を上に施す

Bエb～縦横斜突帯に刻目あり、沈線を下に施す

第3表 出土区・器種別部位別分類個体データ(1)

1	底部	4	23	9	底部	0	35	17	底部	0	6
	木葉痕底部	6			木葉痕底部	14			木葉痕底部	2	
	口縁部	13			口縁部	15			口縁部	4	
	口縁直下	0			口縁直下	4			口縁直下	0	
	胴部	0			胴部	2			胴部	0	
	その他	0			その他	0			その他	0	
1・2	外来	0			外来	0			外来	0	
	底部	1	39	10	底部	0	34	18	底部	0	9
	木葉痕底部	15			木葉痕底部	12			木葉痕底部	3	
	口縁部	19			口縁部	17			口縁部	6	
	口縁直下	2			口縁直下	2			口縁直下	0	
	胴部	2			胴部	2			胴部	0	
2	その他	0			その他	0			その他	0	
	外来	0			外来	1			外来	0	
	底部	0	36	11	底部	2	20	19	底部	0	4
	木葉痕底部	23			木葉痕底部	6			木葉痕底部	0	
	口縁部	13			口縁部	9			口縁部	4	
	口縁直下	0			口縁直下	3			口縁直下	0	
3	胴部	0			胴部	0			胴部	0	
	その他	0			その他	0			その他	0	
	外来	0			外来	0			外来	0	
	底部	0	64	12	底部	0	32	20・21	底部	1	7
	木葉痕底部	27			木葉痕底部	10			木葉痕底部	1	
	口縁部	31			口縁部	19			口縁部	4	
4	口縁直下	3			口縁直下	2			口縁直下	0	
	胴部	0			胴部	0			胴部	0	
	その他	0			その他	0			その他	0	
	外来	0			外来	1			外来	1	
	底部	1	61	13	底部	0	24	22・23	底部	1	8
	木葉痕底部	26			木葉痕底部	10			木葉痕底部	1	
5	口縁部	31			口縁部	10			口縁部	4	
	口縁直下	3			口縁直下	4			口縁直下	2	
	胴部	0			胴部	0			胴部	0	
	その他	0			その他	0			その他	0	
	外来	0			外来	0			外来	0	
	底部	6	47	14	底部	0	13	24	底部	1	13
6	木葉痕底部	14			木葉痕底部	5			木葉痕底部	6	
	口縁部	18			口縁部	7			口縁部	4	
	口縁直下	9			口縁直下	1			口縁直下	2	
	胴部	0			胴部	0			胴部	0	
	その他	0			その他	0			その他	0	
	外来	0			外来	0			外来	0	
7	底部	2	39	15	底部	1	18	25	底部	2	18
	木葉痕底部	13			木葉痕底部	6			木葉痕底部	7	
	口縁部	17			口縁部	7			口縁部	8	
	口縁直下	7			口縁直下	3			口縁直下	1	
	胴部	0			胴部	1			胴部	0	
	その他	0			その他	0			その他	0	
8	外来	0			外来	0			外来	0	
	底部	0	27	15・16	底部	0	78	26	底部	0	5
	木葉痕底部	16			木葉痕底部	33			木葉痕底部	3	
	口縁部	10			口縁部	45			口縁部	2	
	口縁直下	1			口縁直下	0			口縁直下	0	
	胴部	0			胴部	0			胴部	0	
8	その他	0			その他	0			その他	0	
	外来	0			外来	0			外来	0	
	底部	2	45	16	底部	0	6	31	底部	0	12
	木葉痕底部	17			木葉痕底部	2			木葉痕底部	5	
	口縁部	22			口縁部	4			口縁部	5	
	口縁直下	3			口縁直下	0			口縁直下	1	
	胴部	0			胴部	0			胴部	0	
	その他	0			その他	0			その他	0	
	外来	1			外来	0			外来	1	

第3表 出土区・器種別部位別分類個体データ（2）

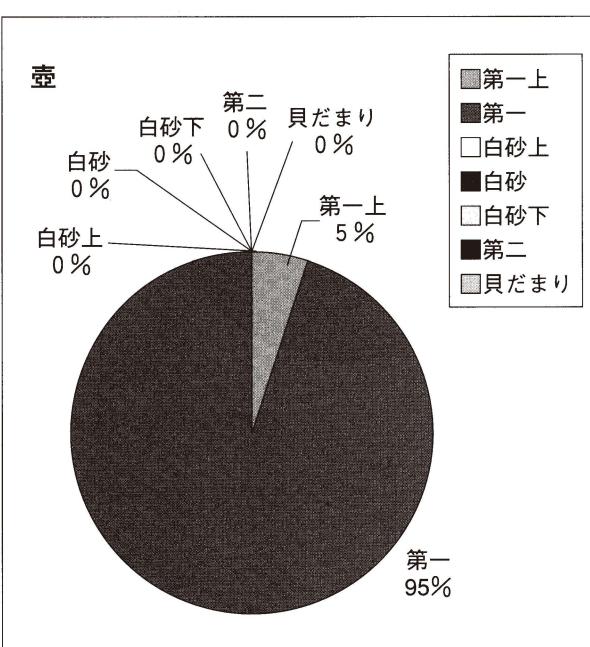
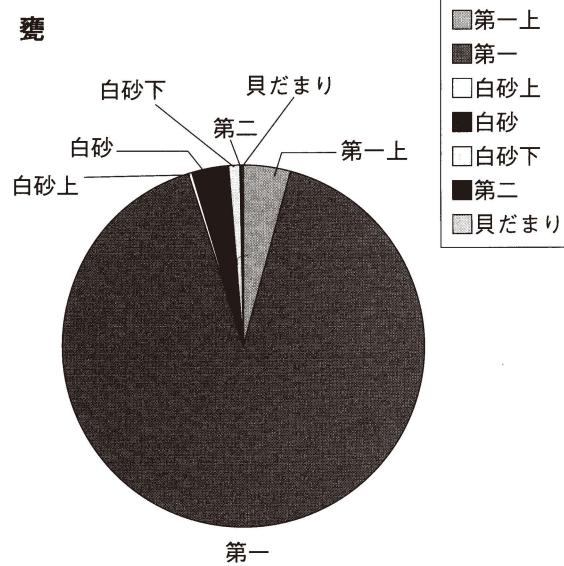
A	底部	1	50	半島	底部	2	8	32	底部	0	5
	木葉痕底部	19			木葉痕底部	0			木葉痕底部	4	
	口縁部	21			口縁部	5			口縁部	0	
	口縁直下	8			口縁直下	0			口縁直下	1	
	胴部	1			胴部	1			胴部	0	
	その他	0			その他	0			その他	0	
	外来	0			外来	0			外来	0	
B	底部	0	24	表採	底部	0	10	底 部	底 部	30	950
	木葉痕底部	6			木葉痕底部	2			木葉痕底部	347	
	口縁部	15			口縁部	1			口 縁 部	456	
	口縁直下	3			口縁直下	1			口縁直下	79	
	胴部	0			胴部	0			胴 部	19	
	その他	0			その他	0			そ の 他	0	
	外来	0			外来	6			外 来	19	
C	底部	1	9	不明	底部	0	54	535	底 部	30	950
	木葉痕底部	3			木葉痕底部	0			木葉痕底部	347	
	口縁部	4			口縁部	39			口 縁 部	456	
	口縁直下	1			口縁直下	0			口縁直下	79	
	胴部	0			胴部	7			胴 部	19	
	その他	0			その他	0			そ の 他	0	
	外来	0			外来	8			外 来	19	
D	底部	0	6								
	木葉痕底部	2									
	口縁部	2									
	口縁直下	2									
	胴部	0									
	その他	0									
	外来	0									
E	底部	0	8								
	木葉痕底部	6									
	口縁部	1									
	口縁直下	1									
	胴部	0									
	その他	0									
	外来	0									
F・G	底部	0	18								
	木葉痕底部	10									
	口縁部	4									
	口縁直下	4									
	胴部	0									
	その他	0									
	外来	0									
H	底部	2	19								
	木葉痕底部	6									
	口縁部	7									
	口縁直下	4									
	胴部	0									
	その他	0									
	外来	0									
I	底部	0	10								
	木葉痕底部	4									
	口縁部	5									
	口縁直下	1									
	胴部	0									
	その他	0									
	外来	0									
J	底部	0	6								
	木葉痕底部	2									
	口縁部	4									
	口縁直下	0									
	胴部	0									
	その他	0									
	外来	0									

第4表 調査区別遺物出土数表

	口縁直下	口縁部	底部	胴部	合計
マツノト1区上	4	13	9	290	316
マツノト1・2区	3	6	1	164	174
マツノト2区	19	21	1	72	113
マツノト3区	13	7	3	340	363
マツノト4区	30	38	8	661	737
マツノト5区	38	41	4	624	707
マツノト6区	16	42	18	219	295
マツノト7区	9	10	8	120	147
マツノト8区	21	26	25	472	544
マツノト9区	12	28	5	399	444
マツノト10区	28	8	16	146	198
マツノト11区	13	32	16	393	454
マツノト12区	18	11	17	263	309
マツノト13区	10	8	8	154	180
マツノト14区	20	19	14	220	273
マツノト15区	12	23	5	215	255
マツノト15・16区	55	57	46	714	872
マツノト16区	4	2	4	89	99
マツノト17区	12	19	2	107	140
マツノト18区	7	15	8	143	173
マツノト19区	0	1	0	60	61
マツノト20・21区	2	21	6	148	177
マツノト22・23区	9	14	5	249	277
マツノト24区	17	22	4	142	185
マツノト25区	20	24	10	254	308
マツノト26区	9	18	10	209	246
マツノト31区	6	7	1	129	143
マツノト32区	8	8	6	139	161
マツノトA区	22	34	10	320	386
マツノトB区	26	38	15	167	246
マツノトC区	4	9	4	63	80
マツノトD区	4	13	3	132	152
マツノトE区	10	11	9	132	162
マツノトF・G区	5	2	2	199	208
マツノトH区	5	13	3	138	159
マツノトイ区	9	4	9	121	143
マツノトJ区	10	15	6	157	188
マツノト半島区	0	1	2	16	19
	510	681	323	8580	10094

第5表1 形式層別分類表

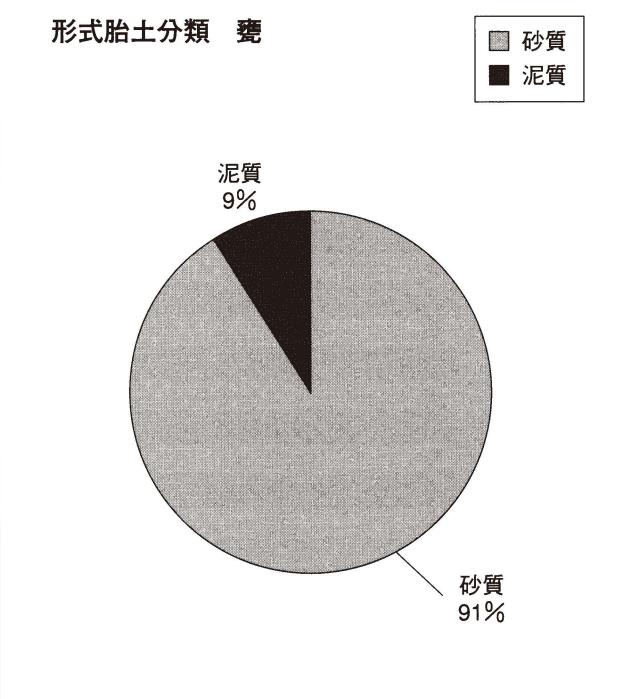
形式	遺構名	件数	形式	遺構名	件数
甕 (638)	甕	第一上	碗	第一上	0
	形式	遺構名	形式	遺構名	件数
	甕	第一	碗	第一	1
	形式	遺構名	形式	遺構名	件数
	甕	白砂上	碗	白砂上	0
	形式	遺構名	形式	遺構名	件数
	甕	白砂	碗	白砂	0
	形式	遺構名	形式	遺構名	件数
	甕	白砂下	碗	白砂下	0
	形式	遺構名	形式	遺構名	件数
	甕	第二	碗	第二	0
壺 (206)	形式	遺構名	形式	遺構名	件数
	壺	第一上	壺	第一上	9
	形式	遺構名	形式	遺構名	件数
	壺	第一	壺	第一	196
	形式	遺構名	形式	遺構名	件数
	壺	白砂上	壺	白砂上	0
	形式	遺構名	形式	遺構名	件数
	壺	白砂	壺	白砂	1
	形式	遺構名	形式	遺構名	件数
	壺	白砂下	壺	白砂下	0
	形式	遺構名	形式	遺構名	件数
壺広 (11)	壺広	第一上	第一上	第一上	1
	形式	遺構名	形式	遺構名	件数
	壺広	第一	第一	第一	10
	形式	遺構名	形式	遺構名	件数
	壺広	白砂上	壺	白砂上	0
	形式	遺構名	形式	遺構名	件数
	壺広	白砂	壺	白砂	0
	形式	遺構名	形式	遺構名	件数
	壺広	白砂下	壺	白砂下	0
	形式	遺構名	形式	遺構名	件数
	壺広	第二	壺	第二	0
壺注 (1)	壺注	遺構名	形式	遺構名	件数
	壺注	第一上	壺注	第一上	0
	形式	遺構名	形式	遺構名	件数
	壺注	第一	壺注	第一	1
	形式	遺構名	形式	遺構名	件数
	壺注	白砂上	壺注	白砂上	0
	形式	遺構名	形式	遺構名	件数
	壺注	白砂	壺注	白砂	0
	形式	遺構名	形式	遺構名	件数
	壺注	白砂下	壺注	白砂下	0
	形式	遺構名	形式	遺構名	件数



第5表2 形式胎土分類

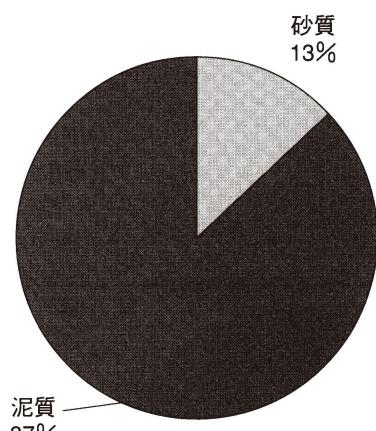
甕	形式	胎土	件数
	甕	砂質	588
形式	胎土	件数	
	甕	泥質	59
壺	形式	胎土	件数
	壺	砂質	27
形式	胎土	件数	
	壺広	泥質	176
壺広	形式	胎土	件数
	壺広	砂質	1
形式	胎土	件数	
	壺広	泥質	9
壺注	形式	胎土	件数
	壺注	砂質	0
形式	胎土	件数	
	壺注	泥質	1
碗	形式	胎土	件数
	碗	砂質	1
形式	胎土	件数	
	碗	泥質	0
不	形式	胎土	件数
	不	砂質	35
形式	胎土	件数	
	不	泥質	23

形式胎土分類 甕



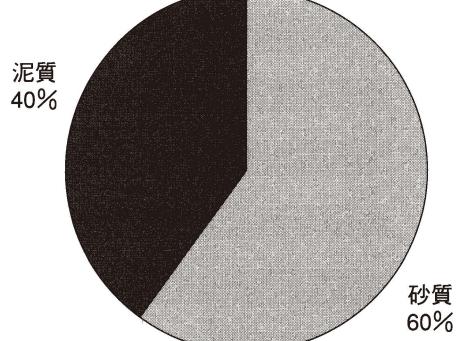
形式胎土分類 壺

■ 砂質
■ 泥質

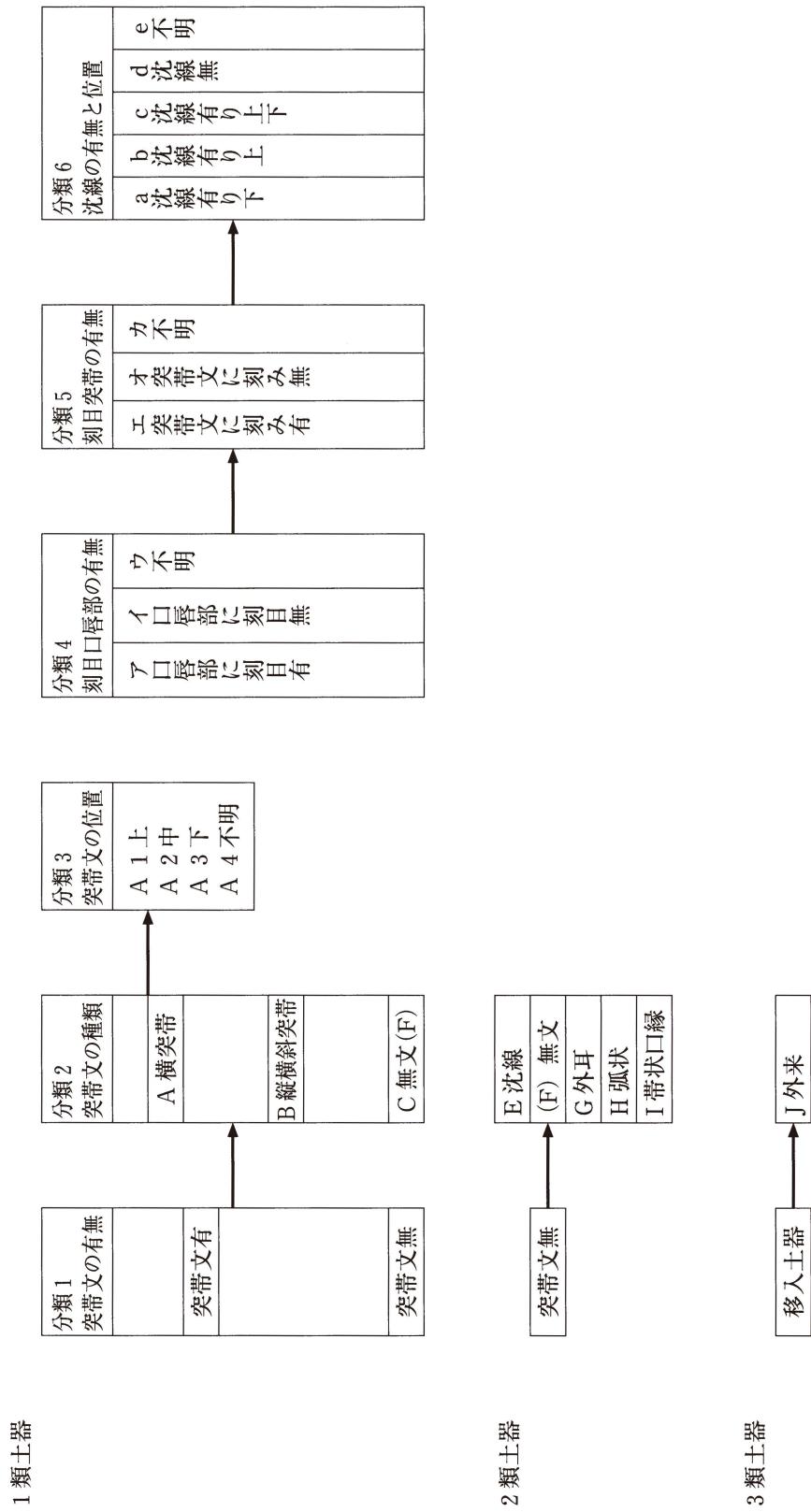


形式胎土分類 不明

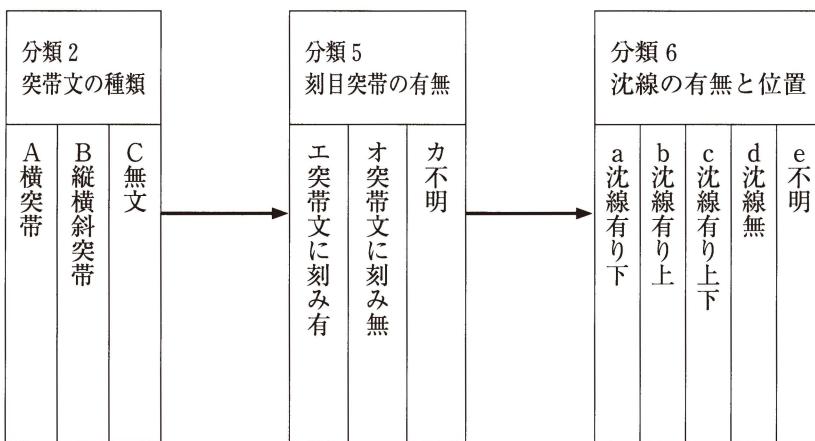
■ 砂質
■ 泥質



第6表 マツノノト遺跡出土土器文様分類基準



第6表A マツノト遺跡型式分類抽出基本表



B エ c ～縦横斜突帯に刻目あり、沈線を上下に施す

B エ d ～縦横斜突帯に刻目あり、沈線なし

B オ a ～縦横斜突帯に刻目なし、沈線を上に施す

B オ b ～縦横斜突帯に刻目なし、沈線を下に施す

B オ c ～縦横斜突帯に刻目なし、沈線を上下に施す

B オ d ～縦横斜突帯に刻目なし、沈線なし

C 類～無文土器

C 1 ～口縁部直口

C 2 ～口縁部外反

・底部の分類

〈形式と胎土分類〉

底部分類個数は比較的形のわかる377点を対象に行う。底部タイプは器形から平底、くびれ平底、丸み平底の3タイプに分類を行う、ただし、分類過程でどちらとも分類しがたいと思われた資料はC不明とし、3タイプと明らかに違う特殊な底部はD特殊として分類を行った。分類記号は安良川遺跡資料と対比させるため統一した。マツノト遺跡における土器、土製品の出土状況図は第6図に示している。

(2) 2類土器

2類土器とは、兼久式土器の定義から外れる在地土器群のことをさす。施文箇所は、そのほとんどが口縁部外面である。器種は甕と壺がある。甕は、胴が張り、口縁部が外反するものと最大径が口縁部にあり、いわゆる砲弾状の胴部形態を呈するものがある。これらを文様の施文方法によって3つに大別した。

〈沈線文〉

直線的に施文するもの（第25図237、第10図11、第12図34ほか）や曲線的に施文するもの（第10図4、第18図132、第19図160ほか）がある。第12図41は、内面にも沈線が施されている。そのほとんどが第1文化層出土であるが、第25図237は、第2文化層出土のものである。

第7表 1類土器出土区別型式分類表

	A-A 1	A-A 2	A-A 3	A-A 4	B	C-A 1	C-A 2	C-A 3	C-A 4	D-A 1	D-A 2	D-A 3	D-A 4
1	1	4	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0
1・2	3	2	2	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0
2	0	4	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3	0	8	2	2	1	0	2	0	2	0	1	0	0
4	0	10	7	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0
5	2	4	3	5	0	0	0	0	0	0	1	0	0
6	0	6	1	1	1	0	1	0	3	0	0	0	0
7	1	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
8	3	7	2	2	0	0	3	1	0	0	0	0	0
9	0	2	1	3	0	0	1	0	0	0	0	2	0
10	0	5	5	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0
11	2	4	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
12	1	4	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
13	0	5	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
14	1	1	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0
15	1	3	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
15・16	3	12	5	2	1	0	1	2	1	0	0	0	0
16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
17	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
18	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
20・21	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
22・23	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
24	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
25	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
26	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
31	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
32	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
A	3	9	0	7	0	0	1	1	1	0	0	0	0
B	0	2	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
D	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
E	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
F・G	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
H	0	2	1	3	0	0	1	0	0	0	0	0	0
I	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
J	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
半島	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
表採	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
不明	1	14	4	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0
計	27	123	54	50	6	0	13	6	8	0	2	2	0

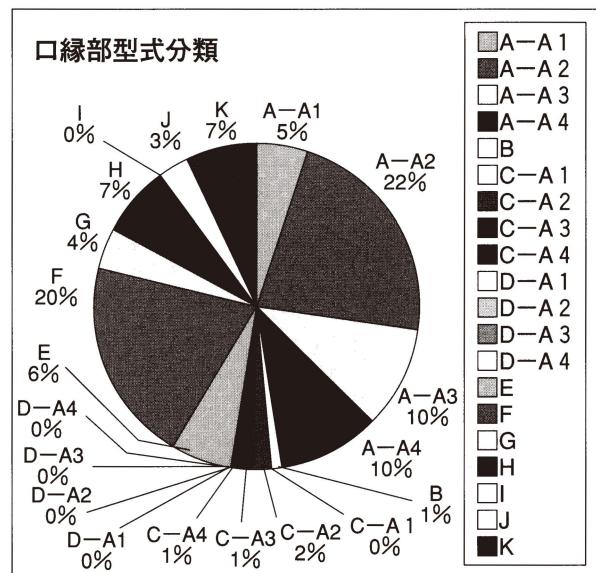
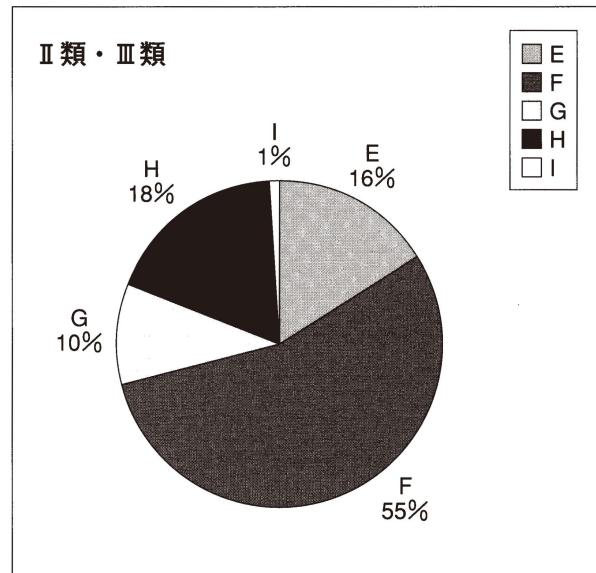
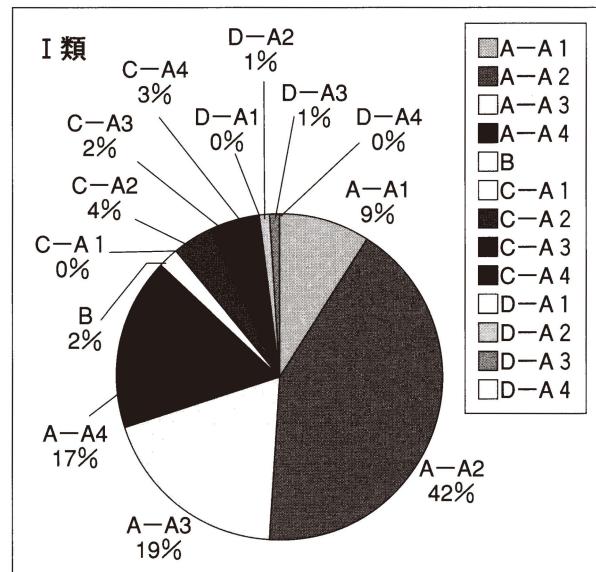
※カクラン・表採含まず

291点

第8表 F無紋、2、3類土器出土区別型式分類表

	E	F	G	H	I	J	K
1	0	2	1	1	0	0	2
1・2	2	5	0	1	0	0	3
2	0	4	1	1	0	0	0
3	0	6	0	1	0	0	9
4	1	6	1	0	1	0	5
5	0	5	3	2	0	0	2
6	2	4	2	1	0	0	2
7	0	3	1	1	0	0	1
8	3	2	1	1	0	0	0
9	1	4	1	2	0	0	2
10	0	3	0	1	0	1	2
11	0	1	0	4	0	0	0
12	3	2	3	2	0	1	2
13	0	2	0	3	0	0	0
14	1	1	0	1	0	0	0
15	0	3	0	1	0	0	0
15・16	5	13	0	0	0	0	0
16	1	3	0	0	0	0	0
17	0	1	0	0	0	0	0
18	0	2	0	0	0	0	1
19	1	3	0	0	0	0	0
20・21	0	2	0	0	0	1	0
22・23	0	1	1	1	0	0	1
24	0	2	0	1	0	0	0
25	1	3	0	1	0	0	1
26	1	0	0	0	0	0	0
31	2	1	0	0	0	1	1
32	0	0	0	0	0	0	0
A	0	5	0	1	0	0	1
B	0	4	2	2	0	0	2
C	2	1	1	0	0	0	0
D	2	0	1	0	0	0	0
E	0	0	0	0	0	0	0
F・G	0	1	1	3	0	0	0
H	1	2	0	0	1	0	0
I	0	3	0	0	0	0	0
J	0	1	0	0	0	0	0
半島	0	2	0	2	0	0	0
表採	0	0	0	0	0	6	1
不明	4	10	1	2	0	8	0
計	33	113	21	36	2	18	38

※カクラン・表採含まず



第9表 土器文様型式分類基準層位表（第6表の数字化）

No.1 突帶文の種類と位置、層位

突帶の種類	突帶の位置	上<2、9)	中(3~4)	下>4,1	第1分化上	第1分化層	白砂層上	白砂層	白砂層下
A 横突帶	A 1	25	0	1	2	21	0	1	1
	A 2	105	6	0	3	105	0	2	0
	A 3	1	33	13	1	47	0	0	0
	A 4	4	0	0	0	48	0	1	0
B 縦突帶					1	4	0	0	0
C 縦横突帶	A 2	8	3	0	0	11	0	2	0
	A 3	1	5	0	1	5	0	0	0
	A 4	1	0	0	0	7	0	0	0
D 斜突帶	A 2	1	1	0	0	2	0	0	0
	A 3	0	0	2	0	2	0	0	0
計		146	48	16	8	252	0	6	1

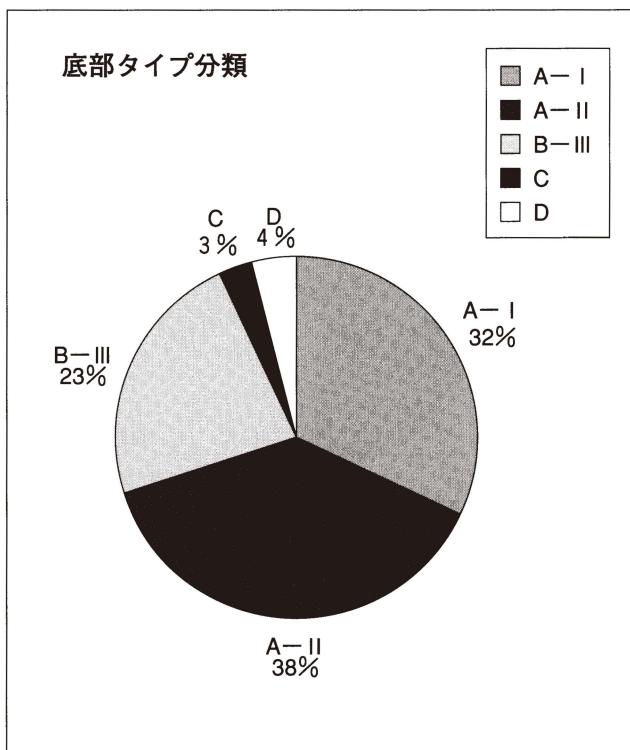
No.2 刻目口唇・突帶の有無、沈線の有無と位置

		第1分化上	第1分化層	白砂層上	白砂層	白砂層下
刻目口唇の位置	ア 刻目あり	0	9	0	0	0
	イ 刻目なし	9	247	0	5	4
	ウ 不明	0	77	0	1	0
刻目突帶の有無	ア 刻目あり	6	201	0	6	1
	イ 刻目なし	3	61	0	0	0
	ウ 不明	0	44	0	0	0
沈線の有無と位置	A 沈線あり 上	2	40	0	1	0
	B 沈線あり 下	0	4	0	0	0
	C 沈線あり 上下	0	35	0	0	0
	D 沈線なし	5	123	0	3	1
	沈線あり合計	2	79	0	1	0

第10表 底部出土区別型式分類

	底部				
	A - I	A - II	B - III	C	D
1	4	4	1	1	0
1・2	5	8	1	0	2
2	7	6	7	1	2
3	7	12	5	1	2
4	8	12	5	3	0
5	8	7	4	0	1
6	3	5	6	0	1
7	3	10	3	0	0
8	6	7	6	0	0
9	4	6	4	0	0
10	2	5	2	2	1
11	1	2	5	0	0
12	3	4	2	0	1
13	4	5	1	0	0
14	3	0	1	1	0
15	1	2	2	0	1
15・16	24	2	6	1	0
16	1	1	0	0	0
17	0	1	1	0	0
18	2	1	0	0	0
19	0	0	0	0	0
20・21	0	1	1	0	0
22・23	0	1	1	0	0
24	2	1	1	0	3
25	2	3	3	0	1
26	1	2	0	0	0
31	3	1	1	0	0
32	0	1	2	1	0
A	6	9	5	0	0
B	2	4	0	0	0
C	0	1	2	1	0
D	1	1	0	0	0
E	0	3	3	0	0
F・G	2	7	1	0	0
H	2	3	3	0	0
I	3	0	1	0	0
J	0	2	0	0	0
半島	1	1	0	0	0
表採	0	2	0	0	0
不明	0	0	0	0	0
計	121	143	86	12	15

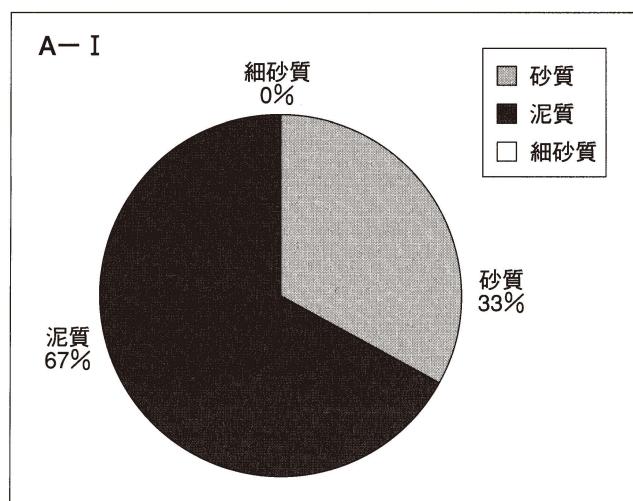
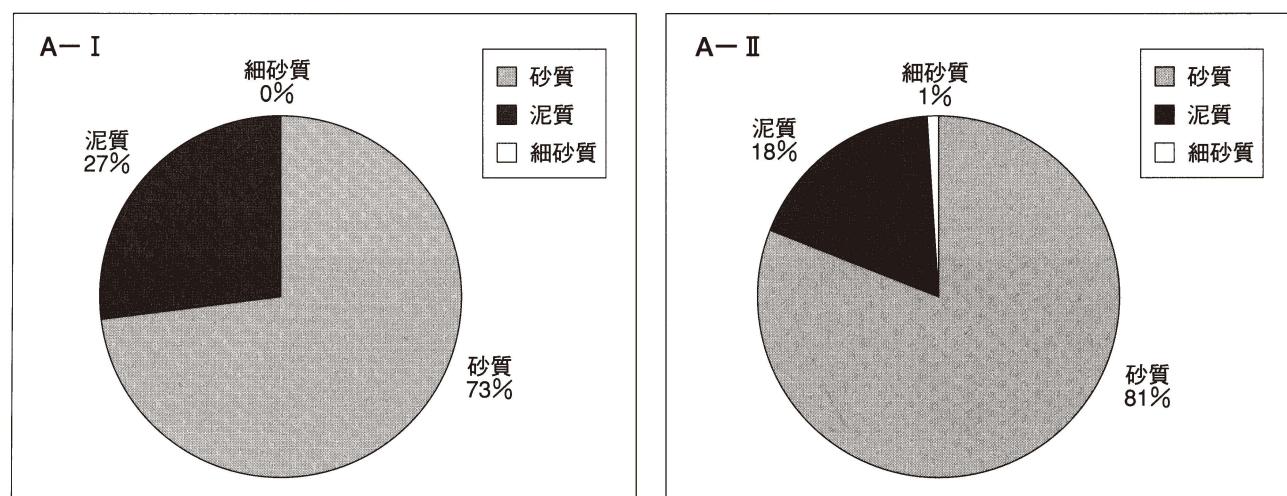
※カクラン・表採含まず



第11表 底部胎土分類 (安良川遺跡)

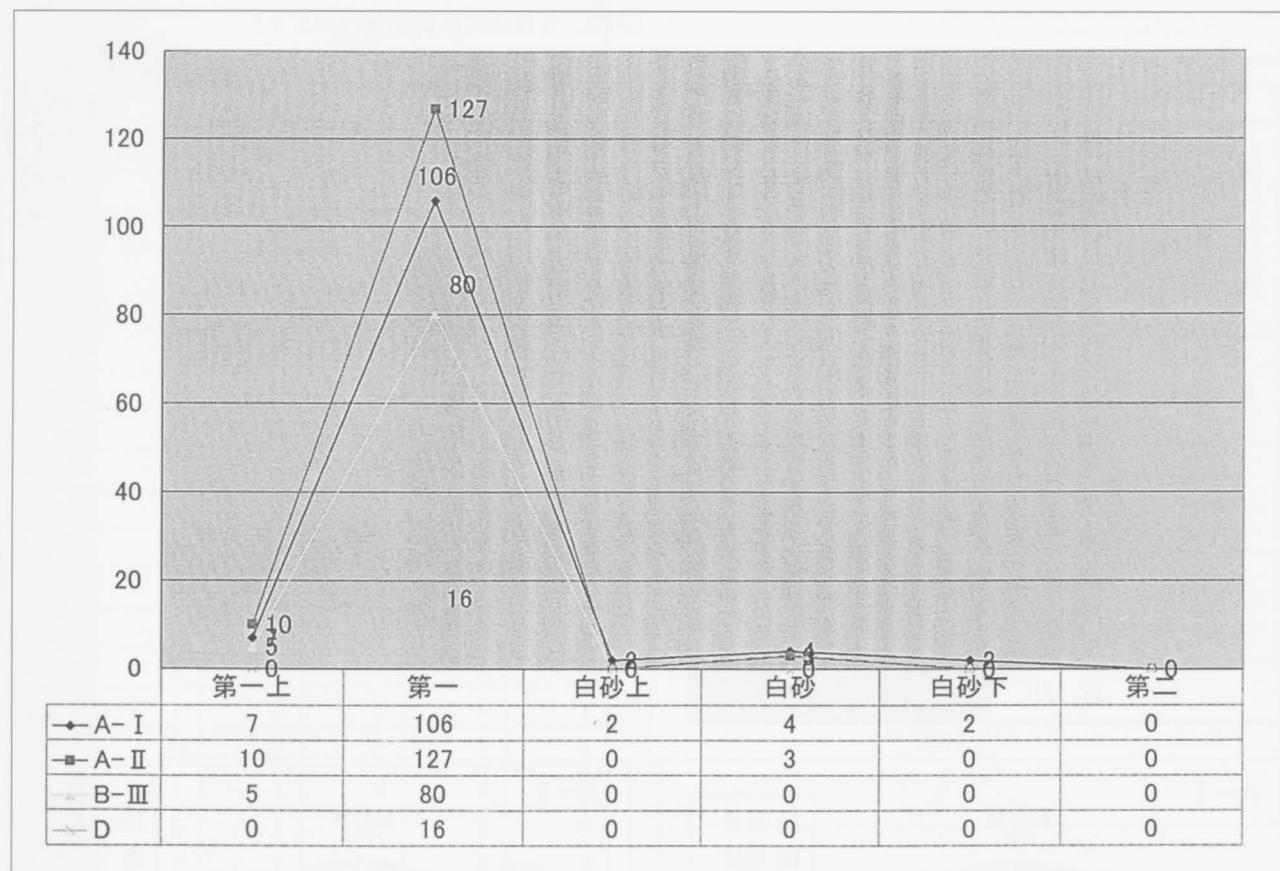
(2005. 安良川遺跡調査報告書より)

タイプ	胎土	件数	タイプ計
A - I	砂質	35	48
	泥質	13	
	細砂質	0	
A - II	砂質	65	80
	泥質	14	
	細砂質	1	
B - III	砂質	9	27
	泥質	18	
	細砂質	0	
C	砂質	21	28
	泥質	7	
	細砂質	0	
D	砂質	5	5
	泥質	0	
	細砂質	0	
	総 計	188	188

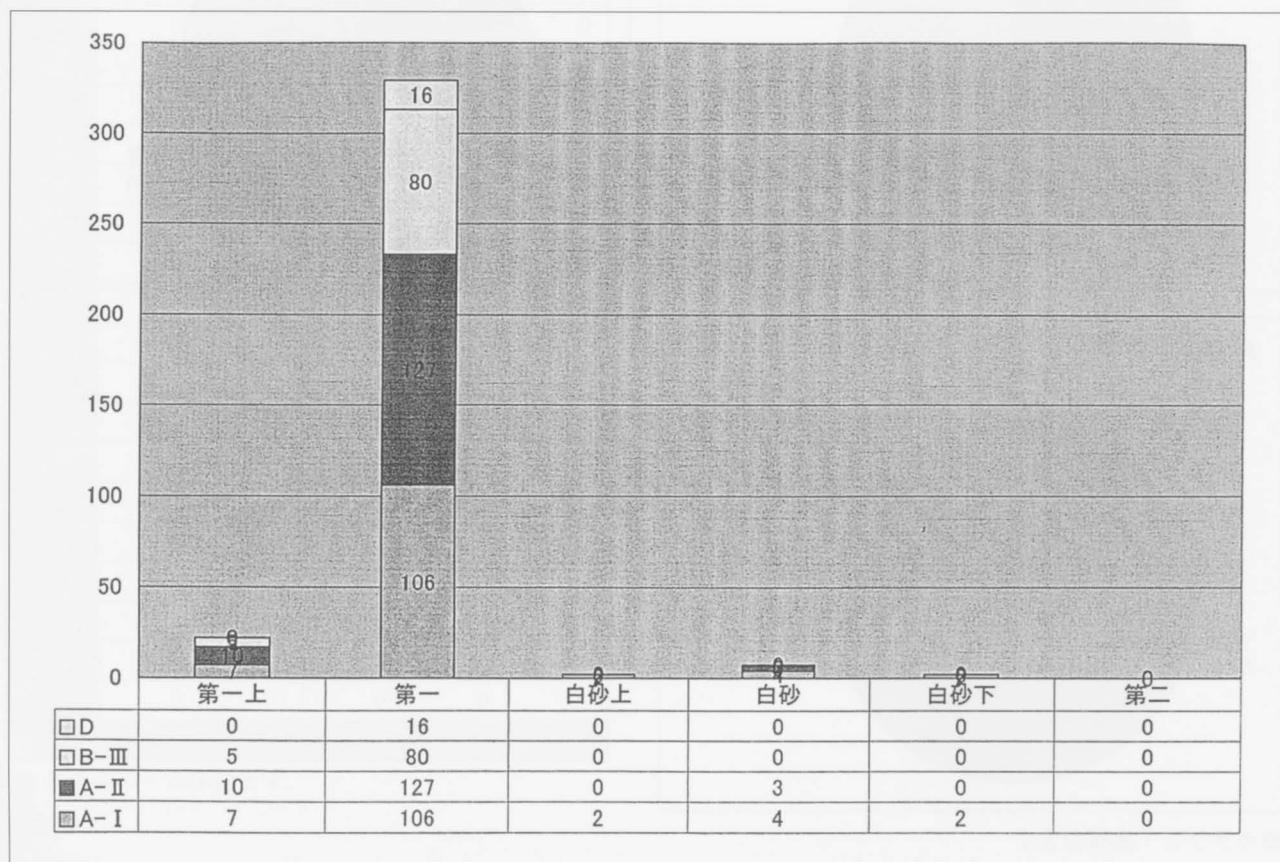


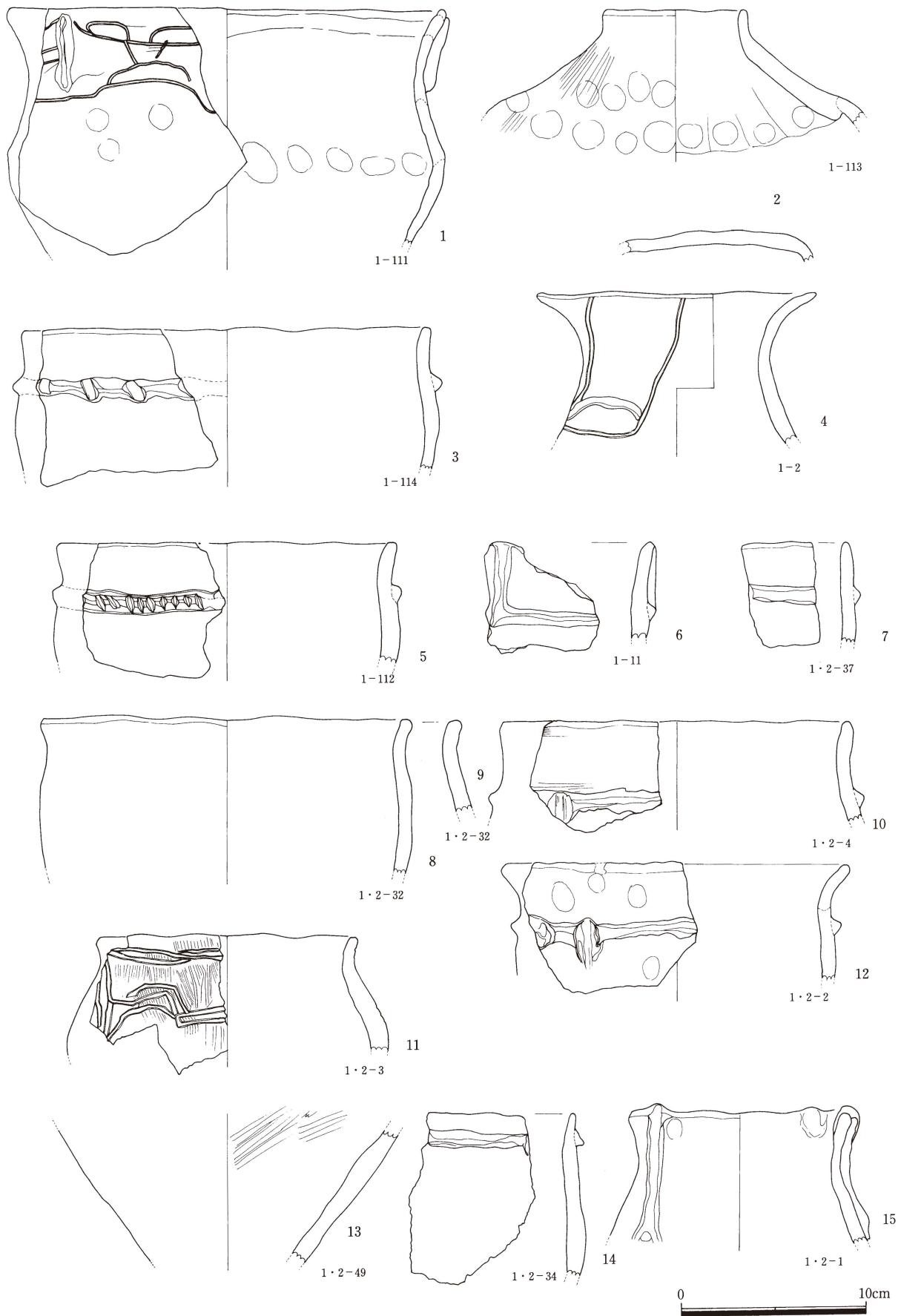
※カクラン・表採含まず

第12表 底部層位別表

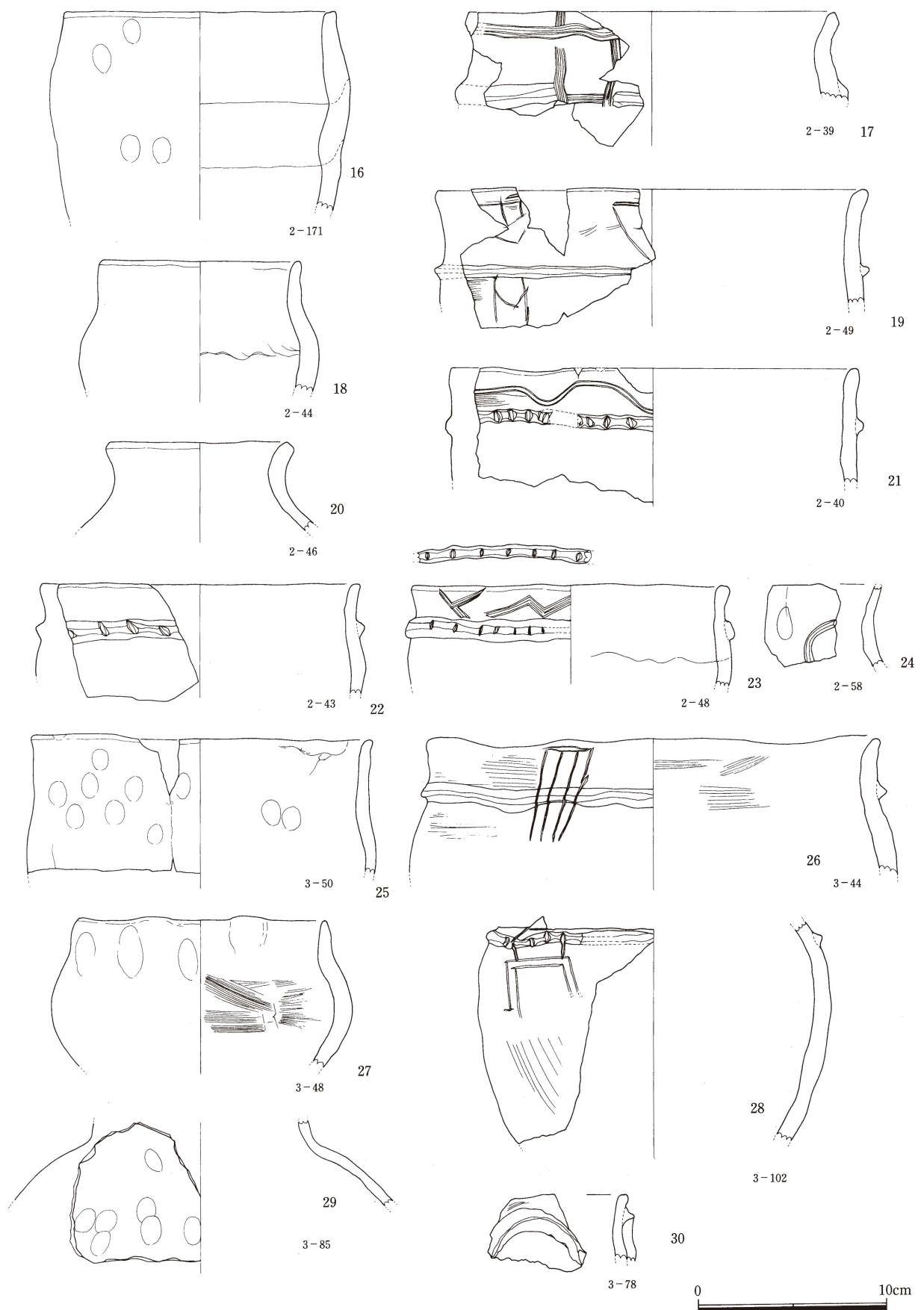


第13表 底部層位別棒グラフ

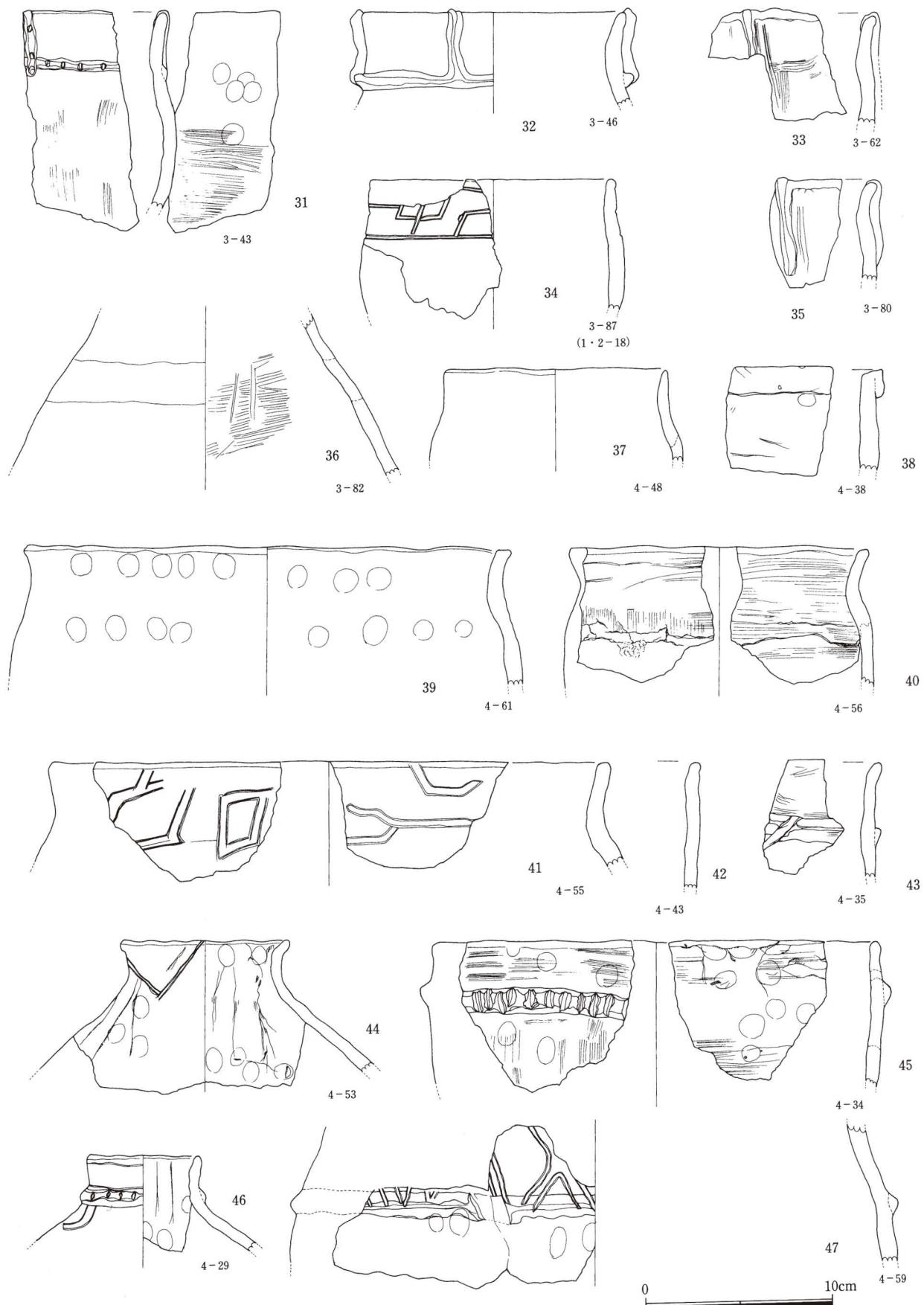




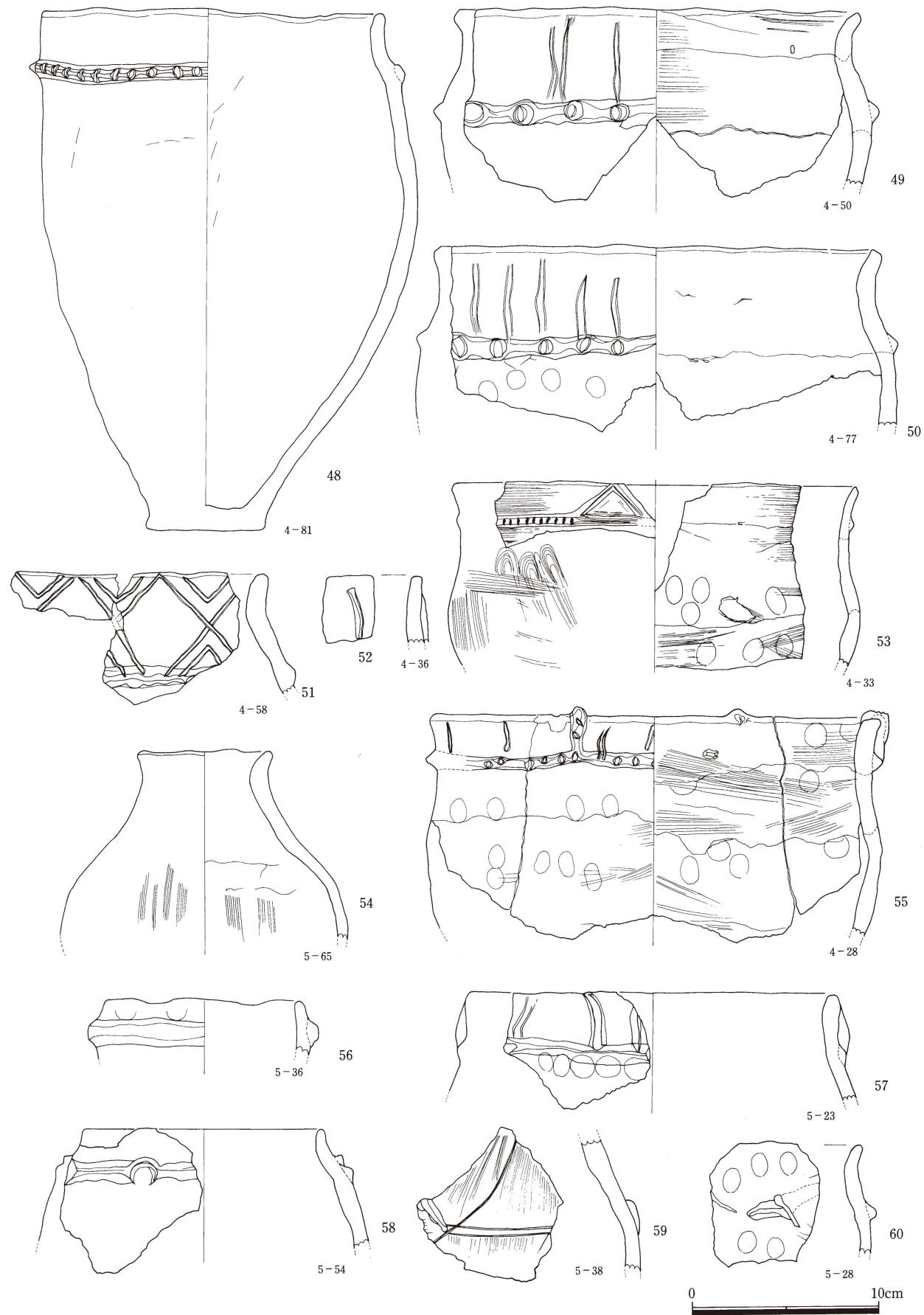
第10図 1区、1、2区出土土器実測図



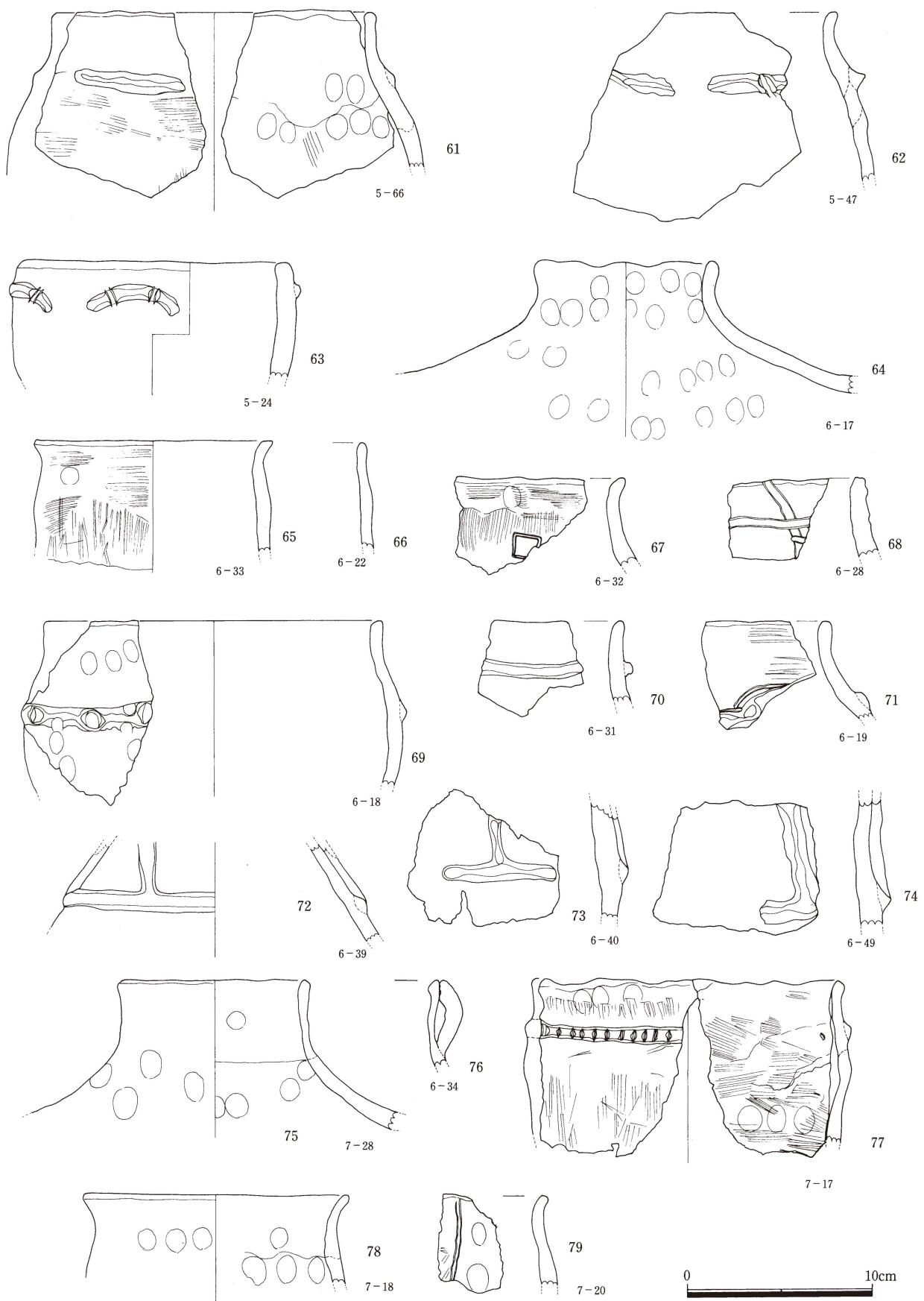
第11図 2区、3区出土土器実測図



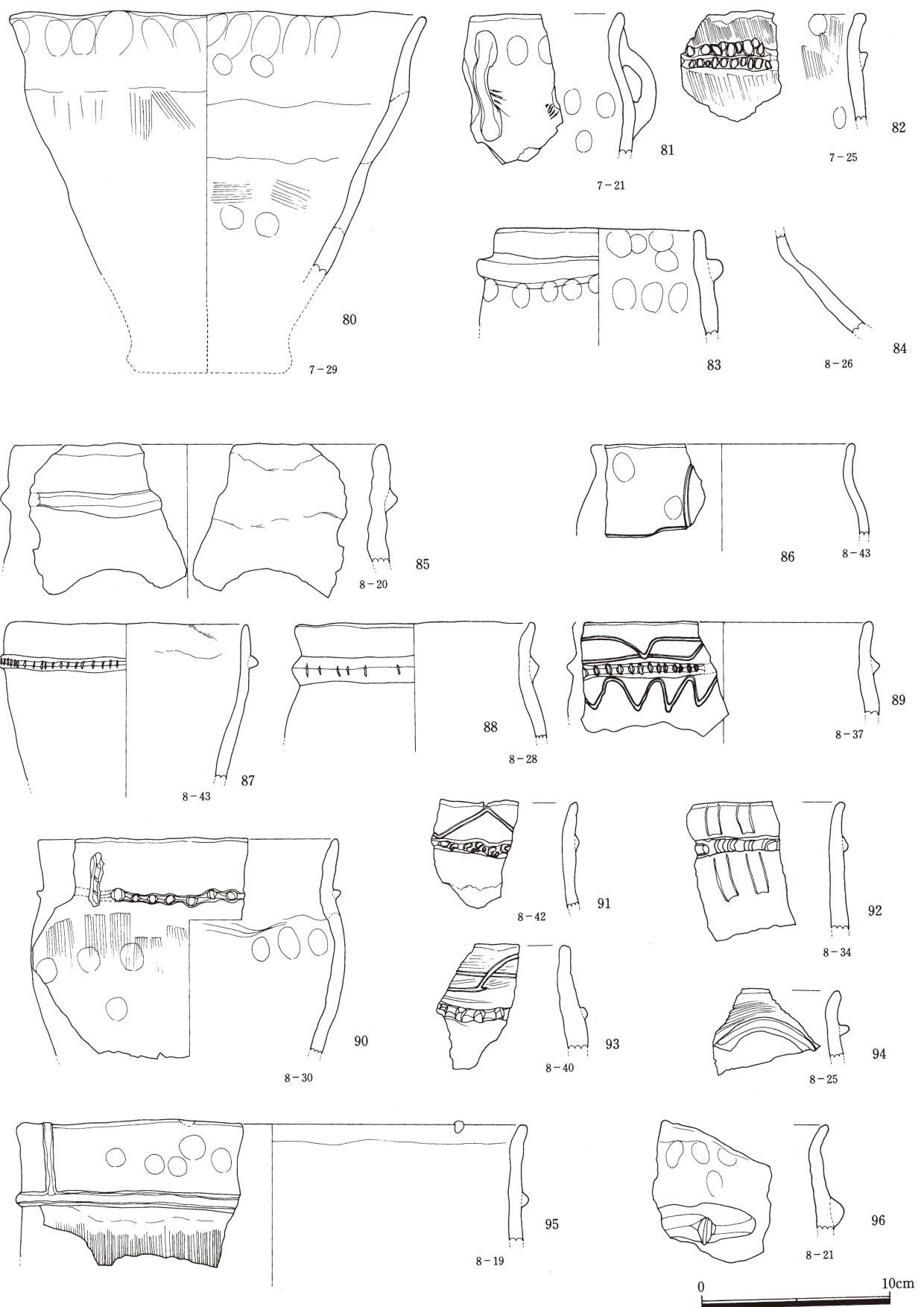
第12図 3区、4区出土土器実測図



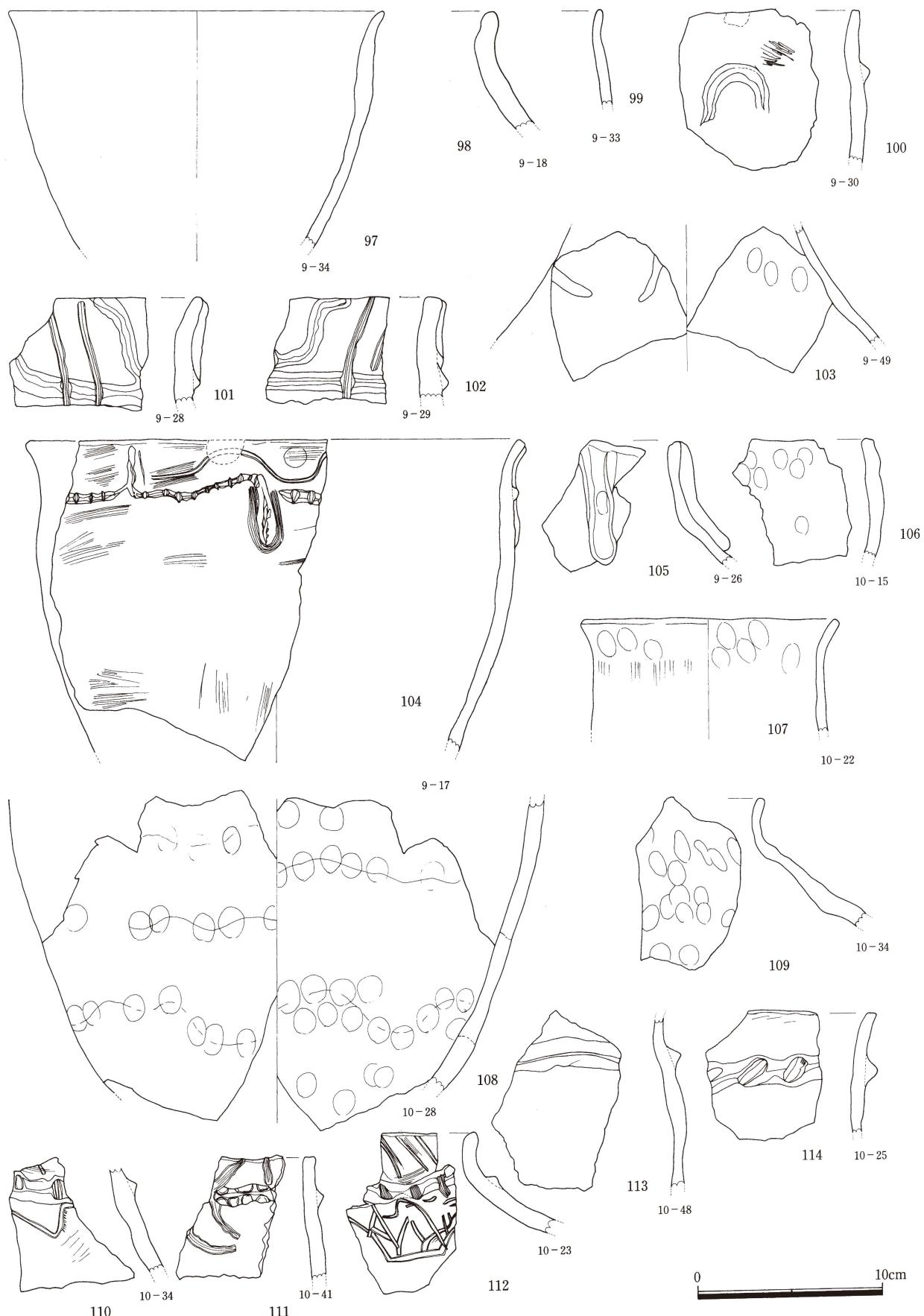
第13図 4区、5区出土土器実測図



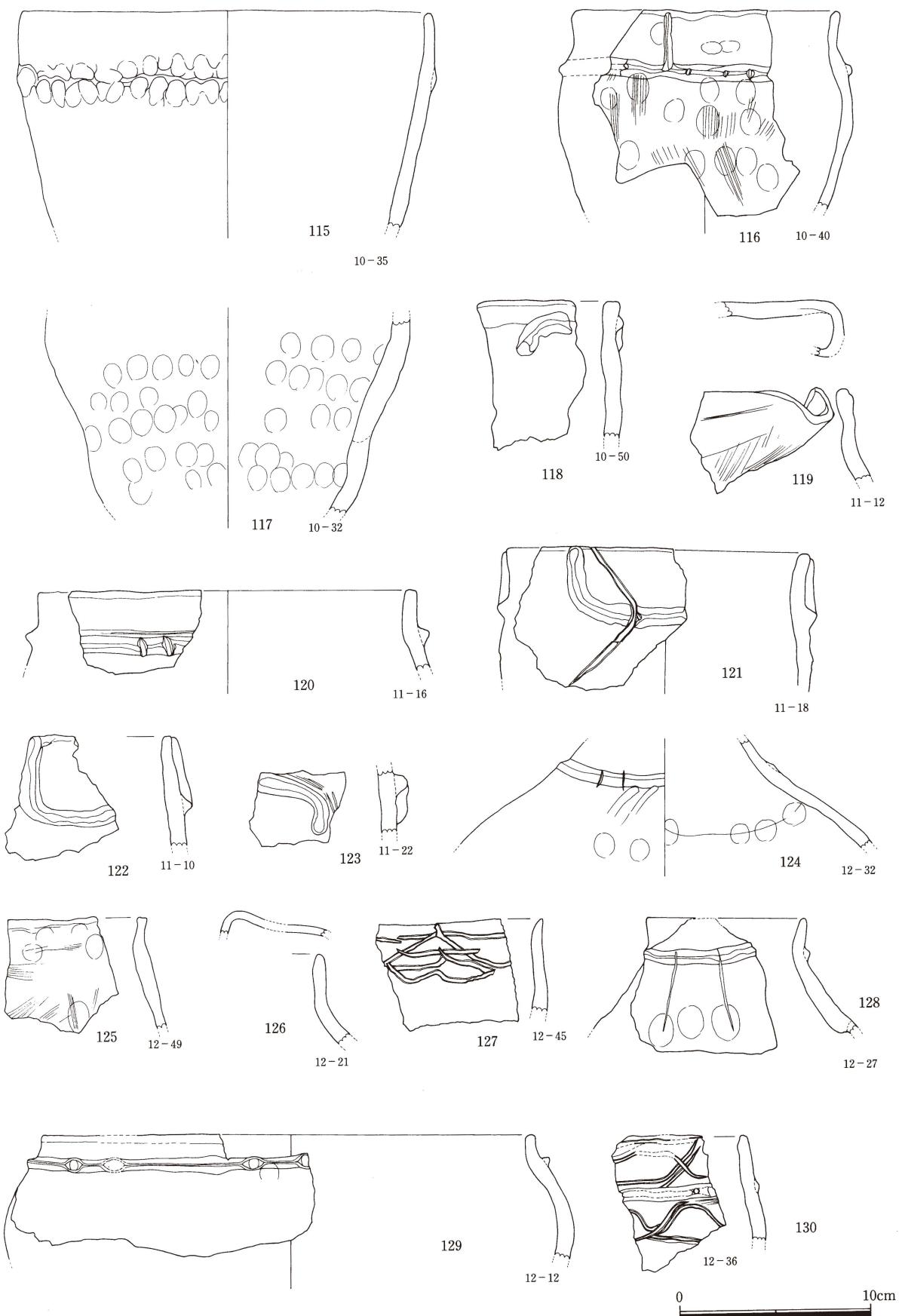
第14図 6区、7区出土土器実測図



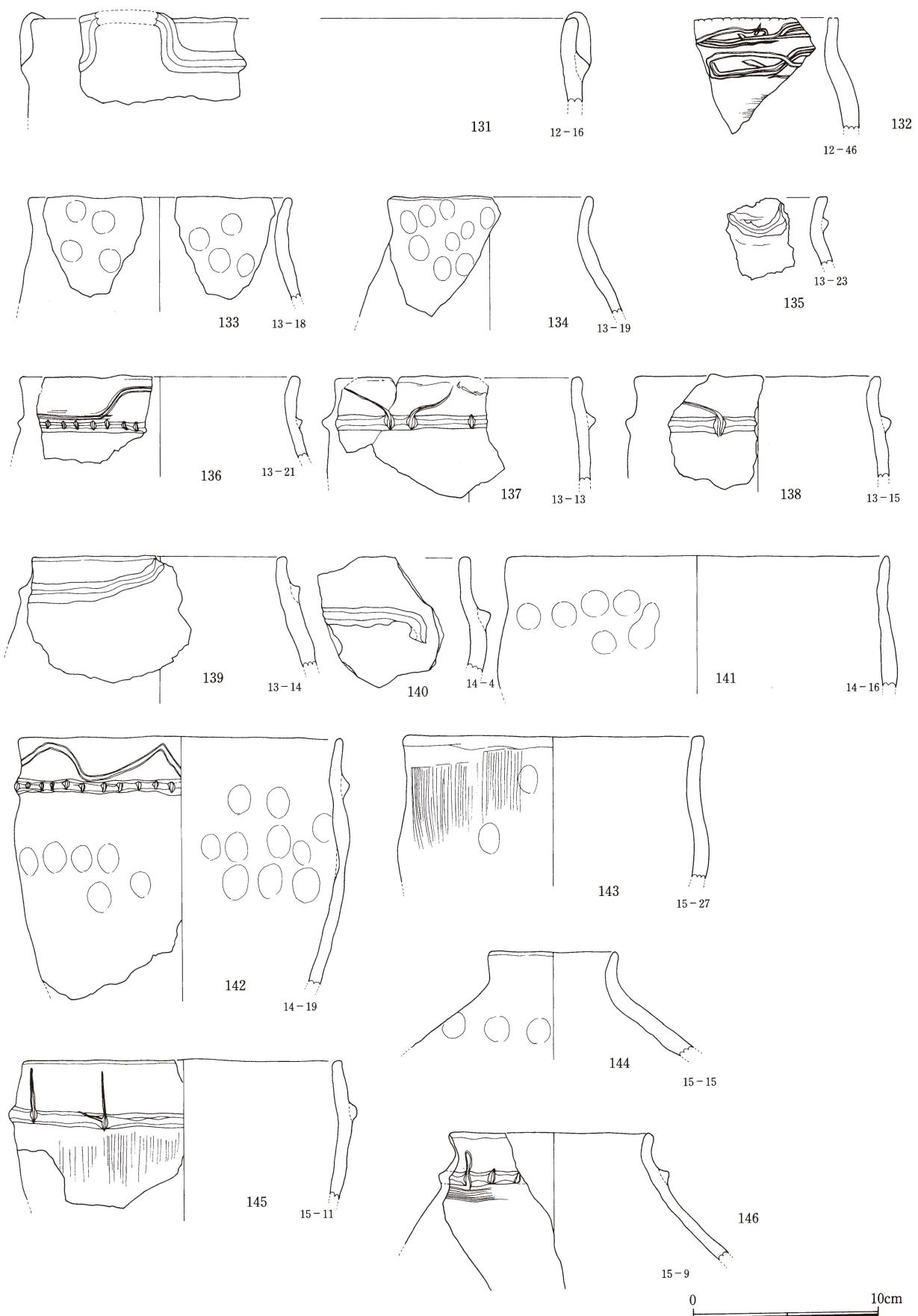
第15図 7区、8区出土土器実測図



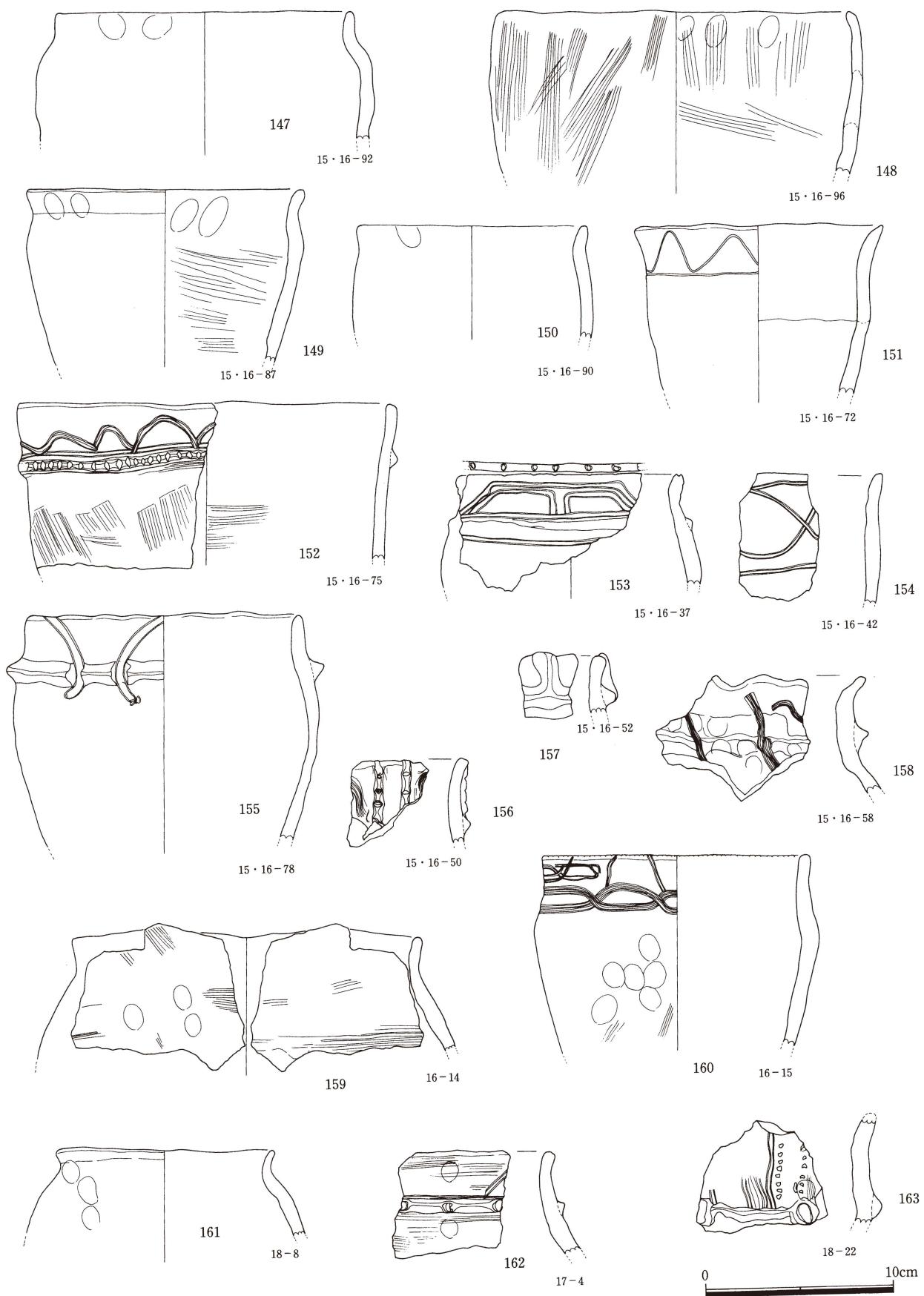
第16図 9区、10区出土土器実測図



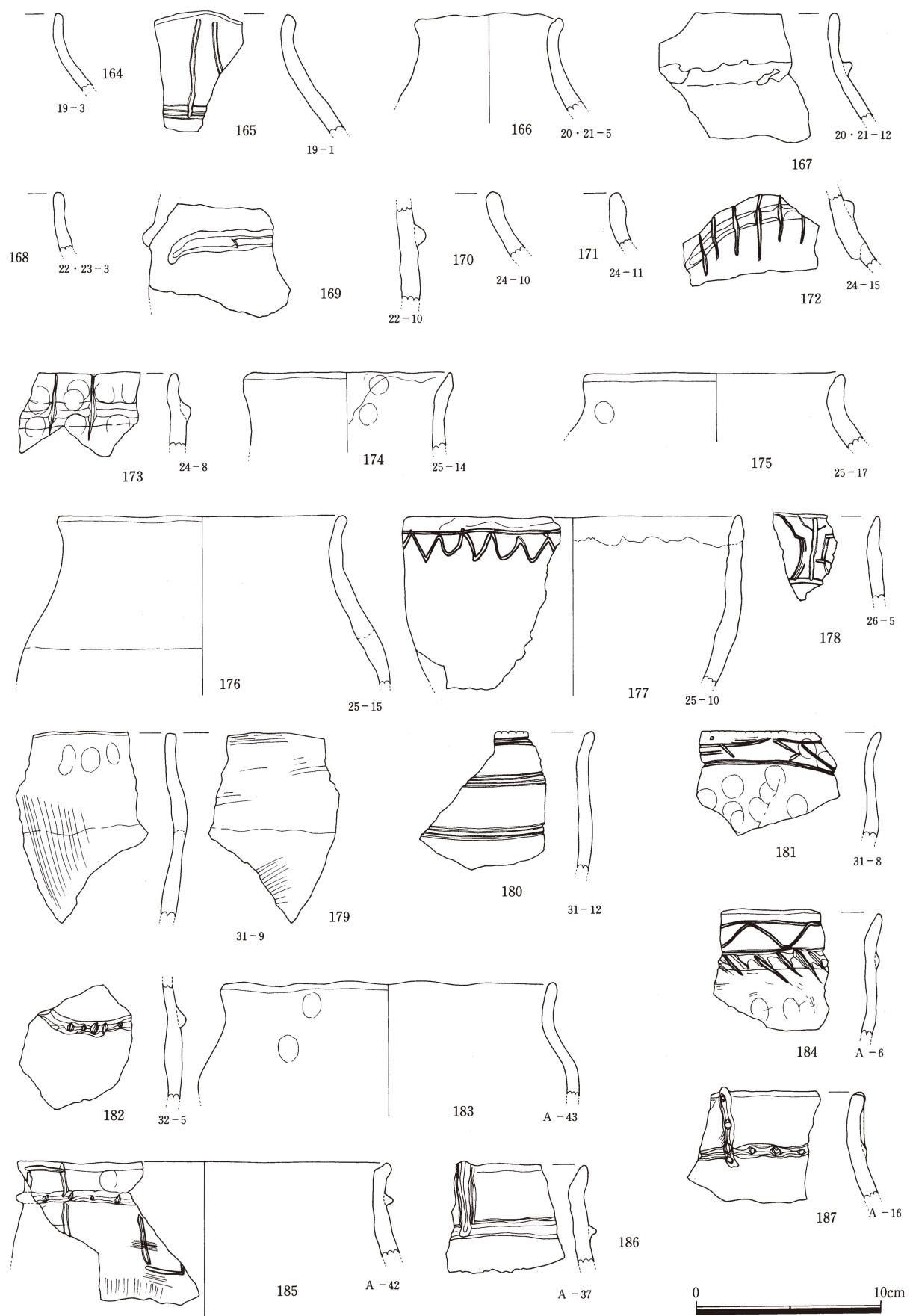
第17図 10区～12区出土土器実測図



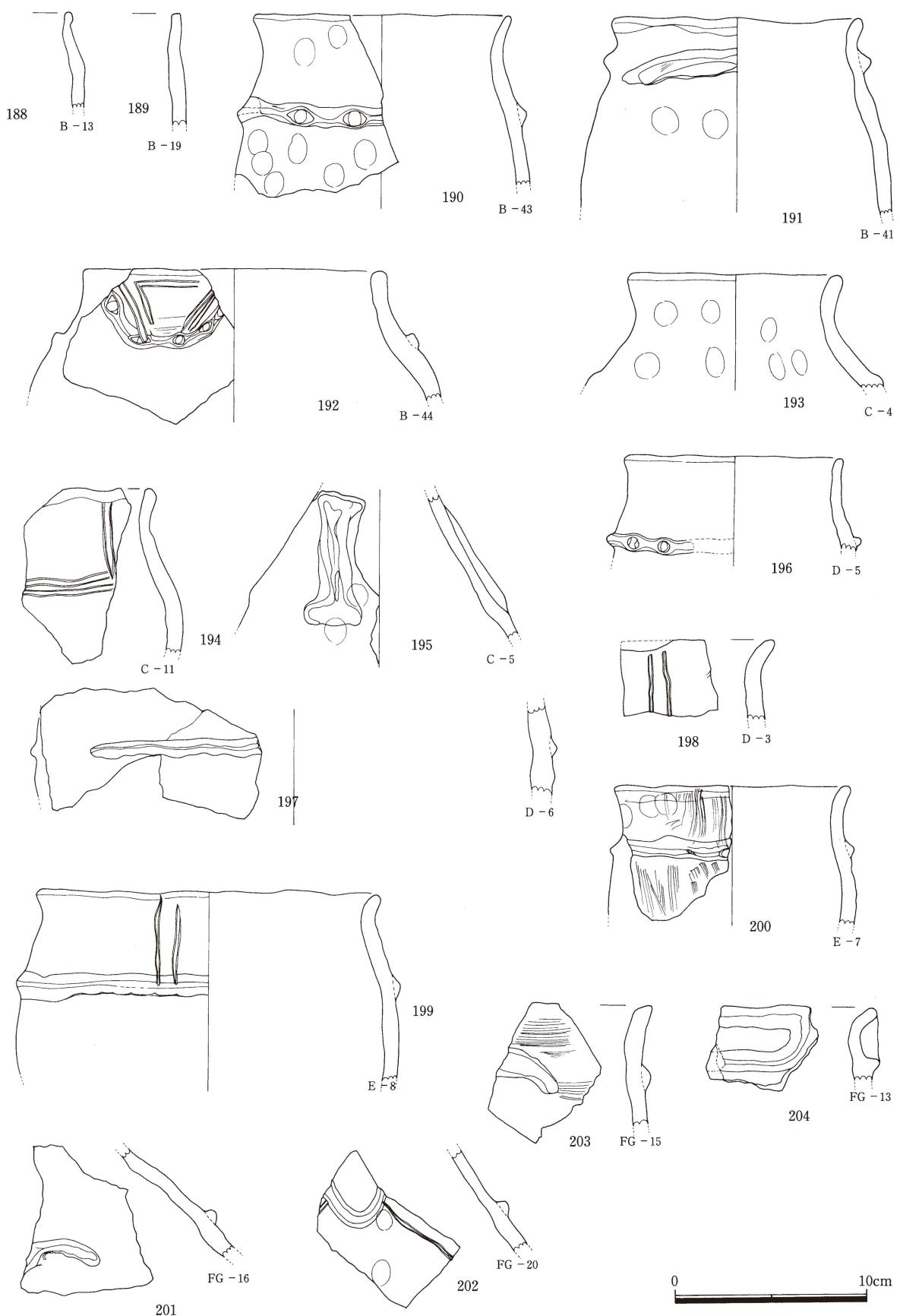
第18図 12区～15区出土土器実測図



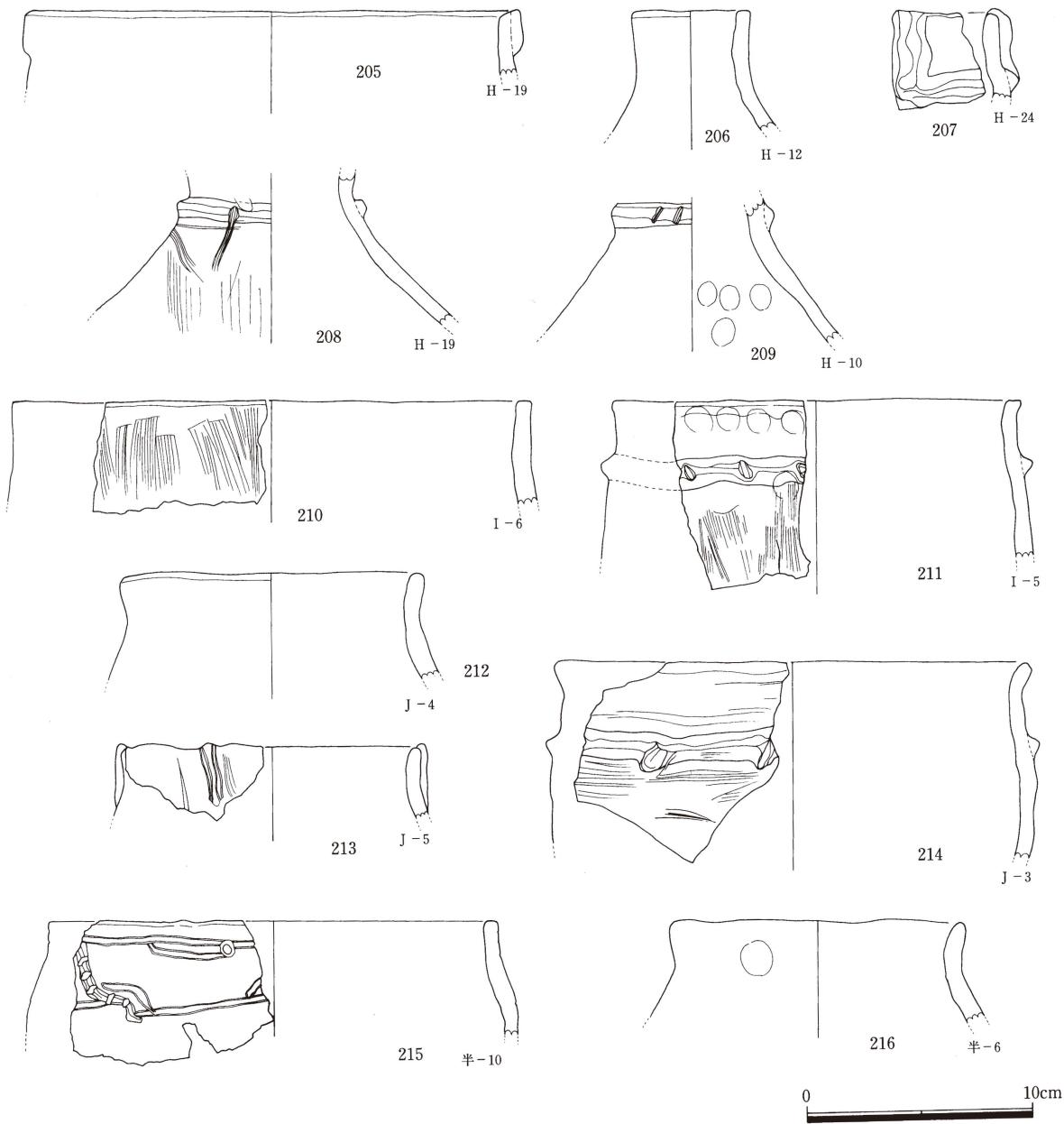
第19図 15・16区、16区、17区、18区出土土器実測図



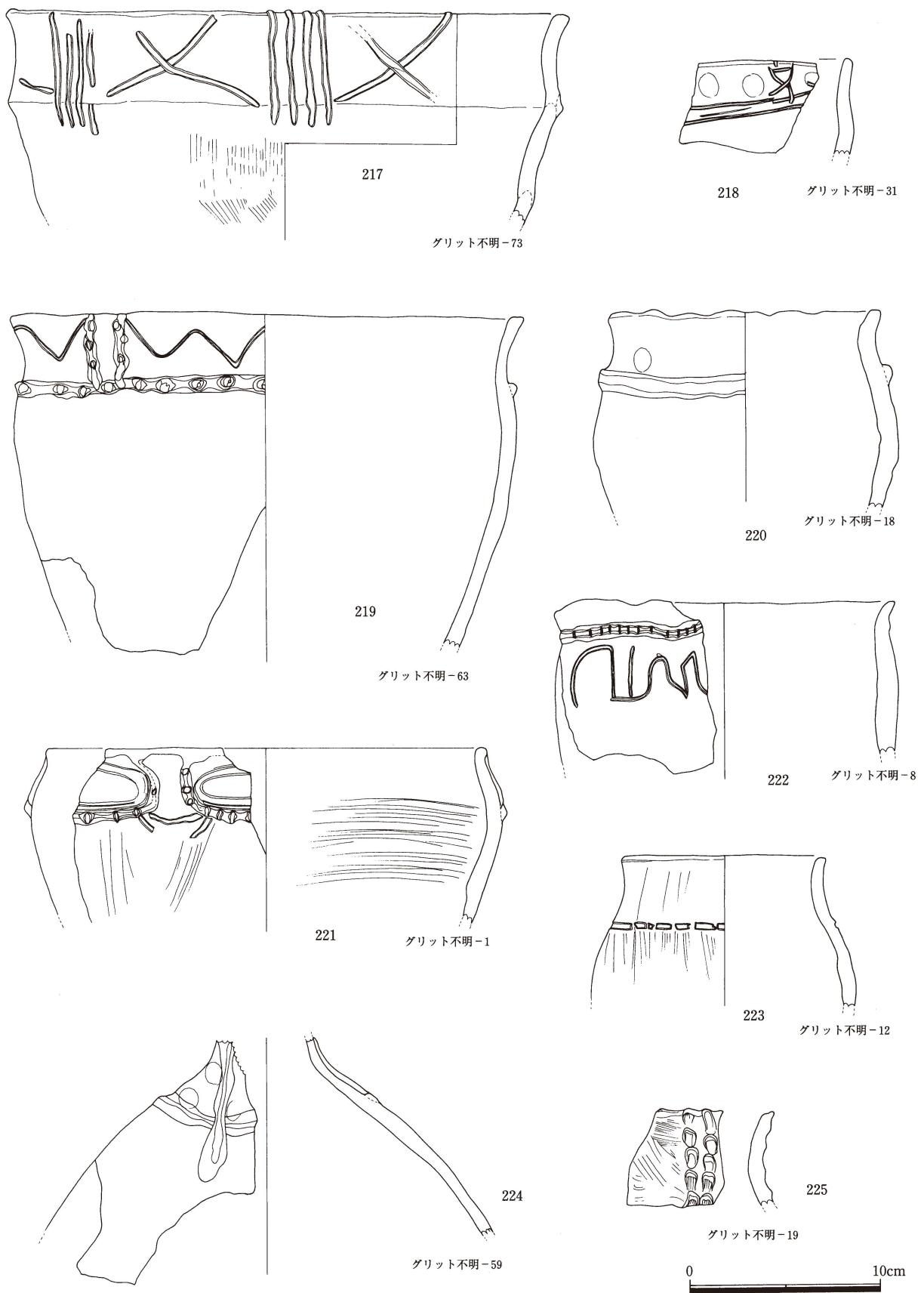
第20図 19区、20・21区、22・23区、22区、24区、25区、26区、31区、32区、A区出土土器実測図



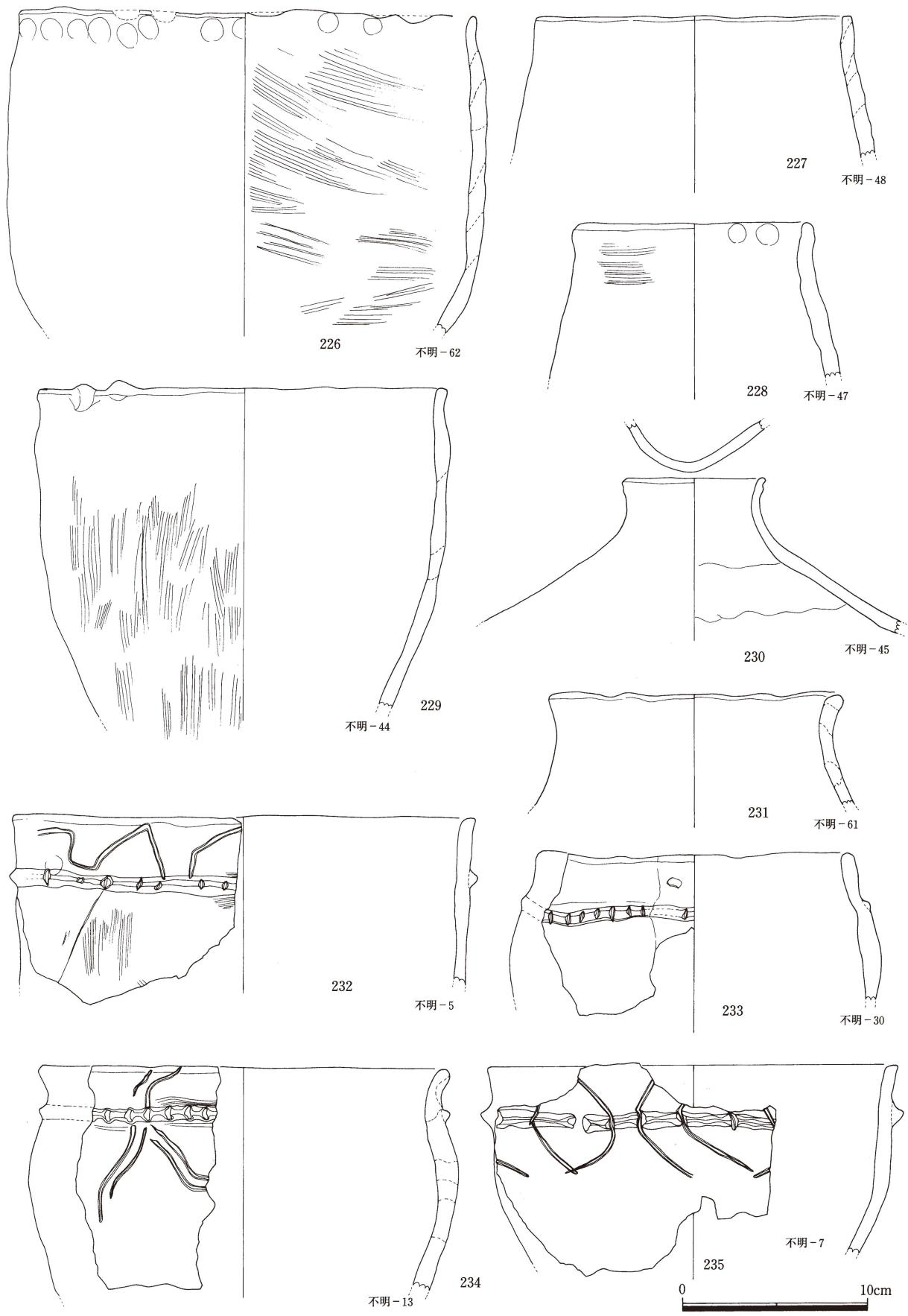
第21図 B区、C区、D区、E区、F区、G区出土土器実測図



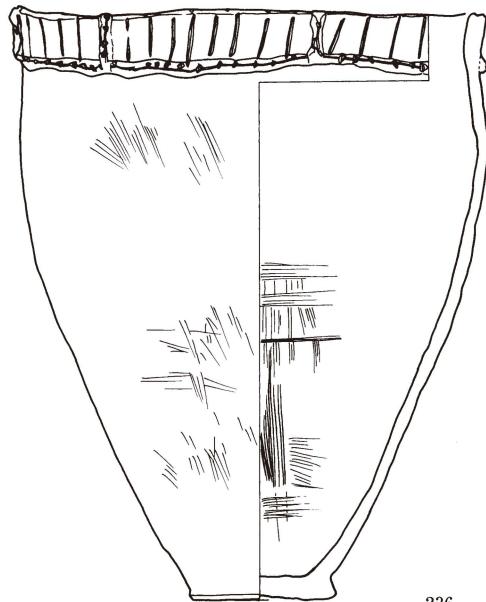
第22図 H区、I区、J区、半島出土土器実測図



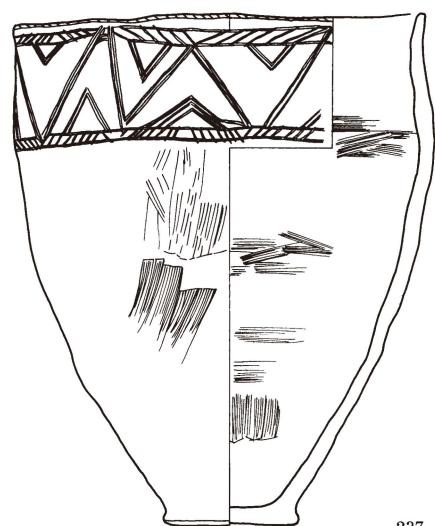
第23図 グリット不明区出土土器実測図



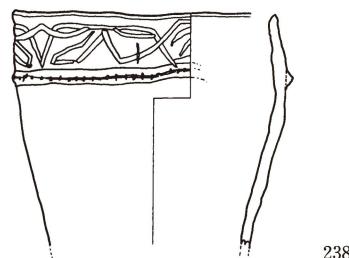
第24図 グリット不明区出土土器実測図



236



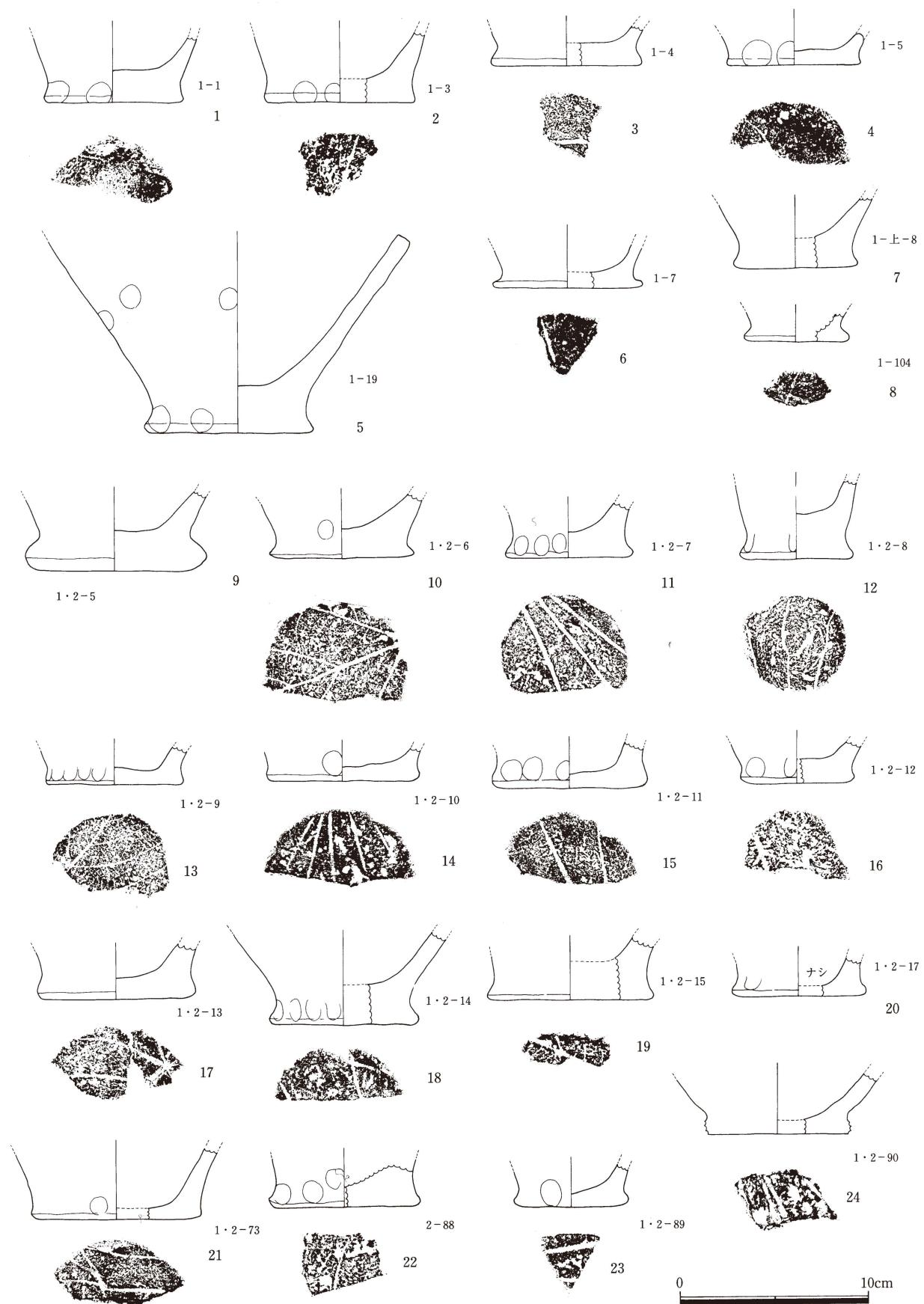
237



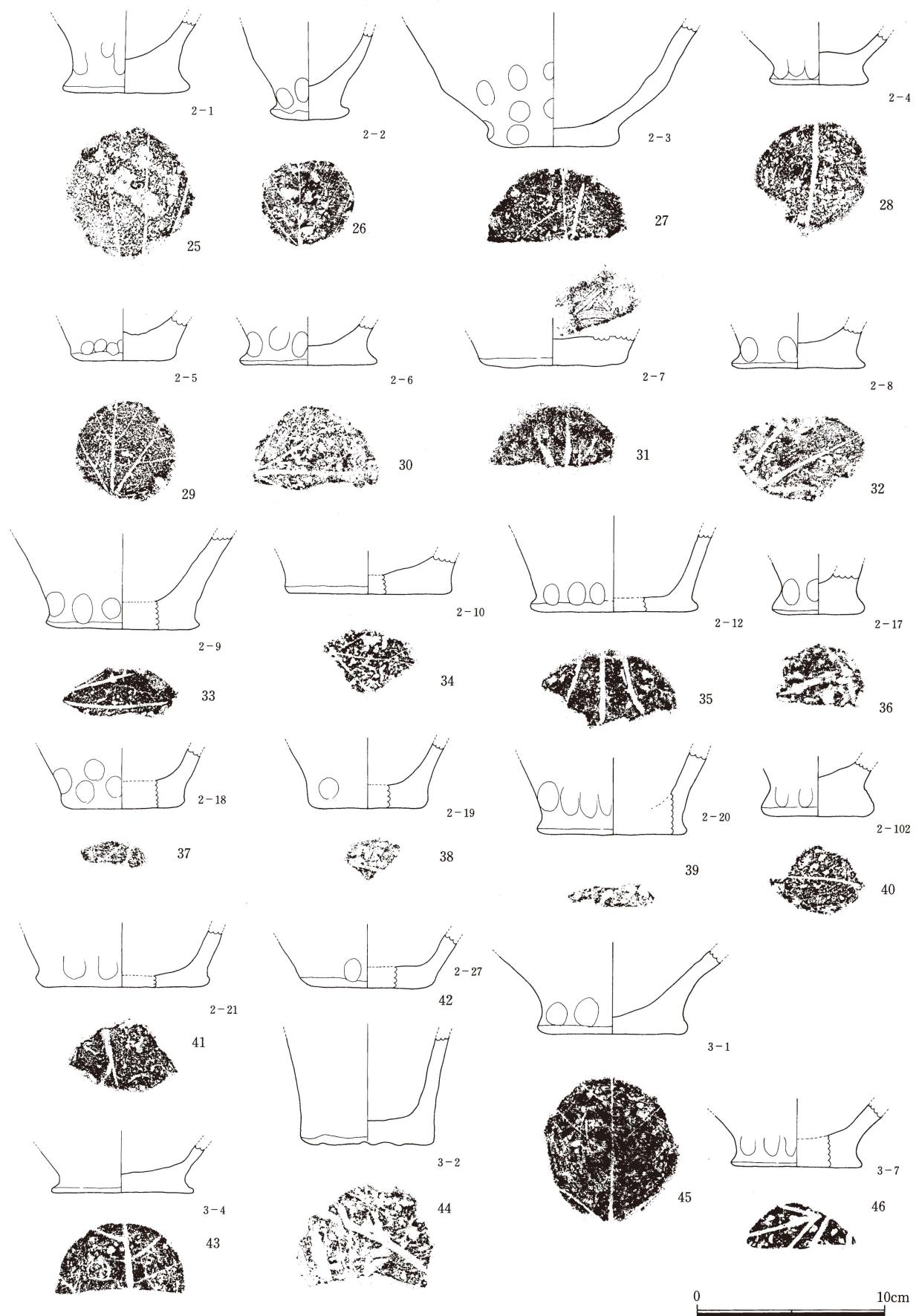
238

0 10cm

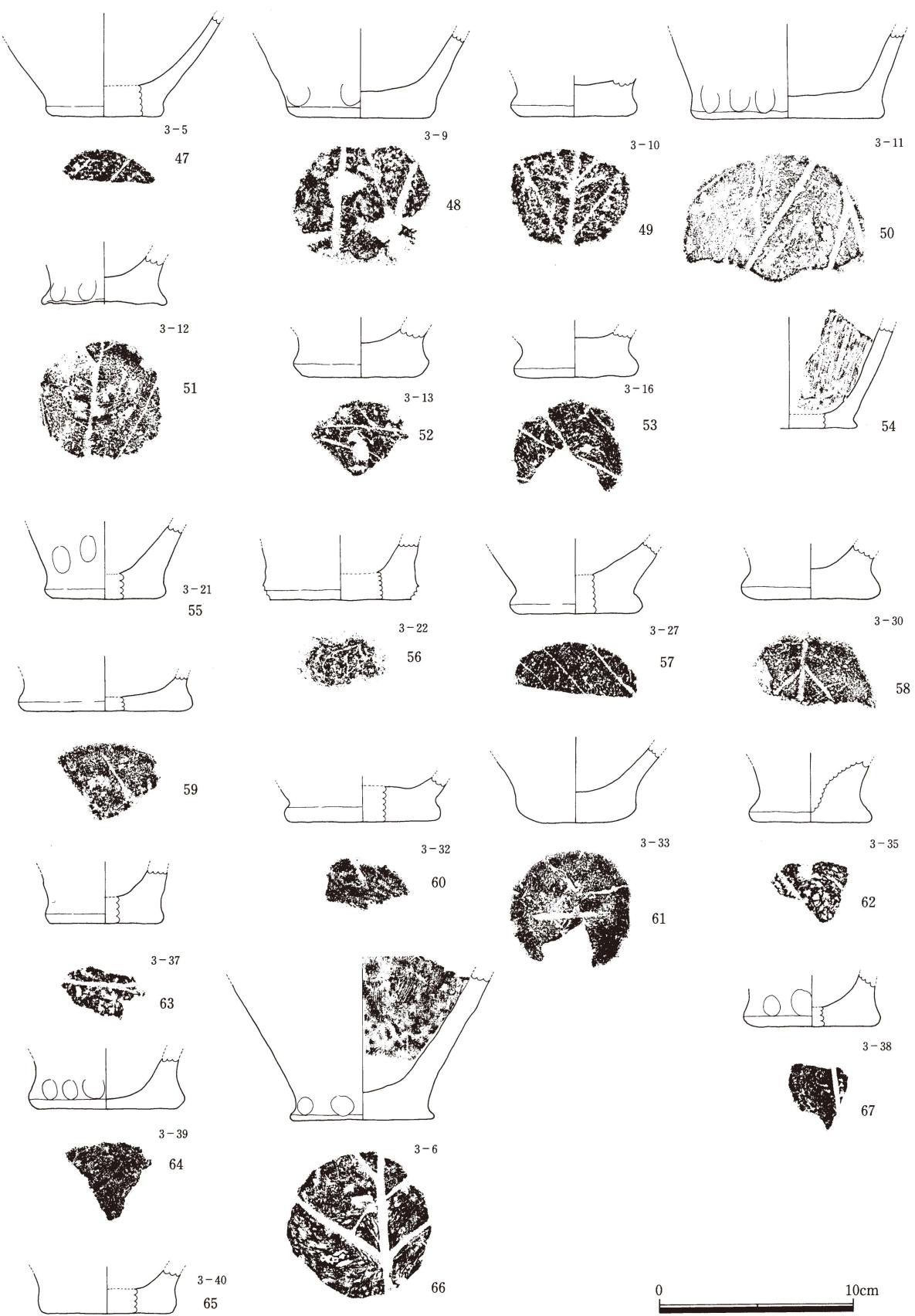
第25図 土器実測図



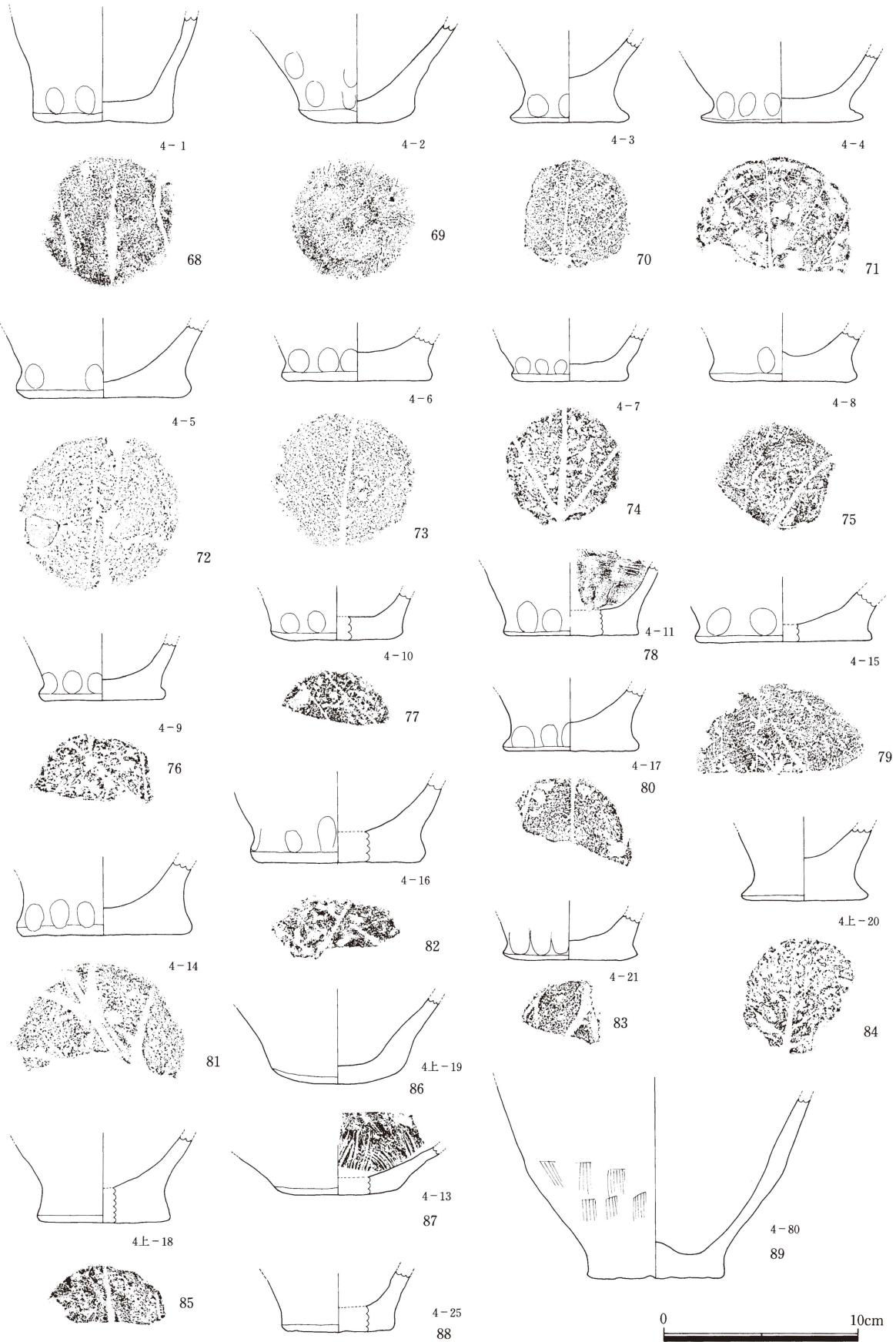
第26図 1区、1・2区、2区出土底部実測図



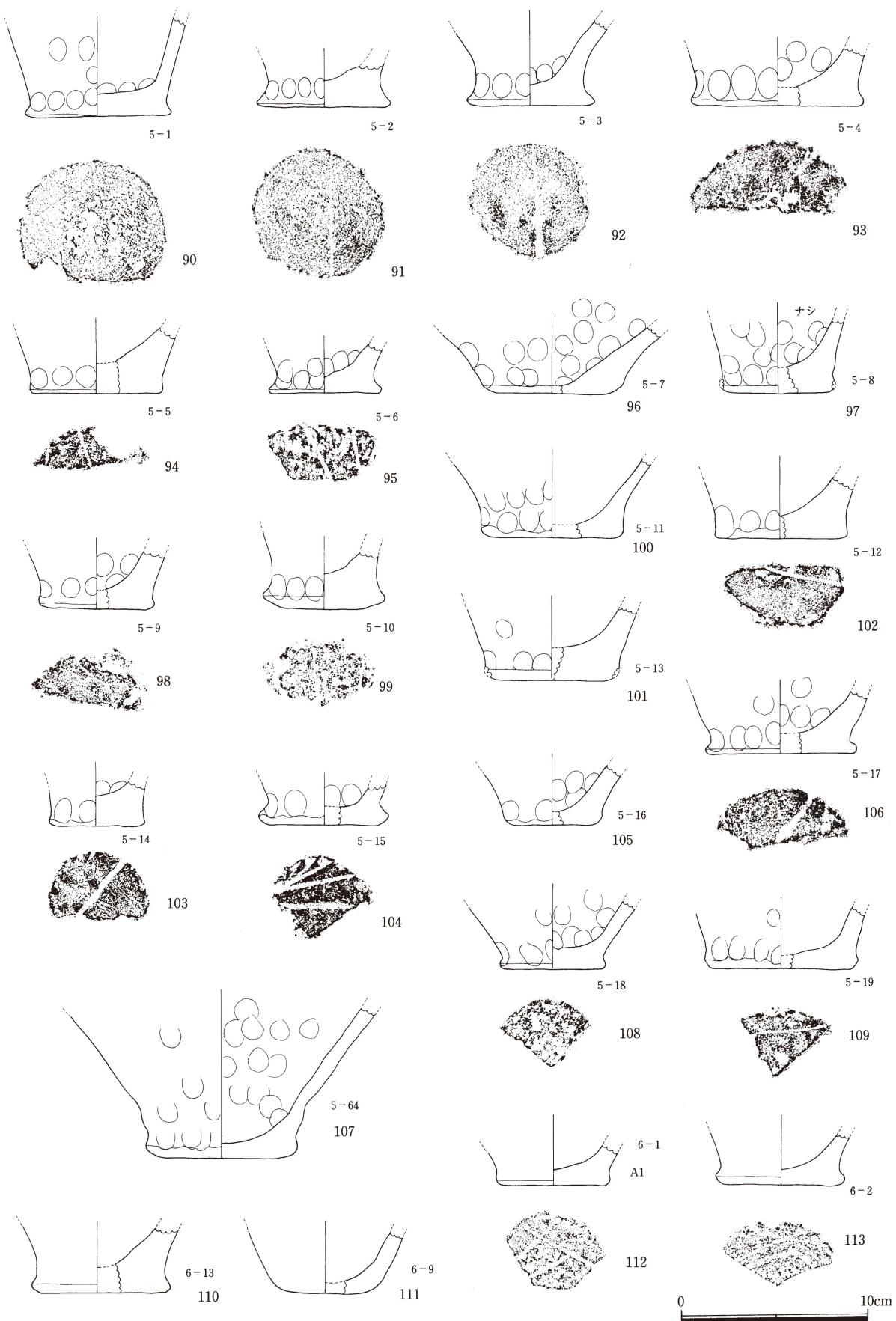
第27図 2区、3区出土底部実測図



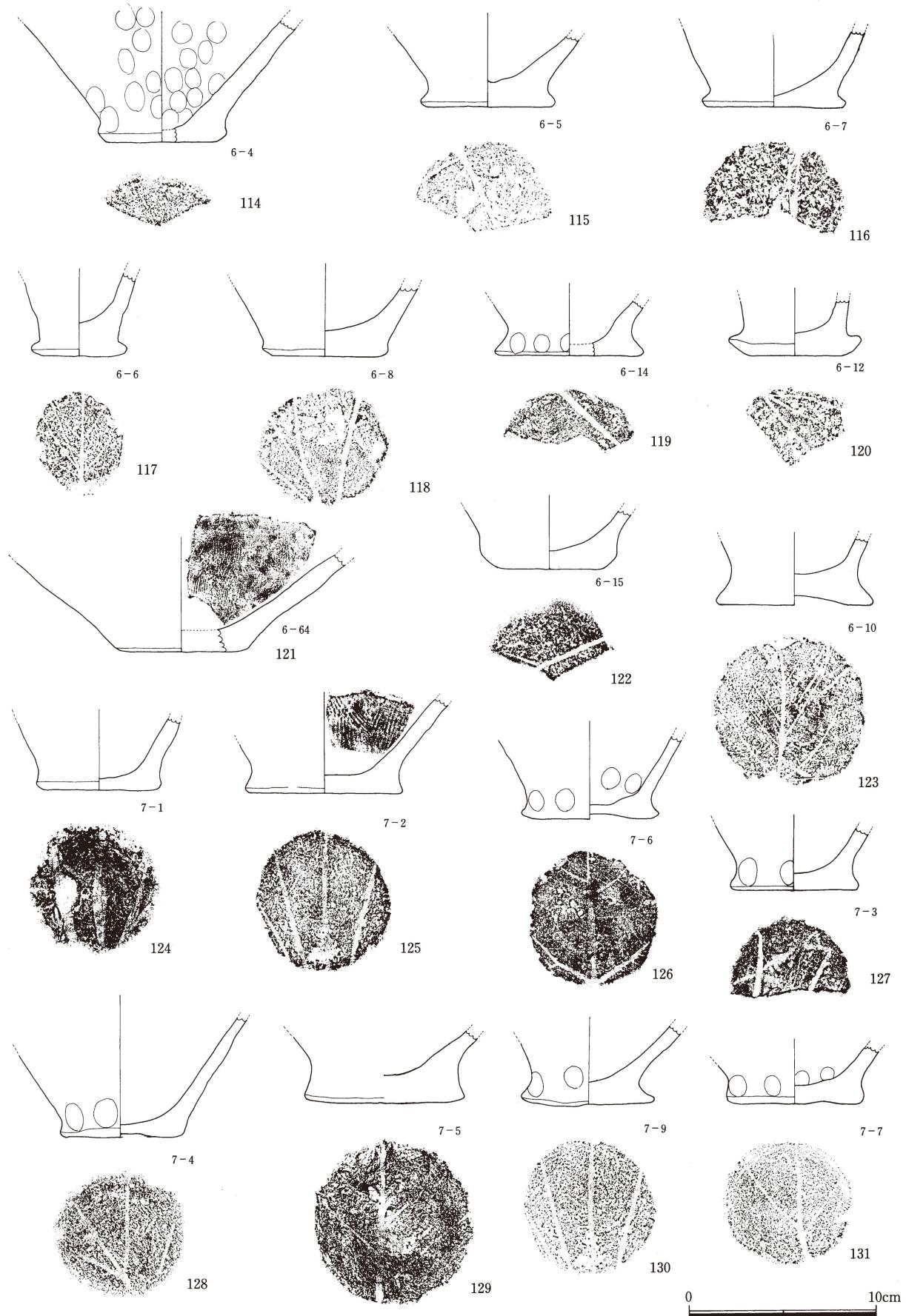
第28図 3区出土底部実測図



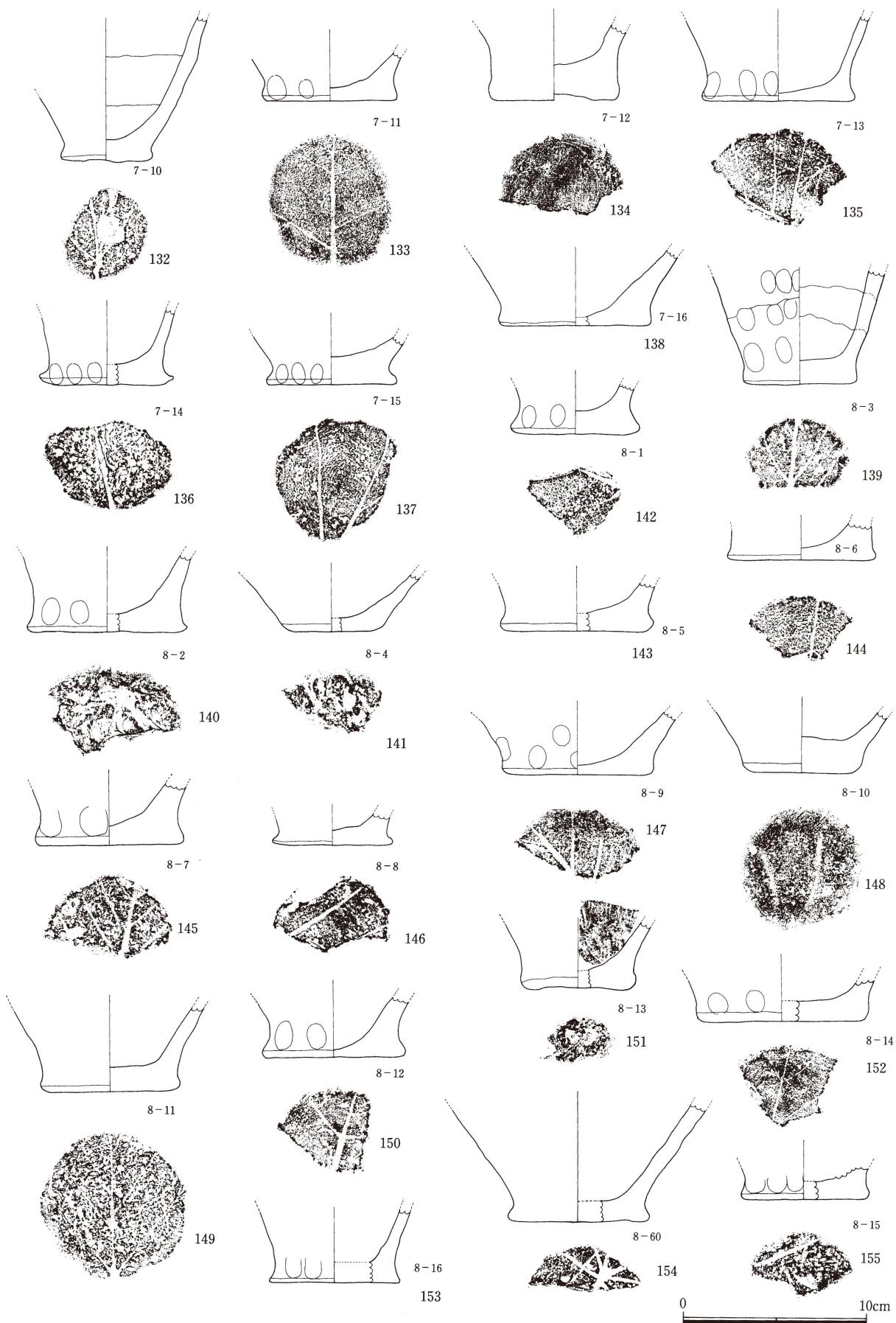
第29図 4区出土底部実測図



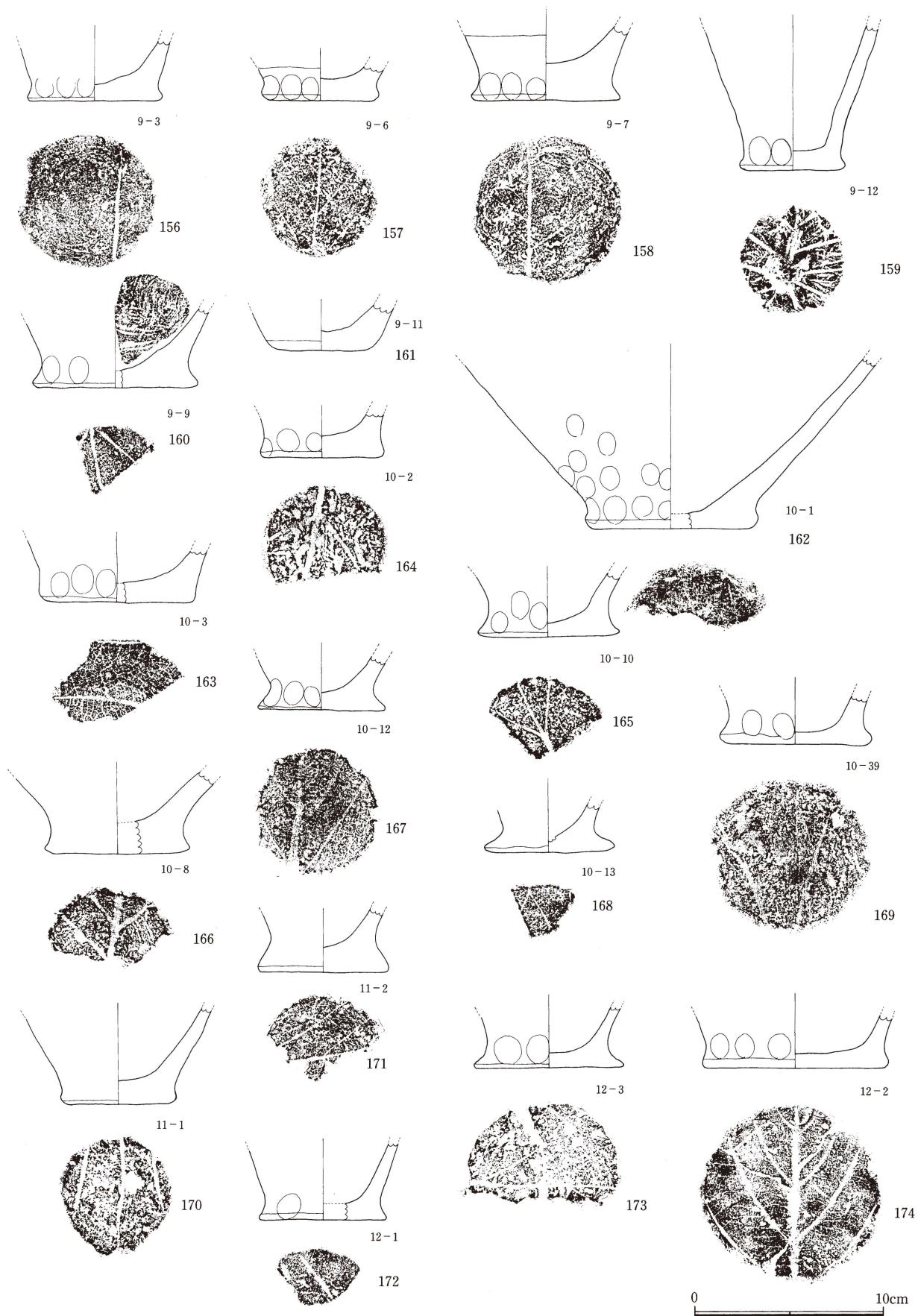
第30図 5区、6区出土底部実測図



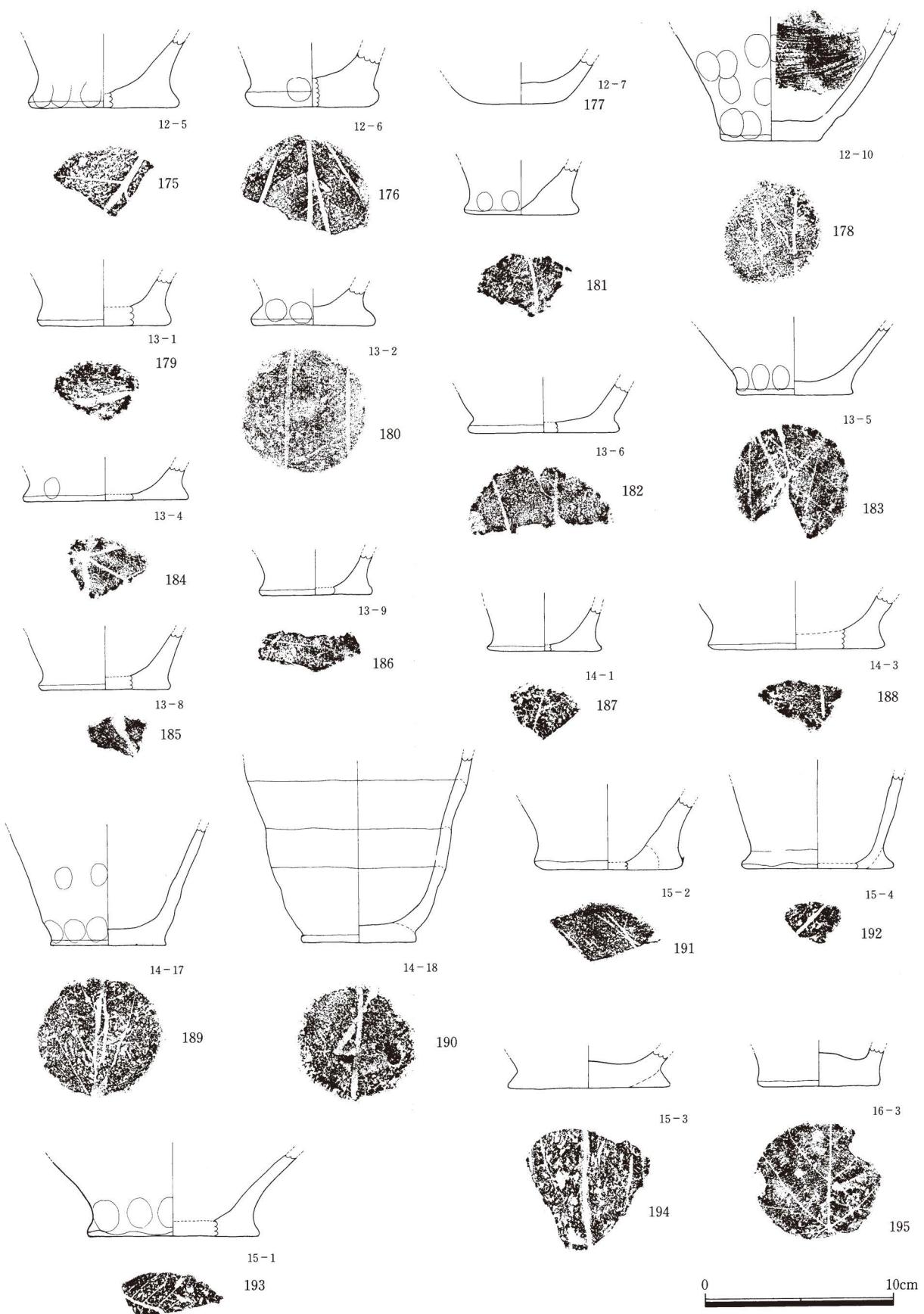
第31図 6区、7区出土底部実測図



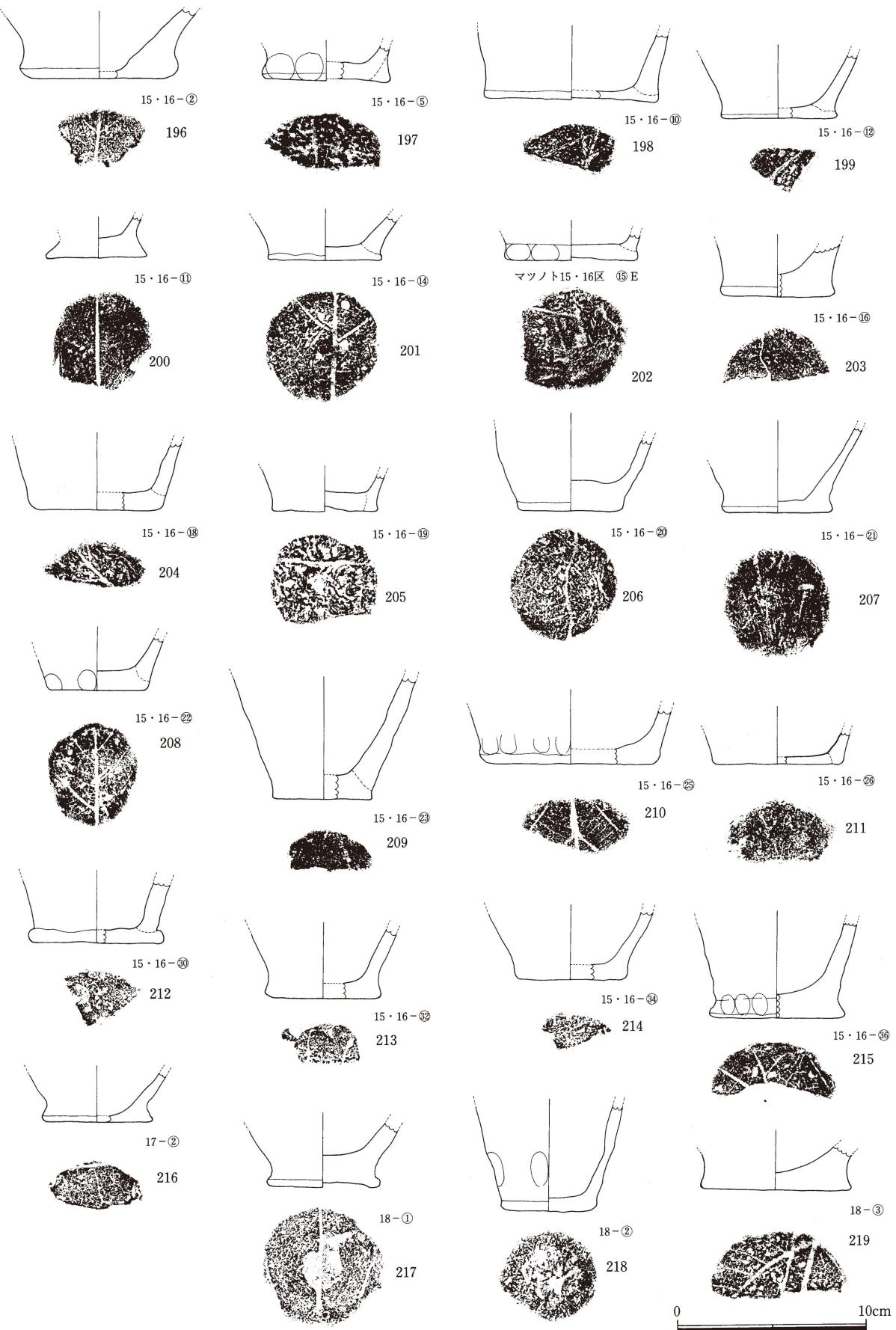
第32図 7区、8区出土底部実測図



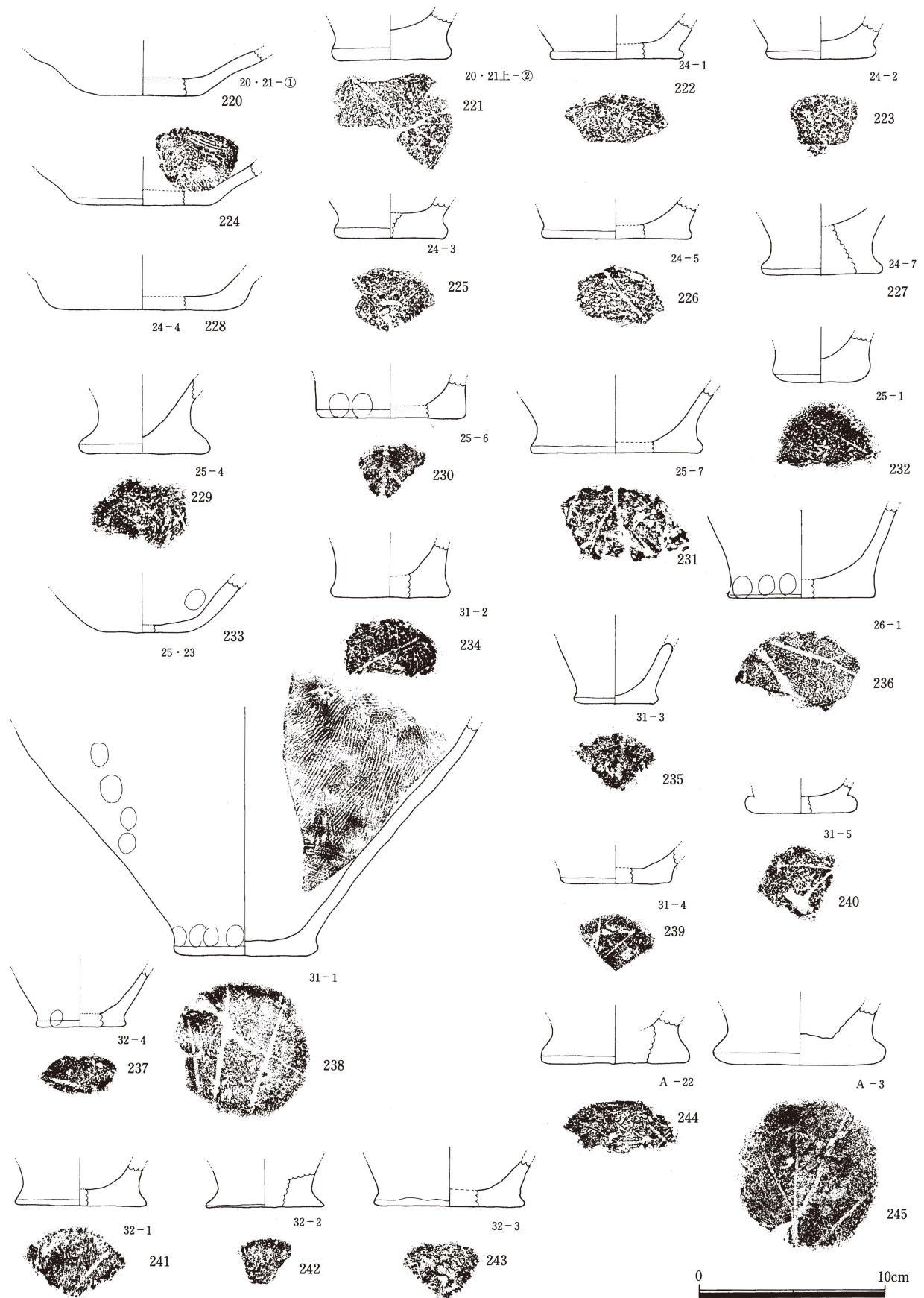
第33図 9区、10区、11区、12区出土底部実測図



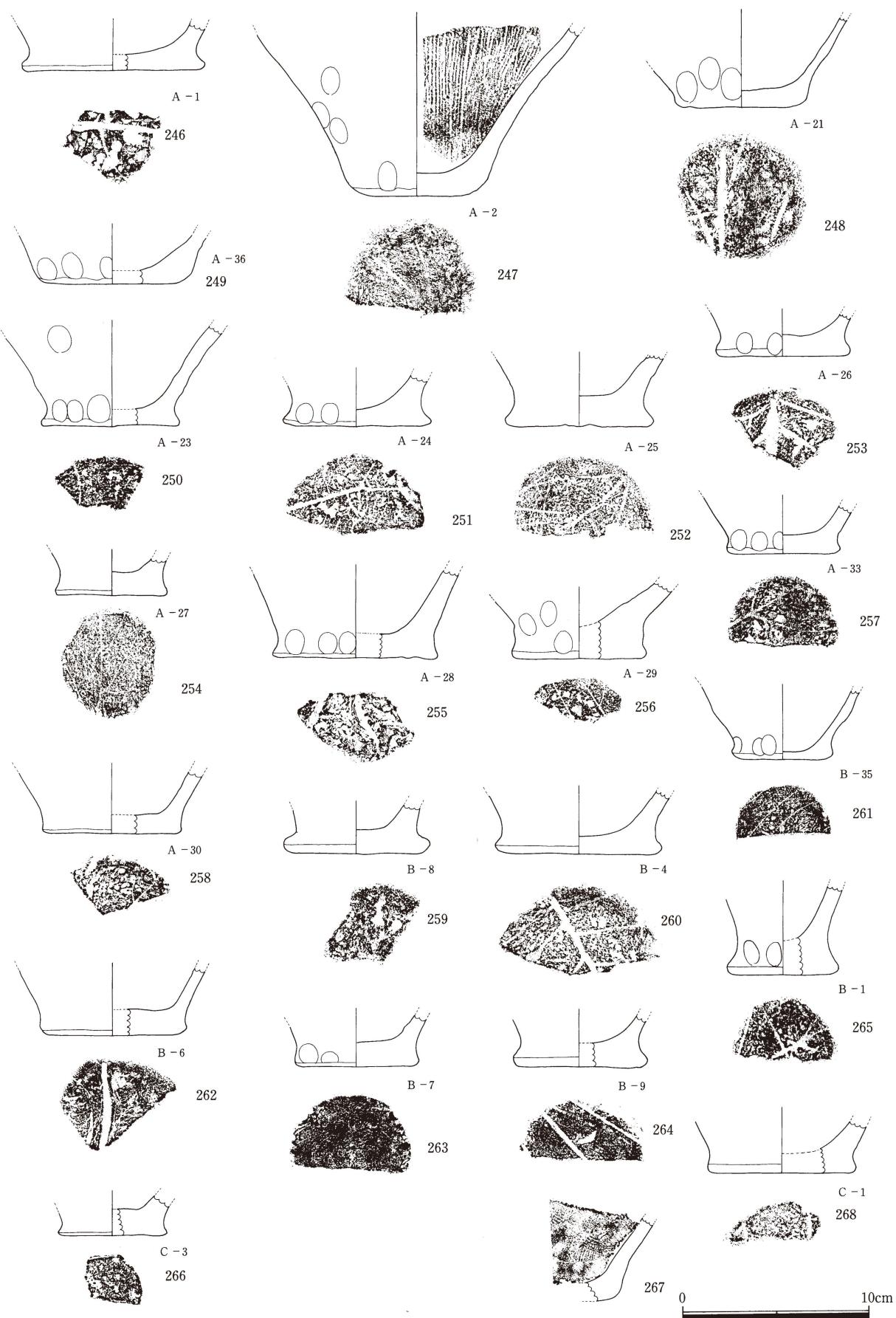
第34図 12区、13区、14区、15区出土底部実測図



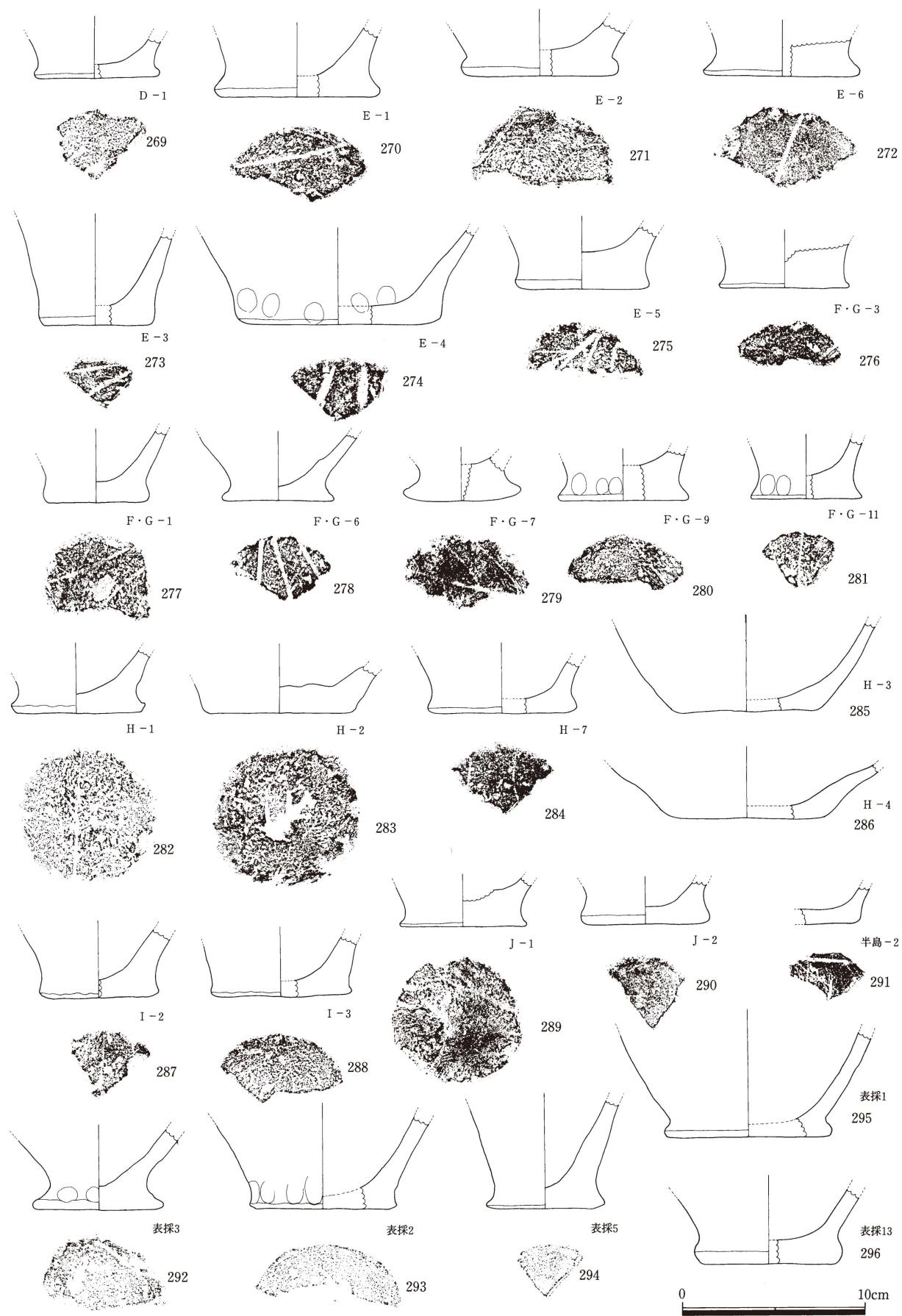
第35図 15・16区、17区、18区出土底部実測図



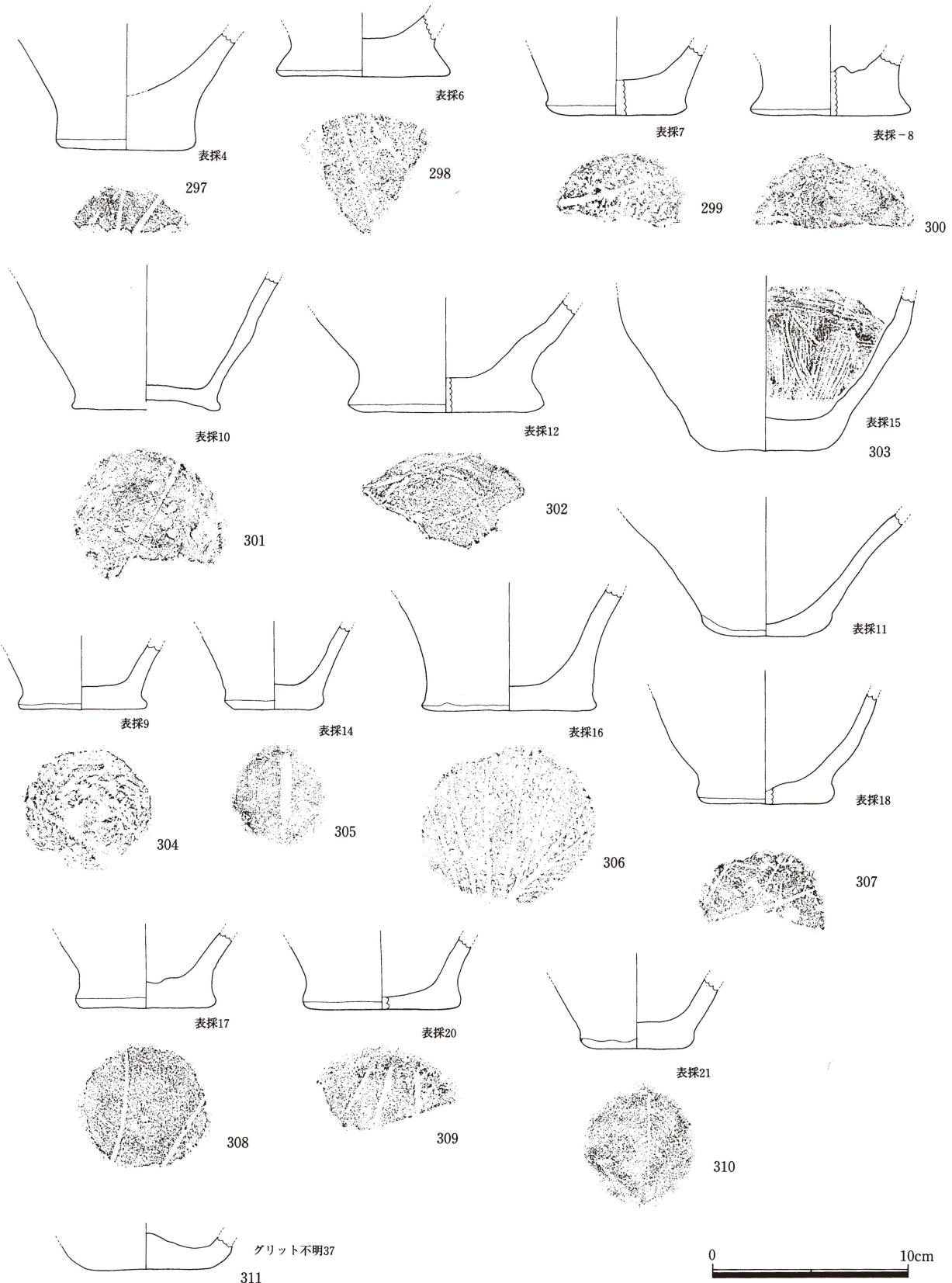
第36図 20・21区、24区、25区、26区、31区、32区、A区出土底部実測図



第37図 A区、B区、C区出土底部実測図



第38図 D区、E区、F区、H区、J区、I区、半島区、表探出土底部実測図



第39図 表採、出土区不明底部実測図

〈貼付文〉

縦方向や横方向へ直線的に粘土紐を貼り付けるもの（第10図15、第14図61ほか）や弧状や鍵状に粘土紐を貼り付けるもの（第11図30、第16図100ほか）がある。また、粘土紐には刻み目が施されているものもある。沈線文土器と同様、第1文化層出土のものがほとんどである。

〈刺突文〉

半裁竹菅状の施文具で押し引くように施文しているものをさす（第23図223、225）。第23図223は横位に、第23図225は縦位に施される。

その他に、沈線文と貼付文を組み合わせているもの（第10図1ほか）もある。2類土器の中で出土する割合はもっとも低い。

（3）3類土器

マツノト遺跡からは、琉球列島以外の地域で製作された土器が一定量検出されている。また、それらを在地で模倣した土器、あるいは外来品の影響をうけて製作されたと見られる土器も散見される。これらを一括して3類と分類し、胎土、混和材、色調の観察から前者を外来土器、後者を外来系土器として扱った。日本列島の弥生時代から古墳時代と対応すると考えられるものを先史時代の土器、奈良時代以降のものを歴史時代の土器と区別して報告する。なお、個々の遺物の観察所見は第14表に示す通りである。

先史時代の土器

〈外来系土器〉（第40図）

1から11は甕である。1から5は、逆L字状の肥厚した口縁をもつ土器である。口縁端部が無文のもの（1、2）と有文のもの（3～5）に分けられる。文様は沈線文によって構成されている。胴部に2条の沈線がめぐらされるもの（1）と口縁端部に有軸羽状文、胴部に縦位、斜位沈線文が施されるもの（4、5）がある。9、10は後者に含まれるものであろう。

7は口縁がくの字状に屈曲した無文の土器である。内外面に明瞭な指ナデ、指おさえ痕が観察できる。8は比較的長い口縁をもち、内面には明瞭な稜線が巡らされている。胴部には連続的な刺突文が施されている。

〈外来土器〉

12、13は南九州で製作された成川式土器と考えられる。器種は甕と壺がある。12は胴部中位に刻み目突帯がめぐる甕である。口縁端部は外面から押圧が加えられ、輪花様に縁取りされている。13は口縁がラッパ状に開いた壺である。

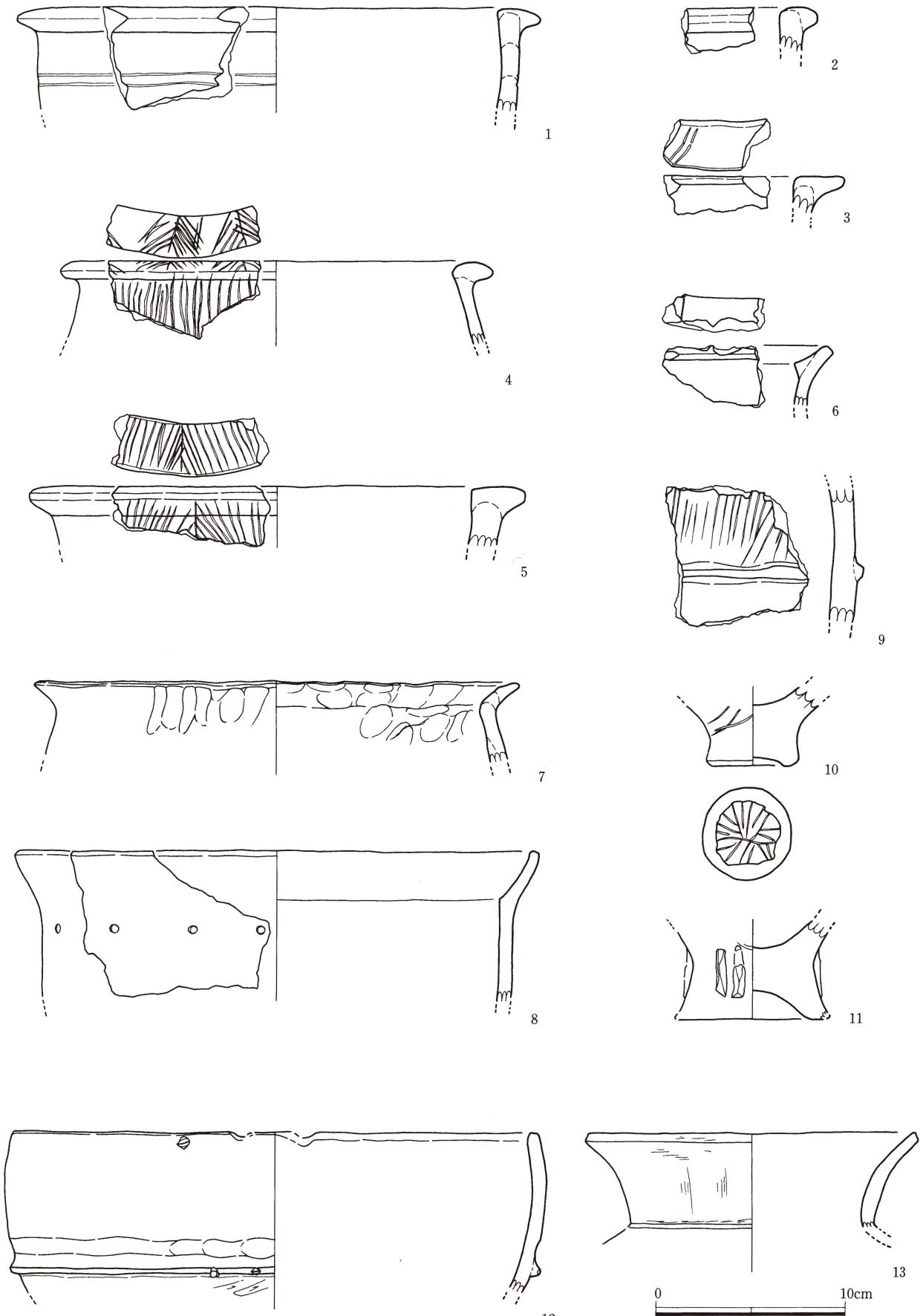
歴史時代の土器

〈外来土器〉（第41図）

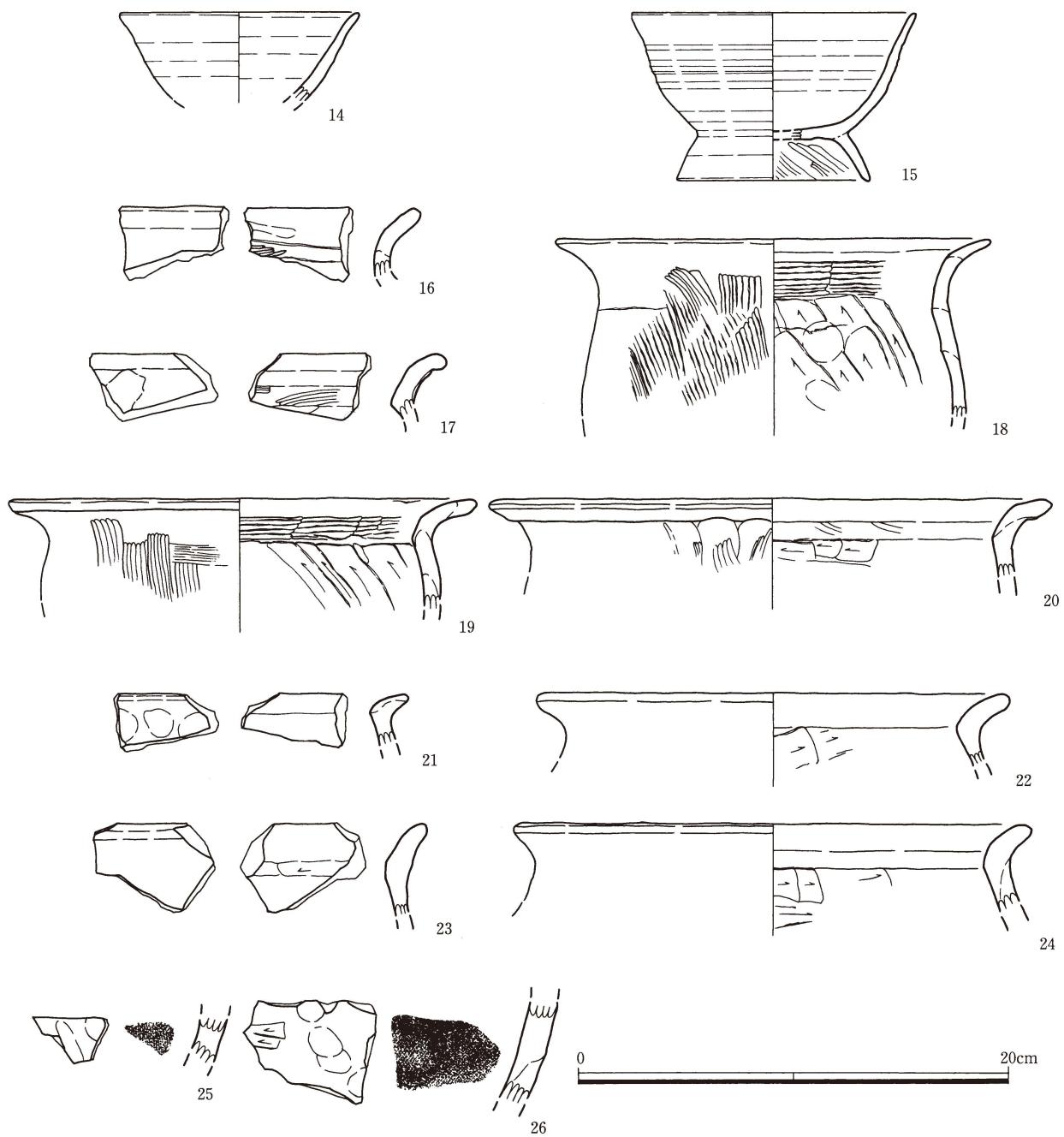
14から20は土師器である。器種は、碗（14、15）、甕（16～20）がある。

碗は、胎土が緻密で器壁が薄く、回転台で成形され丁寧に仕上げられている。14はやや小型の碗である。内外面に赤色の彩りが施されている。15は高台付きの碗である。口径に対して、底径が広く、器高に比べ高台高は高い。体部は丸みを帶び、口縁は若干外開き気味に立ち上がる。色調は明橙色を呈する。高台内面にはハケ目調整が施されている。

16から20は甕である。口縁は弱い回転ナデによって仕上げられており、胴部外器面にハケ目調整、内器面には明瞭なケズリ痕が観察できる。頸部内器面には、横方向のハケ目調整が施されるため、内面の屈曲部には平坦面が認められる。胎土はやや荒く、色調が黄白色を呈する。全ての資料には煤が付着しているので、奄美で使用された後に廃棄されたものと考えてよい。口縁が緩やかに外反するもの（16～18）、外折気味に外側へと



第40図 3類土器 (1)



第41図 3類土器（2）

大きく開くもの（19、20）がある。

〈外来系土器〉

21から24は在地で製作された甕である。上述の土師器甕を模倣したものと考えられる。口縁部は短く、くの字状に外傾する。色調は赤褐色を呈し、石灰質の混和材を含む。胴部外器面はナデ調整、内器面は横位のケズリ調整が施されている。

上述した土師器甕と比較すると、口径20cm前後と近い値で、内器面にケズリ調整が施され、口縁部と胴部の境に明瞭な稜線がめぐる点で共通するが、①口縁部が短く、回転を利用したナデ調整が認められない、②外器

面にハケ目調整が施されない、③内器面のケズリの方向が異なる、の3つの点で相違点が認められる。外来土師器甕を忠実に模倣したとは言い難く、見かけ上の模倣にとどまっている印象を受ける。

25、26は布目压痕土器の胴部である。内器面に布目が確認できる。色調は赤褐色を呈し、石灰質の砂粒を多く含む。在地で製作されたと考えられる。焼き塩壺の胴部片であろう。

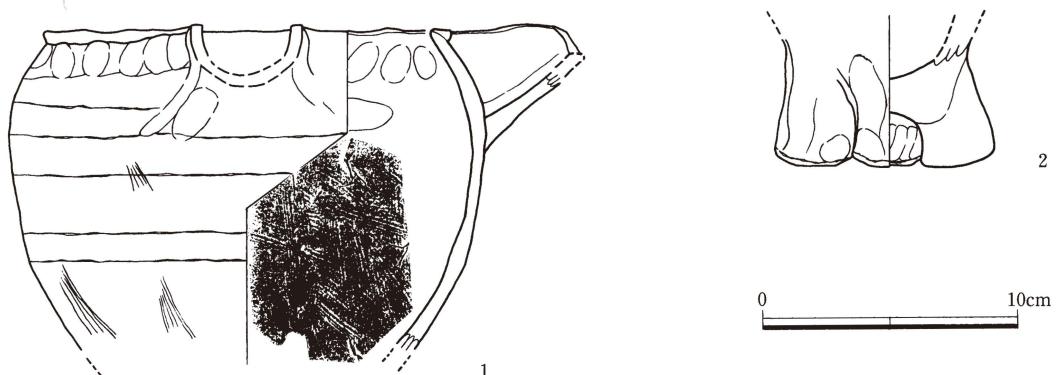
(4) 4類土器

上述の分類には当てはまらず、系統関係不明な特殊なものを4類と扱った。

1は白砂層出土の注口土器である。口縁端部は断面三角形状に肥厚し、比較的大きめな注ぎ口が設けられている。内外面にはハケ目調整が施されている。

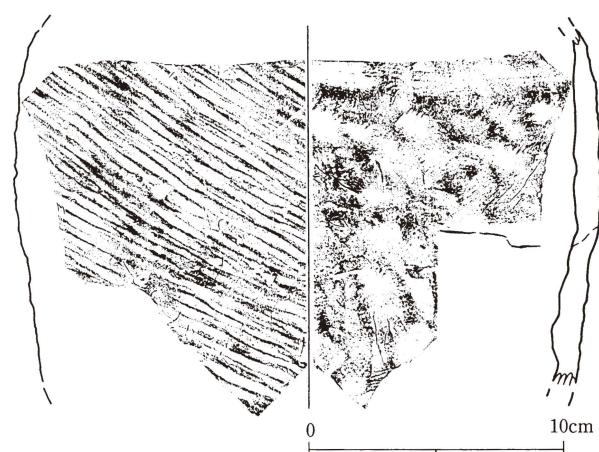
2は四足土器の底部である。第1文下層から出土した。平らな底部に4つの脚が貼り付けられている。内外面に煤が付着しており、火にかけて使用されたことがわかる。底面には砂粒の圧痕が残っているため、砂の上で製作、使用されたと想定できる。

(5) 5類土器



第42図 4類土器

5類土器は、島外産の須恵器である。須恵器は1点検出された。底部から肩部付近の破片資料で、器種は壺と見られる。器形は胴部が張らずに、直線的に伸びる形態である。焼成は良好で、色調は黄灰色を呈する。胎土は緻密で、混和材として石英がわずかに含まれている。外器面には斜位の平行線文叩き文が密に確認され、内器面には親指大の当て具痕が認められる。出土層位は第1文化層であり、平成3年度調査資料24区出土資料と平成16年度調査Mトレンチ出土資料が接合した。



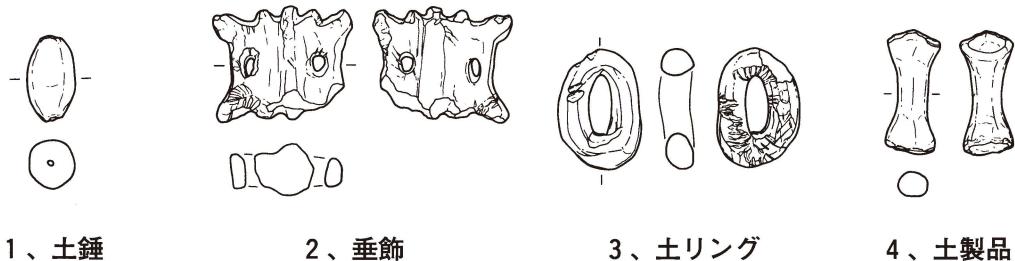
第43図 5類土器

第14表 3類土器観察表

番号	器種	出土地	径 (cm)	器高	成形、調整、文様など						胎土	混和材	焼成			
					外			内								
					口	胴	底	口	胴	底						
1	甕	表採	28.2		ナデ	ナデ		ナデ	ナデ		粗い	石英	良好			
2	甕	不明			ナデ			ナデ			粗い	石灰岩	良好			
3	甕	表採			ナデ			ナデ			粗い	石英	良好			
4	甕	表採	23.2								緻密	輝石	良好			
5	甕	表採	26.4		ナデ	ナデ		ナデ	ナデ		粗い	石灰岩	良好			
6	甕	表採			ナデ	ナデ		指押さえ	ナデ		粗い	石灰岩	良好			
7	甕	13区	26.0		ナデ	ナデ		指押さえ	指押さえ		緻密	石英 石灰岩	良好			
8	甕	表採	28.1		ナデ	ナデ		ナデ	ナデ		緻密	石灰岩 輝石	良好			
9	甕	表採			ナデ			ナデ			粗い	石灰岩	良好			
10	甕	表採	7.0				ナデ ミガキ			ナデ	粗い	石灰岩	良好			
11	甕	不明	8.0				ナデ			ナデ	粗い	石灰岩	良好			
12	甕	不明											不良			
13	壺	表採	17.6		ナデ			剥落のた め不祥			緻密	輝石 石英	良好			
14	椀	12区	11.0		回転ナデ	回転ナデ		回転ナデ	回転ナデ 赤彩		粗い	石英	良好			
15	椀	7区	13.0	9.0	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	緻密	角閃石	良好			
16	甕	5区上			ナデ			横ハケ目	ケズリ		粗い	輝石 石英	良好			
17	甕	10区			横ナデ			横ナデ ハケ目			粗い	輝石 石英	良好			
18	甕	上層	20.0		横ナデ 縦ハケ目	縦ハケ目		横ナデ ケズリ 横ハケ目	縦ケズリ 指押さえ		粗い	輝石 石英 褐色鉱物	良好			
19	甕	6区	22.0		横ナデ	縦ハケ目		横ナデ 横ハケ目	縦ケズリ		粗い	輝石 石英 褐色鉱物	良好			
20	甕		26.0		横ナデ 指押さえ	縦ハケ目		横ナデ 斜ハケ目	横ケズリ		粗い	輝石 石英 褐色鉱物	良好			
21	甕	4区上			横ナデ	ナデ		ナデ	横ケズリ		粗い	石灰岩 石英	良好			
22	甕	17区	24.0		横ナデ	ナデ		横ナデ	横ケズリ		粗い	石灰岩 石英 輝石	良好			
23	甕	3区			横ナデ 指押さえ	横ナデ		横ナデ	横ケズリ		粗い	石灰岩 石英	良好			
24	甕	12区	22.0		横ナデ	横ナデ		横ナデ	横ケズリ		粗い	石灰岩	良好			
25	布目压痕土器	6区				ナデ			布目压痕		粗い	砂粒	良好			
26	布目压痕土器	6区上				ナデ 指押さえ			布目压痕		粗い	砂粒	良好			

2. 土製品

マツノト遺跡からは注目される土製品が3点出土している。いずれも第1文下層からの出土である。1の土錘は縦長の中央に紐通し孔を有している。2の垂飾は左右対照の文様で両左右中央に孔を有している。貝製品を模倣したような垂飾である。3は土製リングをなしている。用途不明な土製品である。4は粘土紐状の中央をしづめて両先端を窪ませている。これも用途不明である。

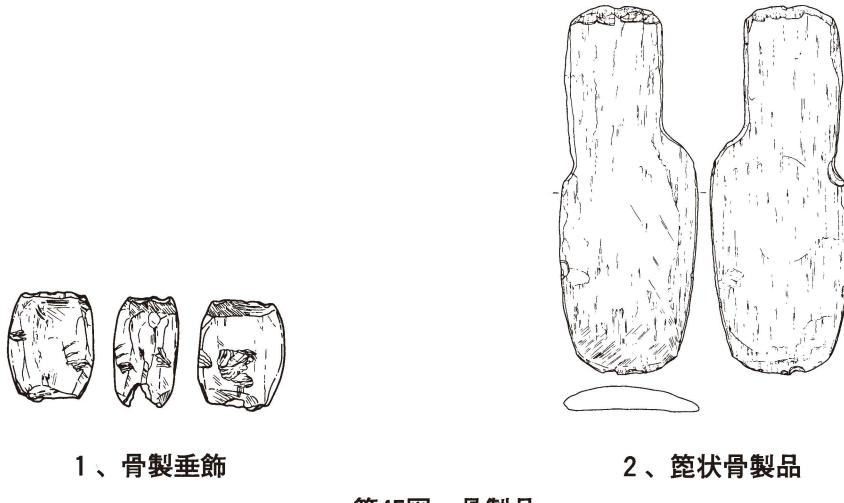


第44図 土製品

3. 骨製品

1の骨種は不明であるが中が空洞になっており、動物の肋骨を利用したものと思われる。外面は丁寧に削られており、両先端部が狭くなっている。これも用途不明の資料である。

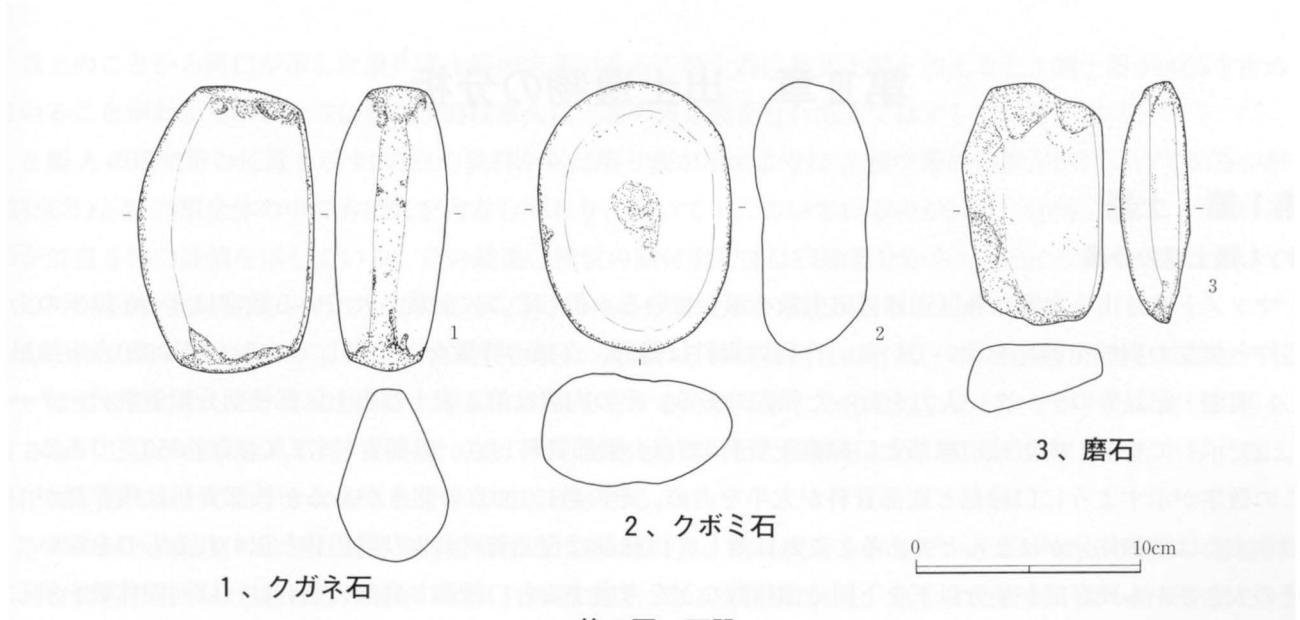
2は大型鯨類の肋骨を利用した範状骨製品と思われる。ヘラ部分の先端を研磨し、有肩状をなしているのが特徴である。



第45図 骨製品

4. 石器

マツノト遺跡出土の石器は大半が磨石と窪み石で第1文化層から出土している。1は小型のクガネ石で上面が細く摺られている。両端は巧打痕が残る。2は窪み石で表裏とも浅い窪みを有している。3の形状は石斧を思わせるが両端とも巧打痕を有している。両面上端とも研磨されている。用途不明の石器である。マツノト遺跡からは石斧の出土はなく、兼久式土器に伴う石器はこうした石器に限られているようである。



第46図 石器



石器C (考古資料大観12 貝塚後期文化より)